岩崎　純一　著

『岩崎純一全集』第七十一巻「芸術、文化、言語、文学（一の一）」

芸術学、文化論、美学、感覚、知覚（一）

編纂、監修　岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第七十一巻を成し、岩崎の言語の著作物のうち、芸術学、文化論、美学、感覚、知覚、とりわけ岩崎個人の共感覚を主とする様々な知覚様態に関する述作を収める。

目次

巻頭言
第一編　〇歳～十九歳
私の共感覚などの変遷
第二編　二十歳～二十九歳
私の共感覚などの変遷
基本的な共感覚（二〇〇五年の初公表時の内容）
『音に色が見える世界　「共感覚」とは何か』（電子書籍版を含む）
基本的な共感覚の続編（詳細な解説・画像・動画）
応用的な共感覚（詳細な解説・画像・動画）
挨拶文　～知覚の不思議をきっかけとして～
共感覚画像
共感覚者としての自覚
共感覚関連リンク
共感覚テストに挑戦＆ある一つの発見
共感覚・閃輝暗点関連リンク（映像）
共感覚の種類一覧（統計と解説）
僕の共感覚体験記（漢字に色が見える共感覚　Chinese charactor-color synesthesia）
ミラータッチ共感覚
僕の共感覚体験記（美術館にて）
僕の共感覚体験記（街中にて）
僕の共感覚体験記（女性について１）
僕の共感覚体験記（女性について２）
僕の共感覚体験記（女性について３）
僕の共感覚体験記（色彩を表す漢字）
僕の共感覚体験記（共感覚を嗜む）
共感覚と真摯に向き合う
共感覚ギャラリー１
共感覚ギャラリー２
漢字の共感覚色一覧
将棋についての共感覚
日本地図についての共感覚
世界地図についての共感覚
自動車についての共感覚
鉄道についての共感覚
元素周期表についての共感覚
対女性共感覚に基づく着物の色目の考案
五月

サイト大幅更新＆ミラータッチ共感覚の図解を載せました。
ここ一週間の訪問者急増の理由は・・・！？
私の著書が出版されました
週刊朝日に書評
週刊朝日の書評全文掲載
共感覚日本地図
アナログに生きる
サイトに新しいコーナーを設けました。
拙著『音に色が見える世界　「共感覚」とは何か』について
共感覚などをめぐる私の動向（模式図）
トークライブに出演します。
ミラータッチ共感覚図解
第三編　三十歳～三十九歳
私の共感覚などの変遷
サイト更新情報【仮想御殿の名前、岩崎式日本語研究会、超音波知覚者コミュニティ】
共感覚立体画像（1）「数字についての共感覚」
伝統和歌＋ＣＧ画像（1）
伝統和歌＋ＣＧ画像（2）
共感覚立体画像（2）「文字よ、立て。」
伝統和歌＋ＣＧ画像（3）
共感覚立体画像（3）「文字が寝そべる。」
「武蔵幻想邸」のページを更新
共感覚立体画像（4）「円周率についての共感覚」
共感覚立体画像（5）「音階についての共感覚」
岩崎純一の共感覚記憶データベース
岩崎純一の共感覚記憶データベース（デパートのフロアガイド版＆３Ｄ映像操作版）
共感覚公表十年目の記念コンテンツの公表と多少の不安
閲覧者の皆様へのお願い
東京工芸大学芸術学部デザイン学科からのインタビュー
第四編　四十歳～四十九歳
第五編　五十歳～五十九歳
第六編　六十歳～六十九歳
第七編　七十歳以降
第八編　著作者の一部および著作権者が岩崎純一であるもの
第九編　著作権者が岩崎純一であるもの

第一編　〇歳～十九歳

私の共感覚などの変遷

一九九六年　メモ開始
二〇一一年四月三日　起筆
二〇一一年四月二十五日　公開
二〇一七年八月十四日　最終更新

一九八二年
◆幼少期の頃から、現在「共感覚」と呼ばれている感覚を自分が持っていることに気づいていたが、「共感覚」の語は知らない状態。

一九八九年～一九九四年（七～十二歳）　小学校時代
◆この頃から、現在に至る様々な学問体系への探究心が芽生える。
◆中学受験の準備が楽しく、勉強に没頭。塾にも自分から行きたがり、行くことになったものの、大勢での集団行動が苦手で、ファミコン世代であるのにファミコンもせず、ひたすら勉強が面白かった。
　また、玩具（レゴブロックなど）のフィギュアに自作の言語を話させ架空世界を創作して楽しんだり、「1+1はなぜ2であるのか」を教師に尋ねた結果「当たり前のことを質問するな」と怒られて泣いたりするなど、ともかく変わった子だった。

一九九五年～二〇〇〇年（十三～十八歳）　中学・高校時代
◆上記の共感覚について、「仮名・漢字など、文字の音・形に色が付いて見える」、「音に色が付いて見える」、「女性が性周期のどの時期にいるか（排卵期・月経期など）が色や音でわかる」などと、自分の言葉で表現できるようになる。
◆また、精神的ストレスを感じたときに、視野に色とりどりの星の模様が現れてキラキラと光るのが見え、それが収まった後に強烈な頭痛を体験するようになる。感覚が起きるたびに保健室で寝込み、たびたび早退もした。（後述の「閃輝暗点」）
　この閃輝暗点は、先の「女性が性周期のどの時期にいるか（排卵期・月経期など）が色や音でわかる」共感覚を感じたときにもしばしば起きていた。

二〇〇一年（十九歳）
◆先述の精神的ストレスや女性の性周期を感じたときに起きる視野の変化・体調不良・頭痛が、偏頭痛の専門分野で「閃輝暗点」と呼ばれている既知の症状であることを、インターネット上で探し当てる。
　古代日本や世界の「月経中の女性の隔離」（月経小屋など）の風習が、「女性差別」ではなく、「女性や子供のために狩猟に行く男性が女性の月経前症候群の心理的・肉体的伝染を受けて狩猟不能にならないための措置」であったのではないかと思うようになる。

第二編　二十歳〜二十九歳

私の共感覚などの変遷

二〇〇一年　メモ開始
二〇一一年四月三日　起筆
二〇一一年四月二十五日　公開
二〇一七年八月十四日　最終更新

二〇〇二年（二十歳）
◆自分の「共感覚」や「閃輝暗点」などを基点として、いわゆる人間の特殊な感覚や社会的少数者に関心を抱き、芸術系サイトや発達障害者団体のサイトなどに書き込んだりメールを送ったりする形で、共感覚者・絶対音感保持者・発達障害者・精神疾患者の方々とネット上での交流を始める。
◆文字や音に色が見える感覚について、すでに欧米では科学的に検証され、「共感覚」という名称が付いている既知の知覚現象であることを知って、拍子抜けする。
　当時、母校の東京大学には、共感覚を知っている先生、共感覚研究者などはほとんどいなかった。

二〇〇三年（二十一歳）
◆自分としては、女性の性周期を見るときも「色で察知」しているため、この感覚を「対女性共感覚」と自ら名付ける。
◆同じ頃、東大その他の精神医学分野におけるアメリカ型の疾病分類法（不安障害、解離性障害、統合失調症、自閉症など）に違和感を覚える。
　岩崎純一が、元々「共感覚」や「サヴァン症候群」など人間の特殊知覚や特殊頭脳を研究するため、「岩崎純一のウェブサイト・ブログ」の運営などの活動を開始。

二〇〇四年（二十二歳）
◆自分の共感覚を自分のサイトやブログ上で公表することを考え始める。この年をもって、人間の知覚・心理全般を扱うサイトとしての公開年とする。
◆共感覚は年齢と共に衰えるとの学説を知るが、自分の場合はこの頃も衰える様子なし。
　※　←←　このときに触れた論文の例。前述の学説が提唱されている。
●Marks, Lawrence E.“Synesthesia: The Lucky People with Mixed-up Senses.” Psychology Today 9, 1975
● Lewkovicz. David and Turkeaitz. Gerald, Intersensory Interaction in Newborn, Child Development 52, 1981
●Maurer, Daphne and Maurer, Charles, The World of the Newborn, New York Basic Books, 1992
◆また、東京大学を中退する。しかも、中退後に、共感覚を研究分

野に掲げる東大の先生方や学生様が現れ始め、少しがっかりする。もう少し長く在籍し、かつ運が良ければ、共感覚を分かって下さる先生や友人に出会えたということを意味する（と思う）。

岩崎が、本業の傍らで、さらに人間そのものを探究するため、単身で精神病理学・精神疾患の研究・フィールドワークを開始。以来、現在に至るまで、共感覚者や、世界保健機関（WHO）の ICD やアメリカ精神医学会（APA）の DSM に定められているほとんどの精神疾患・発達障害・行動障害者、性被害・DV 被害女性など、二百名以上と面識を持つ。これらの人たちが、以後の各サークルの発足に携わって下さる。

岩崎は、これ以降、およそ五十の大学・研究機関などから招聘され、ゲスト講師を務め、ご自身や人間の五感・知覚の不思議をはじめとして、哲学・人文学・言語学・社会学・精神病理学・芸術・美学・数理論理学・物理学などについて講義している。

二〇〇五年（二十三歳）

◆自分の共感覚をサイト上で初めて公表。現在も、以下のページに当時のまま掲載中。基本的な共感覚

◆共感覚のほか、知覚・心理全般（閃輝暗点、鬱、対人恐怖症、不安障害、解離性障害、統合失調症、自閉症、アスペルガー症候群）などにいっそう関心を深め、ネット上で知り合ったそれらの知覚・精神様態を有する方々と面識を持つようになる。

◆欧米の共感覚者・共感覚研究者・精神疾患者・精神疾患研究者との交流も英語で始めるが、自分の共感覚・日本観・精神病理観などが有機的に結び付いている私としては、欧米の合理的・実利的な共感覚観・精神病理観の利点と問題点の両方を感じる。

◆また、言語障害が出るほどの強度の共感覚者や重度の解離性障害者との出会いに心を打たれ、これらの人たちと通じ合える文法を有する自作の言語の考案を始める。

二〇〇六年（二十四歳）

◆SNS の mixi を始める。共感覚コミュニティに入り、急に共感覚者との交流が増える。

◆サイトをより充実させる。共感覚を中心とする人間の知覚・心理全般のサイトとしての姿がほぼ整う。

精神疾患関連のページも設置する。現代日本人の心理の例のページには、交流した皆様の症状のうち許可の得られたものを掲載。

◆上記の言語を「スラフォーリア」（のちの「岩崎式日本語」）と命名。

主に現代日本女性の解離性障害と太古日本女性の「巫病」との共通性をテーマとする言語体系であるため、ロゴマークを「す」と「寸」とを組み合わせた鳥居のマークとする。「スラフォーリア研究会」も発足。

二〇〇七年（二十五歳）

◆共感覚者と積極的に面識を持つようになる。

◆和歌のページを開設。解離症状や共感覚を有する巫女歌人様などとも面識を持つようになる。
◆知覚全般に関する会「空木会（うつぎかい）」や閃輝暗点者・離人症者・強迫性障害者の会「花薄会（はなすすきかい）」を皆でひらく。
◆また、自分の対女性共感覚が、神社の巫女、寺社関係の女性、農家の女性、医療系ライター、助産師、看護師など、専門家の目に触れるようになる。

昔の日本人男性の実像を知るこれら多くの女性から連絡を受ける中で、「昔は、女性の性周期に色が見える感覚は多くの男性に広く共有された感覚だったのではないか」との思いを持つようになる。悩みが薄れ、嬉しさが増し始めたものの、この感覚自体が少しずつ衰え始めていることを自覚。滑稽ながら、記録を少し急ぎ始める。

二〇〇八年（二十六歳）

◆知覚・神経科学系（共感覚・閃輝暗点など）、精神病理学系（ICD、DSM など）、言語・言語学（和歌、自作芸術言語スラフォーリア、言語学全般）などを扱う総合学術サイトの様相となる。
◆鬱、不安障害、解離性障害、統合失調症、自閉症、アスペルガー症候群などの方々と、より多く面識を持つ。「現代日本社会の歪み」について、より深く考えるようになる。
◆この頃、「息子には、あなたと同じく、女性の性周期が色や音で見える共感覚があるようです」とのご報告を多くの主婦の方々から受ける。これにより、対女性共感覚は成長過程で多くの現代日本人男性が失った感覚ではないかと、以前にも増して思うに至る。「擬娩（クーバード）」などは、昔はごく普通に行われていたことを知る。

二〇〇九年（二十七歳）

◆上記のようなご訪問者増加に伴い、よりサイトコンテンツを充実させ、現在のサイトとほぼ同様の形態となる。
◆また、伝統和歌詠者としての仕事も始める。
◆二十五歳時に書いた論考・日記などを中心に書籍の形にした『音に色が見える世界　「共感覚」とは何か』が出版される。

これにより、全国の共感覚者からのメール・mixi などが急増する。うち mixi メッセージを通じた交流は約百三十名を数える。

ただし、ほとんどが一問一答で、サイト・mixi などネットにおける共感覚を通じた出会いをきっかけに面識を持ったのは、四十名ほど。複数回の対面・交流・会合（「共感覚の集い」や「岩崎純一さんのお話を聴く会」など）が続いているのは、そのうち十～二十人ほどである。

一方で、「女性に色が見える」共感覚が「人のオーラが見える」予知能力であると受け取られ、スピリチュアル・カウンセラーや自己啓発セミナー講師としての依頼が来るなど、本来の「共感覚」とは異なった興味の持たれ方も経験した。（全て辞退。）

このような反応は、いわゆる日本人の SNS サイトの使い方の特徴、日本人の「共感覚」に対する興味の持ち方、ある種の日本社会全体の「飢え」を表しており、社会現象として興味深いと感じた。

現在の日本においてなぜここまでスピリチュアル・ブームが流行するのかがよく分かるが、だからと言って、神経科学上の共感覚の解説を当事者が世に向けておこなう試みが頓挫したとは全く思っていない。

この本をきっかけに色々なご依頼を頂き、研究機関での実験への参加、大学での講演、テレビ等のメディアからの取材対応、雑誌への寄稿などを行うようになる。

二〇一〇年（二十八歳）

◆サイト（メール）、サイトのオフ会、大学で担当した授業・講演などを通じて、引き続き皆様と交流。

◆「スラフォーリア」を日記や私とのメールで使用する人が増える。（特に性的虐待を受けた解離性障害者女性による使用が目立つが、同時にそのことにより、私が考案した文法の不備も目立つ。）

二〇一一年（二十九歳）

◆引き続き皆様と交流。個人勉強会・交流会もひらく。

◆東日本大震災発生。色々とバタバタ忙しい中、著書『私には女性の排卵が見える　共感覚者の不思議な世界』が出版される。これによる影響は前著の時と異なり、共感覚の話題を離れた家政・女性・子育て・保育・日本文化・精神疾患・社会問題などの分野において大きかった。

◆対女性共感覚は、自分でも最も興味が尽きない自分の感覚の一つで、一般女性、巫女、地方の農家の女性、疫学者の女性、旧皇族・旧華族の女性などに、女性の排卵や月経の風習などについて尋ねては学び、ヒントを得ながら探究する日々である。

「自らの感覚」の披露だけでは、あまり喜びはなく、むしろ、「日本人の心身のこれから」や「子どもの命」についてのコメントを求められる機会が増えつつあることのほうが嬉しい。

基本的な共感覚（二〇〇五年の初公表時の内容）

二〇〇五年三月八日　起筆

二〇〇五年三月十五日　公開

二〇一七年三月十三日　最終更新

特設サイト「知覚・共感覚」

（二〇一八年七月十四日追記：現在、岩崎の旧サイトの内容は『全集』に収録。）

初めてネットで共感覚を公表したときの文章です。そのまま掲載しておきます。（二〇〇五年執筆）

これ以来、新たな共感覚の紹介（解説・画像・動画）も続けていますので、基本的な共感覚の続編（詳細な解説・画像・動画）や応用的な共感覚（詳細な解説・画像・動画）をご覧下さい。

【二〇一五年新設】

★「脳内デパート版」のほうは、サブタイトルに「私が共感覚を使って記憶・知覚・認知・認識・思考している物事の一覧」と題して、まだサイト内に具体例（ページ・ファイル）を掲載していないものも挙げています。

岩崎純一の
共感覚記憶データベース

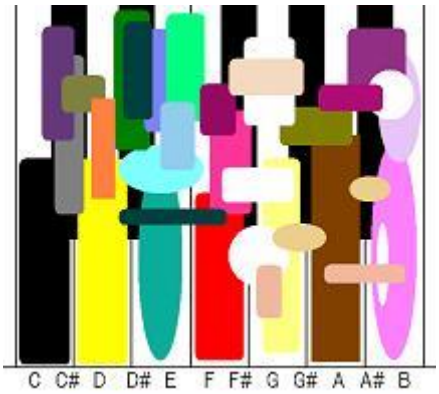
岩崎純一の共感覚データベース（脳内デパート版）
岩崎純一の共感覚データベース（３Ｄ映像操作版）
岩崎純一の共感覚記憶データベース

共感覚　～僕自身の共感覚体験～

◆音に色や形が見える

←【二〇〇五年の執筆時に掲載】

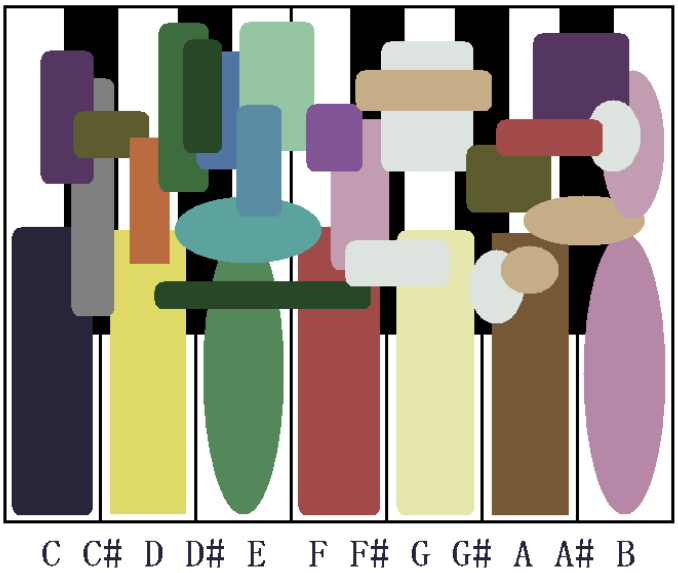
「二〇〇五年時点の共感覚」



←【以下は二〇〇八年十月三日に追記】

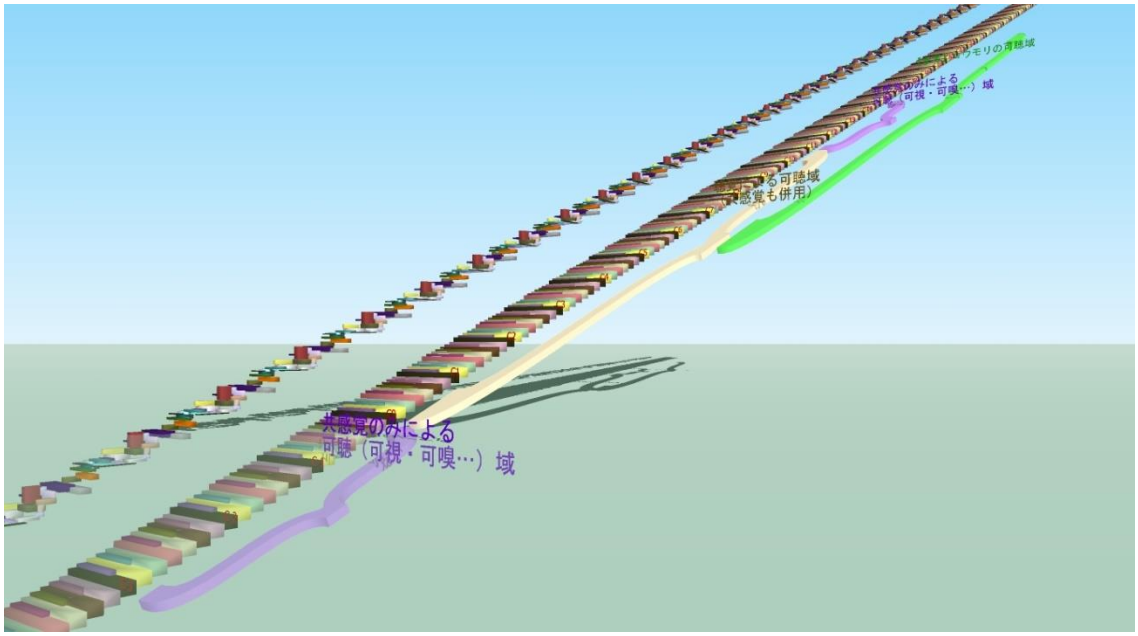
「二〇〇八年時点の共感覚」

（二〇〇五年と比べて、私の描画技術が進んだことが最大の違いですが、消滅した図形がいくつかあります。）



←【以下は二〇一三年一月二十五日に追記】

「二〇一三年時点の共感覚」
（二〇〇五年・二〇〇八年の時からこのように立体に見えていますが、より正確に立体的に描きました。）
こちら（私のブログの立体画像ページに飛びます。）



←【以下、二〇〇五年に書いた本文に戻る。ただし、現在の私の共感覚にも当てはまる内容である。】

まず、「音↔色」の共感覚です。僕は絶対音感を持っており、それはピアノとソルフェージュを始めた幼少の頃からあります。左図のように、僕にとって、周波数262Hz（ヘルツ）のCは黒で、311HzのEbは深緑に見えます。オクターブが違っても、だいたい同様ですが、高い音ほど、明度が増します。

また、鍵盤上の色の形と位置関係にも意味があります。

・長方形・・・音が鳴った時に、角張って聴こえる。眼前もしくは脳裏に四角柱や三角柱が走る。
・角が丸い長方形・・・少しやわらかい。比較的落ち着いて脳裏を滑走する。
・楕円形や円・・・完全な円に近づくほどやわらかい。球状もしくは柔らかい手触りを感じる。
・奥行き・・・鍵盤表面に近い奥、かつ図の下の文字近くに描いている色ほど、基本的に共感覚が強い。重なり合っている部分は、本当はグラデーション状になめらかに移行するように見えている。音楽理論や、曲全体の質、または用いる楽器によって、花火のように見え方が変わります。全てを説明することは、不可能だと感じます。

鍵盤が白と黒でできていることは当然理解していますが、頭では

確実に聴覚と視覚とがはたらいて絵画的にパレットが見えていると言いますか、音波と色彩を行き来することが可能です。また、十代半ばまでは、ある曲のキーを簡単に変えられるということに、耐え難い苦痛を感じていました。

例えば、カラオケでは、歌いやすいようにキーを変更することが可能ですが、これを他人が簡単に変更するということが、僕にとっては音楽全体の色彩・形状、その作曲家の芸術的意思と美学とがごっそり別の芸術作品として移し変えられることに等しかったため、精神的な立ち直りを必要としました。また、そのことが、僕の音楽への探究心を、ピアノや音楽鑑賞以上に、作曲及び作曲家のみが理解しうる感性という、音楽芸術の根源に向かわせた理由の一つでもあります。

しかしながら、クラシックだけでなく、ロックやポップスも心から楽しんで聴くようになった今現在では、感覚としては残存しているものの、精神に悪影響を及ぼすことはほとんどなくなっています。

しかし、やはり作曲、特に純音楽の作曲においては全く感覚が別であり、僕にとって作曲が、「色彩を作曲」し、「形状を作曲」し、「質感を作曲」する芸術としてとらえられている以上、それが完全に作品に投影できない時の苦痛は耐え難いもので、時に発熱・吐き気を伴うものでしたが、純クラシック音楽と DTM とのタッグは自分の共感覚を見事に救ってくれた上、今ではこの感覚とうまく付き合う術がないわけではないことを自覚しております。

◆文字に色が見える（ひらがな・カタカナ・アルファベット・漢字・数字）

仮名（ひらがな・カタカナ）の見え方は左図のようになります。この「文字→色」の共感覚については、ひらがな・カタカナ・アルファベット・漢字・数字、ありとあらゆる文字について持っています。

初めて見た漢字や言語にも色を言うことができますので、たった五十音のひらがな・カタカナなども、文字と色の暗記によるものではないことを確認しています。（最初はそれを自分で疑っていました。）

ほとんどの共感覚者は、ひらがなの中でも、文字によっては色が見えたり見えなかったりするそうで、ひらがなから漢字・数字まで、全てに対して漏れなく色が見えている人は極めて稀有だということを聞いているため、逆に「文字に色が見えない感覚が分からない」僕としては、今一歩踏み込んで探究してみたい、面白い点です。

また、同じ音を持つ文字は、ひらがなとカタカナとでほとんど同じ色に見えていますが、例えばは行（ハ行）などは、両者の間で著しい差があります。この理由を探ってみたところ、定かではありませんが、どうやら僕自身の昔からの文学的・美学的・言語学的・音声学的な興味や古典趣味・探究と関係がありそうだということが分かってきました。

現在も日常生活において、日本の古語及び日本語の歴史に対しては強い美的関心を抱いており、短歌とりわけ万葉集の文体によって自らの作曲技法が変化・感化されたり、古語の旋律線を音楽に適用して作曲を試みるなどしておりますが、「は・ひ・ふ・へ・ほ」が古語に沿って「ふぁ・ふぃ・ふ・ふぇ・ふぉ」と発音された場合に僕の脳裏に走る色彩の微細な変化、絶対音高などが、この共感覚に影響しているものと思われます。

◆文字や風景や人の姿から作曲する

文字そのもの、あるいは風景そのものから感得したものを曲に写生する、人の姿を作曲する、という僕の共感覚は、クラシック系音楽の作曲をする人の中でも珍しいかもしれません。多くの人の意見によると、どうやらこの辺りが、先の「文字←色」の普遍性の一方で、一般的な共感覚と異なる僕の共感覚の特殊性を形作っている領域のようです。

これは、いわゆる文学作品や風景をモチーフとして作曲をする、とか、シェイクスピアをオペラにする、などという感覚とは全く異なるものです。我々が風の強い真冬に外出した時に「寒い」と感じるように、また画家がモデルをキャンバスに描き出すように、僕が見たものそのものに、音楽を感じるものです。画家が女性の姿を絵画に再現するのと同じように、女性の表情・仕草そのものを音楽において想起できるものです。

実際、何人かの方には、曲を作って差し上げたことがあります。また、これはおそらく僕の記憶術とも関わっており、例えば、逆にその音楽を想起することで、特定の人の姿や心に響いた風景を連動させて想起することがあります。

ただ、これについてはそうしばしば起こる共感覚というわけではなく、ある時における、ある気温における、ある場所における風景・文字・美術作品・人の姿・女性の表情など、特定の場合にしか、「作曲スケッチ」を行うことはできません。また、それが可能な場合に

は、非常に壮大な感動を覚えることが多いですし、その状況がいつ現われるか、その状況において作動する五感が何であるかを、あらかじめ特定することは難しいようです。

理由はあろうかと思いますが、描けたり描けなかったりすることそのものが体験の全てです。

以下に、面白い実験として、「共感覚」という文字そのものを曲に描いたものがありますので、載せておきます。これは、僕の持つ「共感覚」という概念について持っているイメージとはまた違うものです。

←「共感覚」の文字についての音源

『「共感覚」への共感覚の音楽』

◆人の声に色や形が見える

前項で書いたように、人の姿や表情にも音・色・形を感じますが、やはり人の声そのものに色や形を感じる感覚も強いようです。あらゆる五感について共感覚を持っているとは言っても、やはり音・音声・音楽を中心とした共感覚のネットワークが、僕の脳には存在しているのかもしれません。ある人の声は青色だったり、ある人の声は円柱であったり、ある人の声はヘ短調であったりします。

◆壁の見えない共感覚

さて、最も強く自覚している共感覚をいくつか挙げてみましたが、そもそも僕の共感覚は、壁があってないような感覚であり、五感を総動員して感得しているものであると言えるのかもしれません。

僕の場合、共感覚の中でもポピュラーな「音←色」「文字←色」の共感覚もある一方で、一般の共感覚には見られない種類と強度のものがあるようで、また確かに特殊なものにおいては、時に日常生活の中において支障をきたす場合があることを自覚しているのは事実です。

幼少より自覚はあったものの、ここ数年のうちにそれだと気付いた共感覚には、例えば「音←匂い・形」「人の声←色・匂い・形」「写真・風景←匂い・音（人の表情や景色を作曲できる）」など、「匂い」

が混在する共感覚があります。先述の各共感覚ほどには頻繁でないにしても、匂いが実感として感じられることがあります。

しかしながら、これも「花の写真を見て花の香りを思い出す」という感覚とはまるで違います。例えば、ステレオから流れてくる音楽の特定の和音に花の匂いがする、という実体験です。

以下に、僕にとって「数字が何色に見えているか」「アルファベットが何色に見えているか」「特定の音高の音が何色と何の映像や質感を眼前に浮かばせるか」を、図にしてみました。

494Hz：B
466Hz：A♯（B♭）
440Hz：A
415Hz：G♯（A♭）
392Hz：G
370Hz：F♯（G♭）
349Hz：F
330Hz：E
311Hz：D♯（E♭）
294Hz：D
277Hz：C♯（D♭）
262Hz：C

《それぞれの音に感じる共感覚。数字は、A1（ラ）を440Hzで調律した時の周波数、単位Hz（ヘルツ）》

○レ♯はド♯と同じだが、厳密には異なるので、共感覚色も違う。ド♯の時より、レにひきずられて明度が増し、「太陽が昇りかけた夜明け」などの感覚が呼び起こされる。他の半音についても同じ。また、平均律楽器であるピアノでは、レ♯とド♯は全くの同音として扱われるが、その両者に対する僕自身の共感覚は異なるもので、僕の共感覚が長年のピアノ教育によるものではない可能性があることを（論理上も自覚としても）示している。

○あくまで、特定の周波数の音を聴いた時に、共感覚として想起される色の一部であって、これら以外にも想起されるものはあり、また作曲をする時に、これら以外の色で作曲ができないということではない。例えば、純音楽・クラシックを作曲する際には、この共感覚に従うことを願望する上に、そのように音符を書くが、バレエ音楽などの依頼では、全く異なる要求に沿って曲を書いている。

○各音高の周波数を、それぞれ二倍・二分の一倍すれば、オクターブ上・オクターブ下の周波数が得られる。

【シ・・・約494Hz】
白、桃色、薄い桃色、花、桜、優しさ、悲哀、哀愁

【ラ♯（シ♭）・・・約466Hz】
濃い桃色、黄土色、深い桃色とこげ茶色の穏やかな交じり合い、深い愛、安定

【ラ・・・約440Hz】
茶色、土、大地、自然、木、山、荒野、武士道

【ソ♯（ラ♭）・・・約415Hz】
茶色、こげ茶色、小麦色、和室、畳、仏教、和服

【ソ・・・約392Hz】
白、肌色、クリーム色、はかなさ、弱さ、淡い光、甘さ

【ファ＃（ソb）・・・約370Hz】
薄桃色、薄肌色、薄紅色、不安定、不安感、白と黄と赤の花畑

【ファ・・・約349Hz】
赤、紅、桃色、心臓、血液、赤い薔薇、華やか、生命、生命力、燃焼

【ミ・・・約330Hz】
青緑、水色、水色と薄緑の穏やかな交じり合い、水、清涼、聡明、湖、霧、涙

【レ＃（ミb）・・・約311Hz】
深緑、黄緑、深緑の季節、自然、山、森、林、川の中

【レ・・・約294Hz】
黄、オレンジ色、太陽、炎、輝き、権力、意志、まぶしさ、光明

【ド＃（レb）・・・約277Hz】
濃い灰色、濃い茶色、濃い紫色、暗黒の中の光明、夜明け、神仏

【ド・・・約262Hz】
黒、暗黒、大地、落ち着き、宇宙、最高神、トンネル、夜、無、無我、涅槃、武士道

【追記】

私のGrapheme-color synesthesiaのうち、私にとって最も面白く、味わい深いものの一つが、漢字に色を見る共感覚です。

二〇〇五年時点の画像

二〇〇九年に、色相を細かく修正しつつ、全体をやや彩度の低い色で描き直した画像

○部首を付けた時と付けない時で、漢字の色がどう変わるかを試すのが面白い。
○実際に見えている模様の細部までは描けないので、便宜上、明確に塗り分けています。
○ご覧の通り、全く規則性がなく、漢字を実際に見てみないと分からないのです。
○見たこともない難しい漢字についても、すぐに色を言うことができます。

○つまり、漢字についても、数の少ない仮名文字や数字についても、文字と色との対応をあらかじめ記憶しているわけではありません。

さて、そこで、パーツごとに切り離した状態からだんだんと近づけていくとどう見えるか、という疑問が湧いてくるでしょう。では、「恋」を例にとります。

つまり、「注視点または注視点に近い範囲にどういった形のものが見えているか」で色が変わってくるのだと、私自身は分析しています。

「恋は水色」などと言いますが、私にとっては半分納得！といったところでしょうか。

『音に色が見える世界　「共感覚」とは何か』（電子書籍版を含む）

岩崎純一　著
二〇〇五年六月三日　起筆
二〇〇九年九月十五日　出版、発売
新書本及び電磁的記録（電子書籍用各データ）
書店、電子書籍販売サイト、出版社、国会図書館、公立図書館有料（国会図書館、公立図書館を除く）
株式会社ＰＨＰ研究所
ＰＨＰ新書
ISBN 978-4-569-77109-0
著作者が出版社に権利の一部を譲渡
著作者及び著作権者への問い合わせが必要

目次

■序　私がこの本を執筆した理由
■第１章　共感覚とは何か
　共感覚とは何か/共感覚ではない感覚/私の感覚世界の模式図/文字に対する共感覚/数字に対する共感覚/音に対する共感覚/女性に対する共感覚/対女性共感覚をもたらすのは女性ホルモンか？/共感覚者は非共感覚者の見ている世界が見えないのか？/共感覚者どうしは同じ世界を見ているのか？/「赤は熱く、青は冷たい」のは感覚ではない/共感覚者は記憶力がいいのか？
■第２章　日本文化の原風景としての共感覚
　私の前言語的記憶/文字の創作/日本語への確信/日本文化論としての共感覚論/日本の伝統色と色名/現代日本人の共感覚者の実験/日本語にはもともと「あか・あを・しろ・くろ」しかなかった/色彩語の変遷/同じ色を見ていても、世界の「見え方」が違う/女性の「にほひ」/感覚動詞の欧米化/「きく」もあらゆる身体感覚を含んでいた/外国語の感覚動詞/日本人にとっての「色」/聴覚言語から視覚言語への変化が共感覚を失わせた/それでは漢字は不要なのか？/現代日本語で共感覚を語るということ
■第３章　共感者覚男性として
　共感覚の共時的考察/共感覚者に女性が多い理由/共感覚は障害ではない/対女性共感覚はどのように感じられるのか？/男性はなぜ対女性共感覚を失ったのか/日本語の「唇」と英語の「lip」/恋とは何か

〈男性の共感覚者として
■あとがき

基本的な共感覚の続編（詳細な解説・画像・動画）

二〇〇六年一月十七日　起筆
二〇〇六年二月十八日　公開
二〇一七年十月三日　最終更新
特設サイト「知覚・共感覚」
（二〇一八年七月十四日追記：現在、岩崎の旧サイトの内容は『全集』に収録。）

基本的な共感覚（二〇〇五年の初公表時の内容）の詳しい続編です。
必要に応じ、ユーザー名・パスワード共に「iwasaki-j」でご覧下さい。
さらなる応用編は、応用的な共感覚（詳細な解説・画像・動画）をご覧下さい。

漢字の共感覚色一覧
共感覚立体画像（1）「数字についての共感覚」
共感覚立体画像（2）「文字よ、立て。」
共感覚立体画像（3）「文字が寝そべる。」
共感覚立体画像（4）「円周率についての共感覚」
共感覚立体画像（5）「音階についての共感覚」

【参考】

私の知覚世界の解説など
直観像記憶と共感覚
喪失した共感覚
私の共感覚などの変遷

【二〇一五年新設】
★「脳内デパート版」のほうは、サブタイトルに「私が共感覚を使って記憶・知覚・認知・認識・思考している物事の一覧」と題して、まだサイト内に具体例（ページ・ファイル）を掲載していないものも挙げています。

岩崎純一の共感覚記憶データベース

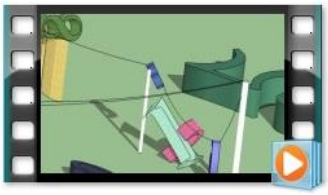
岩崎純一の共感覚データベース（脳内デパート版）
岩崎純一の共感覚データベース（３Ｄ映像操作版）
岩崎純一の共感覚記憶データベース

漢字の共感覚色一覧

●漢字の共感覚色一覧（解説）（PDF）
●漢字の共感覚色一覧（約三千字）（PDF）

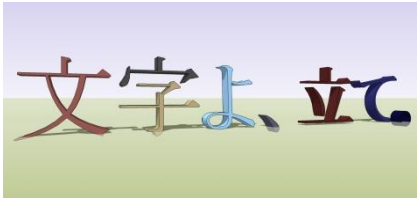
共感覚立体画像（１）「数字についての共感覚」

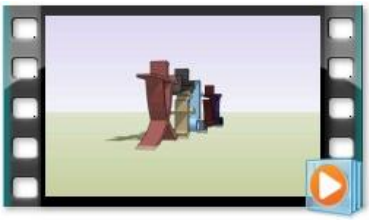
●共感覚立体画像（１）「数字についての共感覚」（ブログ記事）
●数字についての共感覚（当サイト内の動画）
●数字についての共感覚（YouTube 動画）
●数字についての共感覚（Sketchfab での３Ｄ手動映像。SketchUp で制作。）



共感覚立体画像（２）「文字よ、立て。」

●共感覚立体画像（２）「文字よ、立て。」（ブログ記事）
●「文字よ、立て。」についての共感覚（当サイト内の動画）
●「文字よ、立て。」についての共感覚（YouTube 動画）
●「文字よ、立て。」についての共感覚（Sketchfab での３Ｄ手動映像。SketchUp で制作。）



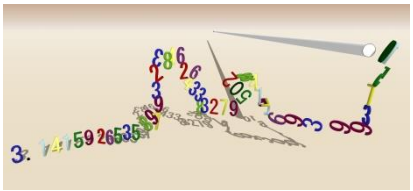


共感覚立体画像（3）「文字が寝そべる。」

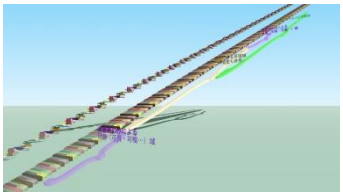
●共感覚立体画像（3）「文字が寝そべる。」（ブログ記事）
●「文字が寝そべる。」についての共感覚（当サイト内の動画）
●「文字が寝そべる。」についての共感覚（YouTube 動画）
●「文字が寝そべる。」についての共感覚（Sketchfab での３Ｄ手動映像。SketchUp で制作。）

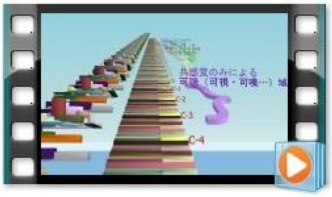
共感覚立体画像（4）「円周率についての共感覚」

●共感覚立体画像（4）「円周率についての共感覚」（ブログ記事）
●円周率についての共感覚（当サイト内の動画）
●円周率についての共感覚（YouTube 動画）
●円周率についての共感覚(Sketchfab での３Ｄ手動映像。SketchUp で制作。）



共感覚立体画像（5）「音階についての共感覚」





●共感覚立体画像（5）「音階についての共感覚」（ブログ記事）
●音階についての共感覚（当サイト内の動画）
●音階についての共感覚（YouTube 動画）

応用的な共感覚（詳細な解説・画像・動画）

二〇〇六年一月十七日　起筆
二〇〇六年二月十八日　公開
二〇一七年十月三日　最終更新
特設サイト「知覚・共感覚」
（二〇一八年七月十四日追記：現在、岩崎の旧サイトの内容は『全集』に収録。）

基本的な共感覚（二〇〇五年の初公表時の内容）および基本的な共感覚の続編（詳細な解説・画像・動画）の応用編です。
必要に応じ、ユーザー名・パスワード共に「iwasaki-j」でご覧下さい。

将棋についての共感覚
日本地図についての共感覚
世界地図についての共感覚
自動車についての共感覚（日産自動車、スカイラインを例に）
鉄道についての共感覚（東京メトロ、都営地下鉄、丸ノ内線を例に）

ゲーデルの不完全性定理の証明についての共感覚
元素周期表についての共感覚
音域表と聴覚・共感覚
和歌を詠む際に脳内に出現する風景のＣＧ画像化
ミラータッチ共感覚図解
対女性共感覚に関する種々の試み
音楽『花　・共感覚者五十人による -』

【参考】

私の知覚世界の解説など
直観像記憶と共感覚
喪失した共感覚
私の共感覚などの変遷

【二〇一五年新設】

★「脳内デパート版」のほうは、サブタイトルに「私が共感覚を使って記憶・知覚・認知・認識・思考している物事の一覧」と題して、まだサイト内に具体例（ページ・ファイル）を掲載していないものも挙げています。

岩崎純一の共感覚記憶データベース

岩崎純一の共感覚データベース（脳内デパート版）
岩崎純一の共感覚データベース（３Ｄ映像操作版）
岩崎純一の共感覚記憶データベース
将棋についての共感覚
●将棋についての共感覚（盤面上における共感覚および文字についての共感覚色との比較表）（PDF）
日本地図についての共感覚
●日本地図についての共感覚（PDF）
世界地図についての共感覚

●世界地図についての共感覚（PDF）
自動車についての共感覚
●自動車についての共感覚（日産自動車、スカイラインを例に）（PDF）
鉄道についての共感覚
●鉄道についての共感覚（東京メトロ、都営地下鉄、丸ノ内線を例に）（PDF）
ゲーデルの不完全性定理の証明についての共感覚
●ゲーデルの不完全性定理およびその証明への私の共感覚による理解方法の解説（PDF）
元素周期表についての共感覚
●元素周期表についての共感覚（PDF）
音域表と聴覚・共感覚
●音域表と聴覚・共感覚（PDF）
和歌を詠む際に脳内に出現する風景のＣＧ画像化
●伝統和歌＋ＣＧ画像（１）
●伝統和歌＋ＣＧ画像（２）
●伝統和歌＋ＣＧ画像（３）
ミラータッチ共感覚図解
●ミラータッチ共感覚図解（PDF）
対女性共感覚に関する種々の試み
●私の対女性共感覚記録（PDF）
●対女性共感覚に基づく着物の色目の考案（解説）（PDF）
●対女性共感覚に基づく着物の色目の考案（色目一覧）（PDF）
●交響組曲　『月ノ巡リ』
音楽『花　‐共感覚者五十人による‐』
●音楽『花　‐共感覚者五十人による‐』

挨拶文　～知覚の不思議をきっかけとして～

二〇〇七年五月二十五日　起筆、擱筆、公開

●はじめまして。私は、共感覚と呼ばれる知覚を持っている、一九八二年生まれの男性です。二〇〇三年頃に、自らの持つ感覚が「共感覚」と呼ばれるものであることをネット上で見出し、二〇〇六年頃より、最近話題の「mixi」の中でもしばしばこの共感覚について語っていたところ、それらを通じて、同じく共感覚者の方々や、私の感覚に関心を持って下さる方々に出会い、また共感覚を研究されている方に協力させていただくなどするようになりました。

共感覚も、ずいぶんと人口に膾炙するようになりました。それはそれで、理解者が増えて嬉しいことではありますが、そもそも普段の生活の中で語る機会、理解される状況がないじれったさを契機に、このブログを始めたわけで、皮肉だなと苦笑しています。共感覚とは、私が思うに、一人の人間の人生哲学であって、それをここで語らせてもらう以上は、ただ「文はやりたし書く手は持たぬ」ではいけないという意識を、自分に対して課すつもりです。従って、このブログでは、共感覚を日記調で語るのではなく、広く人間の知覚の不思議であったり、人文的見地から日本や東洋の文化、人の感性の美しさについても、言及しています。

これまで、なぜ共感覚の告白の場をmixiのみに限っていたかと言えば、私の中に、相手と共感覚を語るという以前に、お互いに「人」対「人」として、真剣に静かに物事を語っていける関係でいられるかどうかを、まずは見たいという強い思いがあり、閲覧者をあえて選びたかったためです。そういった有意義な関係でいられてこそ、初めて「私は共感覚者です。」と、お互いに確信と誇りを持って言えるのではないかと思います。

このブログでは、私の共感覚を、自分自身に対する、一生を通じた確認の形ということも含めて、書いていこうと思いますので、参考にしていただければ嬉しいです。

「共感覚」という言葉を知ってからもそうですが、私の中には、幼い頃よりずっと、「私は世界の見え方が人と違う。」という不安感や恐怖感がありました。共感覚が私にとってそれだけ深いものであるからこそ、深い洞察と広い視野とを持って語りたいものです。子どもやかつての全てのヒト、かつての日本人と日本文化が持っていたはずの共感覚が忘れられ、人間の豊かな感性が失われゆく昨今を見せ付けられるにつけ、「共感覚者」の唯一の定義は、「自分自身の感性に能動的に苦労し、感動しつつ生きる人」であると言っても、過言ではありません。そういう方と今後もっと出会って、有意義な人間関係を築けたら、どれほどすばらしいことだろうと思っています。

●以下が、共感覚関連の文献・最新の共感覚情報・海外の科学関連サイトの記事などに基づいて私の書いた、共感覚の解説です。

http://ij-art-music.sblo.jp/article/4838539.html

●以下が、私自身の共感覚のうち、ごく一般にも知られている共感覚について記述しているページです。共感覚をはじめて知った方は、こちらからどうぞ。

http://www.ij-art-music.com/synaesthesia/my_synaesthesia.html

●ネット百科事典の「ウィキペディア」の「共感覚」の項も参考にしてみて下さい。

http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%85%B1%E6%84%9F%E8%A6%9A（共感覚）

■厳守事項

●超常現象・オカルト・スピリチュアル・新興宗教関連のメールは一切受け付けておりません。また、返信も致しません。それらの学問的研究に関するもののみ、この限りではありません。管理人である私の共感覚や文章をオカルト・スピリチュアル方面に利用・紹介することもおやめ下さい。メールをお送りいただく際には、社会的常識をご遵守下さい。

●心理学等の研究者・専門家との交流を中心に、学問・文化のためとの思いで共感覚研究に協力させていただいておりますが、私個人はいかなる心理学の学派・潮流にも与するものではありません。ご了承下さい。

●当ブログやサイトの画像等を無断で転載・使用しているサイトが見受けられますが、一切許可は致しておりません。

共感覚画像

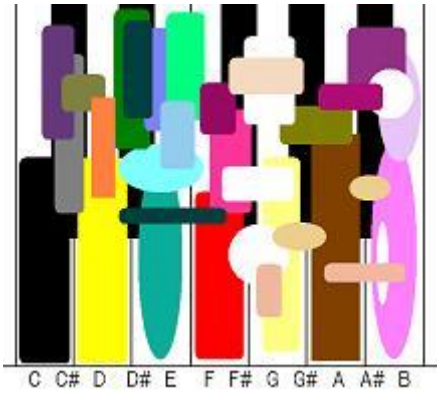
二〇〇七年五月三十日　起筆、擱筆、公開

十二平均律鍵盤楽器の音高色と形

ひらがな・カタカナ色

494Hz：B
466Hz：A♯（B♭）
440Hz：A
415Hz：G♯（A♭）
392Hz：G
370Hz：F♯（G♭）
349Hz：F
330Hz：E
311Hz：D♯（E♭）
294Hz：D
277Hz：C♯（D♭）
262Hz：C

上記の音高を基本周波数で掲げる



アルファベット色

1234567890

アラビア数字色

ん	わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
	み	り		み	ひ	に	ち	し	き	い
		る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う
	ゑ	れ		め	へ	ね	て	せ	け	え
	を	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お
ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
	ヰ	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
	ヱ	レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ

ABCDEFGHIJKLMN
OPQRSTUVWXYZ
abcdefghijklmn
opqrstuvwxyz

共感覚者としての自覚

二〇〇七年六月六日　起筆、擱筆、公開

今や「心脳問題」については、多くの研究者が挑んでいるけれど、一番有名なところで言うと、脳科学者の茂木健一郎氏の「クオリア」についての考え方には、共感覚者の立場から見て、ある程度の共感を覚えないわけではない。もちろん、男性共感覚者としての自分を満足させることを言っているのは、過去の哲学者か、仏教か、そのあたりしかない、なんて率直に言ってしまうと、もうそれまでだけれど、やはり外の学術分野が気になって覗いてしまう、これはけっこう大切なことだとは思っている。

「クオリア」には、「感覚質」という訳語があるけれども、僕は「主観的体験」というストレートな術語が好きで、先日、自分の共感覚についてちょっとした講演をさせていただいた時も、「主観的体験としての共感覚、及び共感覚の芸術的表現」なんて、タイトルにこだわってみた。

「クオリア」というのは、人間の知覚の解明に自然科学的態度で挑むということを重視する意味で使われるから、哲学と芸術に力点を置く僕は、「主観的体験」と言ってみたかっただけだけれど。それは前置きとして・・・。

「脳が分かれば、心が分かるか」という問いについて、答えを与えようとしてなされている諸分野での研究は、それはそれで僕だって興味がある。

そもそも「共感覚者」にとっては、自分の知覚の仕方は、「共感覚」と言うよりは、個性のうちだから、本当は「共感覚」という言葉を使うことによって、他の人間との知覚に差を設けるなんてことはしたくないと思ってしまう。しかし、「音楽を聴いて、イメージではな

い実際の嗅覚として、匂いがする」といった感覚を、きちんと理解してもらうためには、どうしても「共感覚」という言葉を用いるしかない。

しかし、「共感覚」という言葉を用いること自体が、同時に「共感覚を持たない人間の群」を規定することになるのだから、そうである以上（「共感覚」なる言葉を僕ら共感覚者が拝借している以上）、他の学術分野の動向もきちんと追っていく知的態度と教養は、共感覚者には必要だと思っている。

突然、人に向かって、前回のブログのように「僕は景色に音が聴こえる」だとか、「手で触らずに人や物を触れる」などと言っても、パッと理解する人が、共感覚者以外にまずいないのは当然で、しかし、そこでそれなりに論拠をもって、「これは共感覚と言って、すでに学際的な研究の対象となっているのだ」と言ってしまえれば、それは非共感覚者に対して説得力がある。でも、これはよく考えたら、寂しいことでもあると思う。

「うつ」にしても、「今日は嫌いな人と話していて、チョーうつ状態で・・・」などと、皆が「うつ」の語を日常で多用しているために、本当に「うつ」で悩んでいる人が陰に隠れてしまう社会である。要するに、「うつ」というネーミングが、「うつ」の真相をどこかに追いやるという、本末転倒のことが起こりやすい。

共感覚についても同じで、共感覚という語を用いることによって、共感覚のインフレが起こって、真性の共感覚が隠れるようなことは、やはり避けないといけない。「共感覚は、イメージ・比喩・連想・想念・想像などではない。クオリアである。」ということは、少なくともきちんと定義として守られるべきだと思う。

しかし、かと言って、多くの共感覚者にしてみれば、「そんなこと言ったって、そもそも人と違う自分のこの感覚が、本当に脳の表象として、全てを言語化して説明できるのだろうか」という疑問を持つのではないかと思う。僕だってそうだ。わざわざ「共感覚」というネーミングで、人とは違う自分の知覚を説明しなければならないこと自体が、自分の感性を狭めるような、ある種の制約だと思う。

僕が、自分の共感覚も含めて、本当に目標としていることは、主体的な人間の生・自我というものの自己同一性・一回性・唯一性を、最小単位としての”個体”そのものに宿るものと見て、東洋的な「生の哲学」を志向することにある。

http://dic.yahoo.co.jp/dsearch?p=%E7%94%9F%E3%81%AE%E5%93%B2%E5%AD%A6&enc=UTF-8&stype=0&dtype=0&dname=0ss

言い換えると、重視しているのは、「脳が分かれば、心が分かるか」よりも、「心が分かって、脳が分からないのが、人間の現実存在性である」ということを最初から前提として、いわば「身心一如」（＝体と心とは一体不可分のものである）を追求することだ。

「失恋したら、本当に病気になった」「緊張して腹が痛くなった」と言うように、「身心一如」なんて、人間にとって当たり前じゃないかということになるかもしれないが、案外当たり前のことにはなっていないと思う。

でも、一つの提案として、真摯に自分の感性と日々向き合っている共感覚者には、何も推論や思弁としてではなく、最初から実感として「身心一如」を理解できると思うけれども、どうだろうか。自分の共感覚を心から楽しんだり、共感覚と懸命に闘って生きていると思える人と話をしていると、そういったことがひしひしと感じられて、いつも嬉しくなる。

共感覚関連リンク

二〇〇七年六月八日　起筆、擱筆、公開

●しばしば見ている松岡正剛氏のサイトに、共感覚の本（Cytowic著）について非常に的確な解説があったので、リンク。本自体はもう古いけれど・・・。

http://www.isis.ne.jp/mnn/senya/senya0541.html

（引用）「なぜ一部の人々は共感覚をもっているのか」と問うことが間違っていたのである。むしろ「なぜ一部の人々は共感覚が意識にのぼるのか」と問うべきだった。（中略）

問題は共感覚のアリバイがどこにあるかということよりも、われわれの自己意識はいつのまに共感覚を使わないように発達してしまったのかということが問題になってくるはずである。（引用終）

前々回の僕のブログとたいだい同じです。

これに加えて、音楽理論や民族や男女差の観点で、「日本人男性は、なぜ、いつ、どのようにして共感覚を失ったのか。」「なぜ共感覚者のうち、圧倒的多数を女性が占めているのか。」「日本や東洋の音楽理論や文化観の絶対的な共感覚性は、ヒトの進化の過程のどこで生じたか。」を追っていきたいというのが、僕の考えです。

●他にも共感覚関連リンク

（素晴らしい共感覚の記述）

http://www.tulip.sannet.ne.jp/jyugem/kannkaku.htm

http://members.jcom.home.ne.jp/matumoto-t/kenji5.html

http://www.nikkei-bookdirect.com/science/page/magazine/0308/sense.html（日経サイエンス）

http://www.kansai-u.ac.jp/Fc_soc/column/detail.cgi?id=20050920142013（芭蕉と共感覚）

なんだか、大伴家持が万葉集で、「振り放けて三日月見れば一目見し人の眉引き思ほゆるかも」と、三日月を女性の眉にたとえて詠んだことを、「日本人男性が本来持っていた、太古以来の共感覚性」を物語っていると言ってしまうのも、決して暴論でもないと、ふと思ってしまった昨夜。

共感覚テストに挑戦&ある一つの発見

二〇〇七年六月十四日　起筆、擱筆、公開

●http://www.synesthete.org/　（The Synesthesia Battery）

先日僕が参加した、ネット上でできる共感覚テストのサイトです。（英語です。）

文字や曜日・月の名前が、ランダムに3回ずつ出てきて、それが何色に見えるかを、自分でパレット上で作ってクリックしていくテストです。

もちろん、非共感覚者にはどの文字・単語とも黒色にしか見えず、このようになるそうです。

→　http://www.synesthete.org/img/NonSynRep.jpg

共感覚者なら、見えている色をそのまま作ればよいので、3回とも類似した結果になるはずだという観点のようです。この調査では、結果の数値が 1.00 を下回れば、真性の共感覚者であると定義しているようです。

一つ、教訓なのですが、もし試される場合は、同じ部屋で（部屋の電気を同じ状態にして）、同じパソコンで、同じ天気の日に、同じ時刻あたりに、落ち着いて解きましょう。と言いますのが、テストが長かったので、日を分けてしまい、作曲専用パソコンでついでに解

いたり、解像度やコントラストが違う別のパソコンで解いたり、途中で電話が鳴ったり、かなり邪念が入った（！）ので、自分に見えている色が変化してしまい、画面上の色を作りきれず、これはじれったいなあ、困ったなあと思って、仕方なく諦めたところがあります。

こういった細かい事態は、研究者側は想定していないでしょうし、文字や単語に見える細かい色の違いや模様などを考慮していない点が不十分ですが、それを差し引いても、なかなか面白い試みだと思います。（部屋の電気やパソコンの機種・解像度・コントラストの違いは、さすがに盲点でした・・・。一つ勉強です。）

僕の結果→
gcj.jpg
mcj.jpg

共感覚・閃輝暗点関連リンク（映像）

二〇〇七年六月十七日　起筆、擱筆、公開

●共感覚映像

http://synaesthesia.uwaterloo.ca/Global_small.wmv（ウォータールー大学）

http://www.youtube.com/watch?v=qQcqztQQIu4（神経科医ラマチャンドラン氏）

http://www.youtube.com/watch?v=DvwTSEwVBfc
（Dr. EAGLEMAN'S LAB）

http://www.netrush.jp/kansei_archives/kansei_01/player.html?url=kansei_01_0.asx
（感性ジャーナル　「共感覚」　工学院大学　椎塚久雄氏）
（二分三十秒あたりの司会の女性の間違った発言に、思わず「そうですね。」と答えてしまう場面に苦笑しますが、共感覚者の皆さんは、気を楽にして聞き流しましょう。もちろん、共感覚は、”単語の上では”いわゆる「共感」とは何の関係もありません。大切なことなので、念のため付記。）

●閃輝暗点映像

（この症状をお持ちの方へ。映像を見ることによって、精神的な影響から症状を誘発する可能性があるので、ご自分の意志でお願いし

ます。そう言う僕は見たわけですが。）

http://www.youtube.com/watch?v=wY0-uYmm3NA
（http://www.MigraineArchive.com/より　閃輝暗点・Migraine Aura）

これは閃輝暗点という症状です。僕の場合、これが起こっている時、視野のほとんどが消失し、その後の頭痛の最中は、言葉がすばやく思い出せない、呂律が回らない、頭痛とは反対側の半身がしびれる、言葉の意味が分かっていながら文字が一時的に読めなくなる、嘔吐する、といった症状が出るので、前兆があった時点（頭痛の一日前～数時間前）で、かつては生活に支障のないように、次の数日間の予定をうまく取り計らっていました。（高校の頃が、最も重症）

これも女性に多く、「共感覚者の女性」と「閃輝暗点・偏頭痛持ちの女性」とがかなり重なることから（日本・海外を問わず）、この視点でも探究中です。とは言っても、これらが合併することは、十分にあり得るというのが、僕の視点になっています。「母親が閃輝暗点持ちで、その娘が共感覚者」という例（あるいは、その逆）も、かなり多く報告されているようです。両方を持つ女性だと、これまで十数人に出会っています。僕と同様・同程度の感覚・症状を持つ男性には、出会ったことがありません。

さて、概論になりましたが、閃輝暗点・失読症などについては、また詳しく語ってみます。今日はとりあえず、映像の紹介まで。

（※　閃輝暗点は、眼球の異常でも脳卒中でもそれらの前兆でもありません。痛み自体は、全く伴わない人から、クモ膜下出血ほどの人まで様々。）

●共感覚・偏頭痛関連団体

海外には、「共感覚協会」なるものが存在します。

http://www.uksynaesthesia.com/（イギリス）

http://synesthesia.info/（アメリカ）

http://www.synesthesia.com.au/（オーストラリア）

http://www.doctorhugo.org/synaesthesia/index.htm（ベルギー）

閃輝暗点協会なるものまで存在します。

http://www.migraine-aura.org/

共感覚の種類一覧（統計と解説）

二〇〇七年六月二十日　起筆、擱筆、公開

上から順に、

・感覚刺激→引き起こされる感覚

・僕自身の共感覚の強度を６段階で表記。
●：時と場合による～●●●●●●：最も強い

・参考までに、欧米の共感覚研究の第一人者による統計を付記。「-」は統計なし、または不明。
Richard E. Cytowic 氏　2002 年の統計（被験者総数 365）
Sean A. Day 氏　2005 年 3 月の統計（被験者総数 778）
Sean A. Day 氏　2007 年 1 月の統計（被験者総数 871）
いずれも、約半数が複数の共感覚を保持。

○Graphemes→Colors/書記素→色　●●●●●●　66.8%　66.5%　64.9%

いわゆる「文字に色が見える」共感覚。言語学的に言うと、対象は書記素。日本語なら、例えば「か」に色が見える感覚。表音文字文化圏の共感覚者の 7 割近くを占めると言われる。日本人でも、おそらく最多。圧倒的に女性に多し。個人的には、仮名文字（音節文字）文化を背負ってきた日本人女性の占める割合に、今後注目したい。

↑僕の共感覚

あ	い	う	え	お	ア	イ	ウ	エ	オ
か	き	く	け	こ	カ	キ	ク	ケ	コ
さ	し	す	せ	そ	サ	シ	ス	セ	ソ
た	ち	つ	て	と	タ	チ	ツ	テ	ト
な	に	ぬ	ね	の	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
は	ひ	ふ	へ	ほ	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
ま	み	む	め	も	マ	ミ	ム	メ	モ
や	ゆ	よ			ヤ	ユ	ヨ		
ら	り	る	れ	ろ	ラ	リ	ル	レ	ロ
わ	ゐ	ゑ	を		ワ	ヰ	ヱ	ヲ	
ん					ン				

○Phonemes→Colors/音素→色　●●●●●●　9.6%　9.9%　9.2%

「k」（クッ）や「a」（ア）の「音」に色が見える感覚。表音文字言

語圏独特の分類なので、統計が取られる。「ん」と「っ」以外は全て開音節である日本語に音素を認めない（音節「か」のみ最小単位として認める）説あり。従って、日本人にとっては、「外国語の音素文字を見て何が見えるか」という議論になる。日本人女性共感覚者のほとんどが、「か」の形と「か」という音声に見える色が一致していると答えるのはそのため。

僕としては、共感覚の実体験者の立場から、言語文化の根本的な違いは重視すべきであって、環境的要因が入り込めない生得的要因があるという輻輳説（Convergence Theory）に立って、日本人女性共感覚者が仮名文字を書いたり話したりする時の、色彩の知覚や脳の動きを見ていこうと思う。例えば、僕にとっても、「か」は「紅色」であると表象されるのであって、厳密には「レッド（red）」の指し示す概念に当たる色には見えない。逆に、「A」はオレンジなのに、「a」が青に見えるのは、音素ではなく、文字の形状に視覚が反応していると言える。文字に見える色が、自分が生まれ持った人種的・民族的体質に左右されるか否かは、僕の最大の注目点で、日本人女性が、漢字の形態素から音素文字を生み出さずに、全て開音節である音節文字文化を育んだ感覚と、現在の日本人女性共感覚者の書記素と音節に一定の色を感じる共感覚とは、無縁ではないように思われる。

↑僕の共感覚

○Musical sounds→Colors/音楽・楽音→色　●●●●●●　14.5%　18.5%　19.5%

「色聴（color hearing）」と呼ばれ、特に注目される。男女比 1:6、1:7、1:20 など諸説あって信用ならないが、特に著しい男女差が言われる。現在のところ、実際に「見える」感覚から、「そう感じる」感覚までを含めて、「色聴」と定義されているが、もう少し狭めたほうが良いのではないか。

○General sounds→Colors/噪音・一般的な音→色　●●●●●●

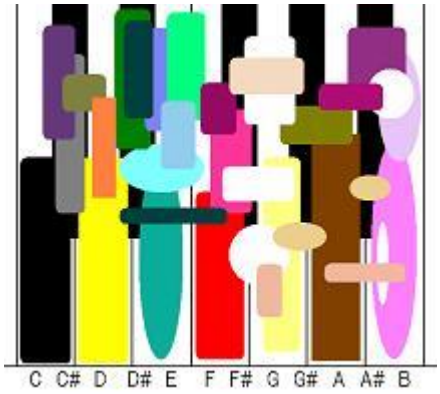
12.1%　14.5%　14.9%

例えば、日産スカイライン R34 型のエンジン音は、僕にとっては灰色と青色の波線の流動、といった感覚。こだわり・嗜好のあるものには快感を感じるが、うるさい街中を歩いていると、色が見えすぎて脳が飽和状態を起こし、気分が悪くなるのは、色聴者の難点か・・・。

○Musical notes→Colors/音符（1 オクターブ 12 音）→色　●●●●●●　10.4%　9.6%　9.0%

これも「色聴」。

←僕の共感覚



なお、逆に物の色・形や風景、人の姿を見るなどした時、それに対応した音や音楽が聴こえる共感覚を「音視（tone seeing）」と呼び、下のほうの「視覚→音」の感覚がその一つに当たる。（脳波測定で、視覚刺激が入ったところ、聴覚野が一緒に光る。）

○Time units→Colors/時間（単位）→色　●●●●●　19.2%　22.8%　23.1%

欧米の統計ではなぜこれほど多いのか、いまだに不明。欧米では常に全共感覚のうち第二位の座を占める。東洋・西洋の暦を含めて探究中。

○Personalities→Colors/個性・人格→色　●●●●●●　4.4%　5.5%　5.4%

いわゆるオーラとは、この共感覚との説あり。

参照：http://ij-art-music.sblo.jp/article/4354216.html

（オーラは共感覚の一種か否か）

女性の場合、男性の声に色を感じるという例かなり多し。

○Personalities→Sounds/個性・人格→音　●●●●●●　：　：　：

僕としては、人の姿や人格を見ると、色と音とが一緒に浮かんでくるのだが・・・。

○Personalities→Smells/個性・人格→匂い　●●●●●　：　0.4%　0.3%

○Personalities→Touches/個性・人格→触感　●●●●●●　：　0.1%　0.1%

一時期、文字や物の外形・人の姿を表象する脳の部位と、色を司る部位とが、物理的に近接していることから、「文字→色」「人の姿→色」の共感覚者の多さが説明されたが、最近の研究では、頭頂連合野（体性感覚野）を一切介さずに、視覚野や聴覚野において体性感覚との統合が起こる（ヒトの原初的な知覚形態である視覚野や聴覚野での知覚統合が、連合野での統合に先行する）ことが分かりつつある。

先述の、「男性の声に色が見える」女性共感覚者がいる以外にも、「手で触っていないのに、男性を見ただけで触った感じがする」という女性共感覚者がいることも、何ら不思議ではないことが説明できる。つまり、こういった共感覚は、高次の脳領域で起こるのではなく、ヒト本来の潜在能力の働きのみで生じるということである。逆に、「女性を見ただけで、手で触っていないのに、触った感覚がある」という僕の感覚も、同じことで説明できるかもしれない。

先述の「色聴」の話でもそうだが、コウモリに向かって「超音波を”聴くように感じている”のか、”見るように感じている”のか」と尋ねたとして、「感じている」事実までは科学で証明できても、体験しない限り分からないのと同じである。共感覚者というのは、実はそういう領域にいるのかもしれない。

現代科学が記述しようとしている行き過ぎた脳の機能局在性について、あえて僕も共感覚者の立場から疑問を呈し続けることによって、逆に脳の面白さを見ていきたい。むしろ、個人をそれ以上分断して脳の細部へと迫るよりも、脳の個人差・男女差・人種差・民族差そのものが言語や文化に象徴されているという事実のほうに興味がある。

○Tastes→Colors/味→色　●●●　6.3%　6.6%　6.3%

和食のほうが、非原色的だが、色の種類が多種多様。

○Pains→Colors/痛み→色　●●●　4.4%　5.8%　5.5%

閃輝暗点の後の頭痛は、ほとんど黄土色の激痛。最近は鎮静化。

○Smells→Colors/匂い→色　●●　5.8%　6.8%　6.8%

時と場合と物による。

○Touches→Colors/触感→色　●●　1.9%　4.0%　4.0%

○Temperatures→Colors/温度→色　●●●●●　2.2%　2.4%　2.5%

これは、温度が高いと「赤」、低いと「青」というような、一般的な感覚とは全く別のことを言っていて、僕の場合は、人の体温に色彩を言えることが多い。上の「個性・人格→〜」とは、自分の中では区別がよく分からない。

○Orgasm→Colors/オーガズム→色　●●●●●　‥　1.0%　2.1%

女性からの報告多し。数年前から、きちんと世界的に統計が出始めた。今後、研究が進んでほしい。僕にとっては、琥珀色であったり、山吹色であったり、蓬色であったりする。次の「音楽・音」と峻別せず、色と音が融合して滑走・流動するという言い方が最もふさわしい。

女性共感覚者の意見は何人も聞いたが、そもそも根本的に違うものを比較することは無意味なことだろう。常に男女別々に統計を取るべき項目である。研究者には留意してほしいことである。

○Orgasm→Sounds/オーガズム→音楽・音　●●●●●　‥　‥　‥

女性に多いか。まだ統計なし。色聴と合わせて、「オーガズム→音楽→色」という多重の共感覚が考えられるから、女性に多いのは当然

か。

僕の場合、陰旋法のようであったり、ホ短調のようであったり、神秘和音のようであったりするが、当然、あとからそういう名前で呼んでいるだけであって、基本的に、何か一概に音楽的ではない、純粋自然音の響きを持って聴こえている。個人的に、周辺の日本人男性の報告皆無。欧米の男性の報告あり。

○Menstrual cycles, PMS→Colors/月経（周期）→色　……　：　：

まだ統計なし。

参照：http://ij-art-music.sblo.jp/article/4310258.html

（女性の月経周期と共感覚）

○Graphemes→Personification/書記素→個性・人格（擬人化）　●●●●●　：　：　データ不十分により保留

個人的に好きな感覚なのに、何が調べにくいのだろう。「”な”はいじわるであまり使いたくない、”に”は書いていて可愛い」「”2”はお姉さんだが、”3”は男前なので、書いていて恥ずかしい」と言う女性共感覚者がいたが、そういったこだわりには非常に共感を覚える。

○Non-graphemic ordinal sequences→Personification/非書記素文字の羅列→個性・人格（擬人化）　●●●●●　：　：　データ不十分により保留

○Objects→Personification/物体→個性・人格（擬人化）　●●●●　：　：　データ不十分により保留

○Lexemes→Tastes/語彙素→味　●●●●●　：　：　0.6%

例えば、「書く」と「書か」は、同じ語彙素である。僕にとっては、「赤紫色」の動詞である。「味」以外がいないのが不思議。Lexeme→Color、Smell などがあっても良い気が・・・。

○Sounds→Touches/音→触感　●●●●●●　2.7%　4.0%　3.9%

○Sounds→Tastes/音→味　●●●●　2.7%　6.2%　6.1%

○Sounds→Smells/音→匂い　●●●●　1.1%　1.8%　1.6%

上の二つの区別が、僕にはよく分からない。例えば、紅茶の味がする曲があるが、同時に紅茶の匂いを感じないはずがないのだが。

○Sounds→Kinetics/音→運動　●●●●●●　--　0.5%　0.6%

あまり注目されないのが残念。音楽を聴いていると、あらゆる模様や図形が移動・滑走する。

○Sounds→Temperatures/音→温度　●●●●　0.5%　0.5%　0.6%

○Tastes→Sounds/味→音　●●　0.3%　0.1%　0.1%

○Tastes→Touches/味→触感　●●　1.1%　0.5%　0.6%

○Touches→Tastes/触感→味　●●　0.5%　0.6%　1.1%

○Touches→Smells/触感→匂い　●●　0.3%　0.3%　0.3%

○Touches→Sounds/触感→音　●●●　0.5%　0.4%　0.3%

○Vision→Tastes/視覚→味　●●●●●　1.9%　2.1%　2.8%

以下六項目は、例えば、日本庭園を眺めていても起こるし、都会の中を歩いていても起こる。都会だと、いらない情報・感覚が過多気味で、気分が悪くなるが。

○Vision→Kinetics/視覚→運動　●●●●●　--　--　0.1%

○Vision→Sounds/視覚→音　●●●●●●　1.1%　1.5%　2.6%

「音視」と呼ぶ。

○Vision→Smells/視覚→匂い　●●●●●　1.1%　1.0%　1.1%

○Vision→Touches/視覚→触感　●●●●●●　0.8%　1.0%　1.5%

○Vision→Temperatures/視覚→温度　●●●　--　--　0.2%

○Smells→Sounds/匂い→音　●●　0.3%　0.5%　0.5%

○Smells→Touches/匂い→触感　●●　1.1%　0.6%　0.6%

●前回の「共感覚一覧」ですが、また新しい統計など出たら、更新していきたいと思っています。

●今日は少し休憩タイムです。僕の Grapheme-color synesthesia のうち、僕にとって最も面白く、味わい深いものの一つが、漢字に色を見る共感覚です。

僕の共感覚体験記（漢字に色が見える共感覚　Chinese charactor-color synesthesia）

二〇〇七年六月二十三日　起筆、擱筆、公開

優憂欲谷
偽為欧区
借昔欠
信言闇音
体本閥伐
付寸閣各
人門

○部首を付けた時と付けない時で、漢字の色がどう変わるかを試すのが面白い。
○実際に見えている模様の細部までは描けないので、便宜上、明確に塗り分けています。

○ご覧の通り、全く規則性がなく、漢字を実際に見てみないと分からないのです。
○見たこともない難しい漢字についても、すぐに色を言うことができます。
○つまり、漢字についても、数の少ない仮名文字や数字についても、文字と色との対応をあらかじめ記憶しているわけではありません。

さて、そこで、パーツごとに切り離した状態から、だんだんと近づけていくと、どう見えるか、という疑問が湧いてくるでしょう。では、「恋」を例にとります。

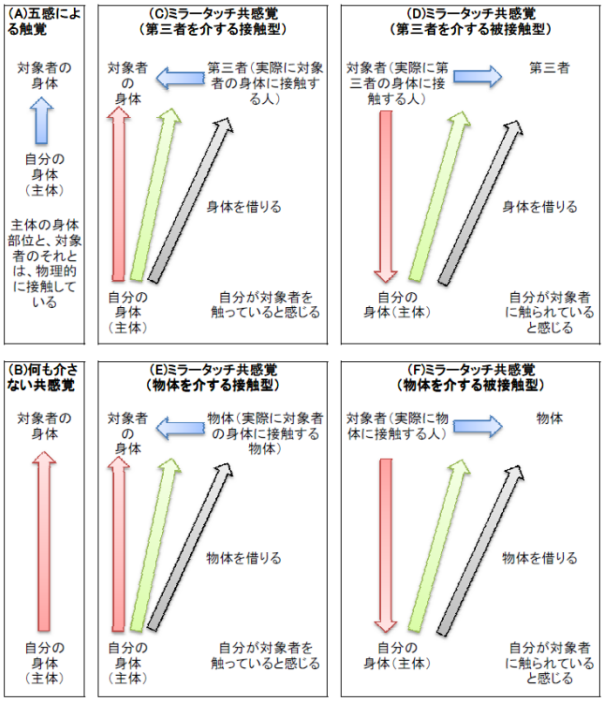
つまり、「注視点または注視点に近い範囲にどういった形のものが見えているか」で色が変わってくるのだと、僕自身は分析しています。

「恋は水色」などと言いますが、僕にとっては半分納得！といったところでしょうか。

ミラータッチ共感覚

二〇〇七年七月十三日　起筆、擱筆、公開

他人の身体を借りて第三者を触ったり、他人が触れられているのを見て自分が触れられたと感じたり、他人の痛みを自分の痛みとしても知覚する「ミラータッチ共感覚」（mirror-touch synesthesia）についての記事です。（英語です。）



（二〇一二年一月二十二日に画像を正確なものに差し替え。後掲のミラータッチ共感覚の解説に伴う。）

http://sciencenow.sciencemag.org/cgi/content/full/2007/618/1
http://www.abclocal.go.com/wls/story?section=health&id=539951
6
http://in.news.yahoo.com/070617/137/6h34j.html
http://au.health.yahoo.com/070617/3/1a2n5.html
http://abcnews.go.com/Health/story?id=3284488&page=1
http://www.livescience.com/health/070617_touching_faces.html

http://www.ncbi.nlm.nih.gov/sites/entrez?cmd=Retrieve&db=pubmed&dopt=Abstract&list_uids=17572672

僕の場合、自分の共感覚をあえて分類するなら、「文字→色」「音→色」「音→形」「人→色」など、常に感じてしまう共感覚と、「景色→触覚」「景色→音」「人→触覚」「音→匂い」など、時と場合によって感じる共感覚（その場に居合わせた瞬間に感じるので、予想がつかず、それゆえ自分で驚くこともあるし、初めて味わう感覚のために感動することもある）とがありますが、「ミラータッチ共感覚」も後者に入るもので、時と場合によって感じるものです。

それゆえに、後者に当たる共感覚を感じたときは、「何か特別な意味があるのではないか。」「今、僕がこれを感じる何らかの必然性があって、感じているのではないか。」などと考えてしまい、その不安感と恐怖感のために、いてもたってもいられませんでしたが、最近は、「まあ、そういうこともあるだろう。」などと考えられるようになりました。昔に比べれば、のんきなものです。

これらのリンクに書かれている実験の内容や結果も、毎度のこと、鵜呑みにするわけにはいかないと思いますが、こういうものを感じている人もいるんだ、ということで、参考になればと思います。

それにしても、「人が触れられているのを見て、自分が触れられたと感じる」共感覚と、「人の姿を見て、自分がその人に触れたと感じる」共感覚とでは、僕は後者の共感覚が主ですので、そのあたりに関しても、興味があります。ただ、「景色に触れたと知覚する」共感覚とは違って、「人に触れたと知覚する」共感覚を語ることに際して生じてくる、一切の倫理的問題を意識することから解放されることが許されるのなら、僕もまだまだ語っていないことを、ここでも語れるのですが、その点をまだ僕自身が意識しているがために、じれったい限りです。

それから、いつも気になるのが、いざ実験というときに、日常生活の中で体験しているような共感覚を本当にそのまま発揮できるのか、ということです。そのあたりが今一つ疑問で、僕だったら、おそらく無理かもしれないと言いますか、今こうしてブログを載せたり、普段の生活の中で人の姿を見たり、景色を見たり、その中で感じる共感覚こそが、最も味わい深く、程度も強く、感動的であったり、悩ましいものであったりするのに、それをいざ実験という場において、一切の余計な精神的緊張なく、生活の中で花を見たり、山を見たりしているのと全く同じ精神状態でいられるものなのか、それがちょっと分からない。

それができなければ、それは共感覚のありのままの姿ではないのだから、実験結果は参考にできないことになる。だから、最初からそ

うはならないような人（実験だからと言って、取り乱したり、極度の不安に陥ったりせず、それほど共感覚が変化しない精神状態でいられる程度の共感覚のみを持つ共感覚者）を集めてこなければ、どうしようもないことになる。

その意味では、共感覚の研究というのは、常に真性の共感覚者の知覚の仕方とは、微妙にずれたところでなされているものであるかもしれない。自分の共感覚が少しでも歪んでしまうことに、本能的な恐怖感や不安感・罪悪感を感じる共感覚者である場合、最初からそういった場に際して、本当の共感覚現象を提供することは、ほとんど不可能であるように思える。そういう共感覚者（まさに僕のような）は、まず被験者としては、最初から淘汰されてしまうべきか、あるいは、最初から自ら淘汰されることを選ぶかもしれない。その点は、決して忘れてはならない、大切なことであるかもしれない。

僕の共感覚体験記（美術館にて）

二〇〇七年七月十五日　起筆、擱筆、公開

僕の共感覚などの体験記。（初めて来られた方へ。ここにある話は、夢や空想に関する話ではありません。）

●（「触覚から得る共感覚について教えて下さい」との質問に答えて。）

僕は、触覚から色や音や味など、様々なものを感じます。 例えば、絵画が好きで、よく美術館に行くのですが、なるべく手ぶらで行くか、荷物を極端に少なくして行きます。

と言いますのが、例えば、傘を手に持っている状態で絵画を見てしまいますと、その傘の感触自体が色なり音なりを引き起こして、絵画鑑賞よりも優位に立ってしまうことがあるので、気が散ってしまうのです。今はコントロールできるようになりましたが、その昔、荷物が多すぎて、知覚が飽和状態になり、倒れそうになったことがあります。従って、満足に鑑賞できなかった場合、帰って画集を見たりネット上で見るなどして、どんな絵画だったか思い出して補う、などという本末転倒が起こってしまいます。 ですから、美術館に限らず、とにかく芸術鑑賞するというだけで、それに打ち込める環境を作る努力をしています。家で音楽を聴くときも、本を読んだり何か他のことをしながら聴かないように気を付けています。

美術館やコンサートホールの入り口で、色んなものを手渡されるというのが、ものすごく体質に合いません。なるべくなら避けたいのですが、しかし、絵画もクラシックも鑑賞したくて行っているわけで、我ながら苦笑してしまうことがあります。

●ある日、渋谷駅で電車を降りたとき、降りた位置から約50m先に改札口があったのだが、歩き始めたら、なぜか改札口が10kmくらい先になっている。「ああ、また来たか。」と思う。「なぜあんなに果てしないところまで行かなければならないのか。」「時間内に辿り着けるだろうか。」と考える。

とりあえず、「ここは渋谷だ。」「僕は今、電車から降りた。」ということは分かっている。「他の人にとっては、ここから改札口まで50mほどしかないこと」、そして「こういうことに悩んでいるのは、さしあたり僕だけであること」も分かっている。ただ、どう考えても、今から10kmも歩かねばならない気がする。どうやって行くべきだろうか。とりあえず、歩いてみればよいような気もするが、それだけでは駄目だという気もする。まずちょっと休憩せねばならないと思い、端に寄る。

そばを歩いてゆく人々を見て、うらやましいと思うが、うらやましいというのとは少し違う気がして、なぜか心の中に妙な自負心と勇気が湧いてきた。これでよいのだ、これでよいのだ、と思ってみる。自分が見ている世界を一言で言うなら、「ファンタジー」ということになりそうだが、しかし、これをファンタジーと呼ぶこと自体が、他人の目が自分を見るときの言い方を想定しているのであって、自分にとってはリアリズムだな、と思う。ふと大好きなスピリアールトやドゥ・ヌンクの象徴絵画を思い出す。今まさに僕が見ているのは、そういった光景である。他にも色々と考えごとをする。今から歩かねばならないので、そんな暇はないのだが。

"The Curve of the Esplanade" by Leon Spilliaert & "Nocturnal Effect" by William Degouve de Nuncques

この発作を乗り切るためには、「ここで5秒間背伸びをする」だとか、「この感覚のときはどういう体勢で休んだほうがいい」など、とにかく、言葉で言うのは不可能だが、この20年間この感覚に対して磨き上げてきた、僕なりのワザとコツがあって、それを用いるわけである。ただし、どのくらい効くかは時と場合によるので、やってみ

ないと分からない。

このあと、おそらく5分くらい経ったところで、何かの拍子に”普通の人間から見て常識的な”現実感と時空感覚を取り戻し、とりあえず歩くことは可能となった。そういうわけで、物心付いて以来20年間、この感覚と付き合っている。最近はほとんど、爽快な「諦め」や「恬淡」あるいは「能動的なニヒリズム」といった境地である。

●ある日、テレビのチャンネルを変えようと思って、リモコンを手に持ったら、そのリモコンが巨大船舶の大きさになった。「また来た・・・。」と思ったが、なかなか面白いので、「ここに子どもが座っていて長旅を喜び、ここの甲板に二人の人がいて・・・」などと、浮かんできたことを正直に考えて、その仮想の船に人間を配置してみた。小さい頃は、レゴブロックを始めたら夜までやめない子どもで、ああ、勝手に二隻の船をつなげて巨大な海賊船を作ったな、と思い出す。

首の後ろが重くなってきたので、自分でマッサージをしようと手を持ち上げるが、その手を持ち上げる感覚に現実感がない。ただし、「現実感がないことにびっくりし」「これは病気ではないかと思っ」ていたのは、子どもの頃の自分で、今は「現実感がないことにびっくりしている自我を自覚し」「病気と思えば病気であるというにすぎないと思っ」ているので、びっくりする自分にはびっくりしない。

しばらくして、だんだんと体がしんどくなってきて、汗がダラダラ出始めたので、これはいかん、気を失っては困るということで、意図的に立ったり座ったりしてみた。その立ったり座ったりの動作をするのに、10秒くらい費やした気がするが、周りの時間はまだ1秒しか経っていない気がする。これはおかしい。しかし、結果的に自分の動きと周りの様子との間に、視覚の上ではズレがないということから、ああ、同じ時間だけ経ったのだなと理解した。

さて、こういう発作の最中であっても、僕には普段と同じように、リモコンに書かれている数字に色が付いて見え、音に風景が見え、匂いがし、人に色が付いて見える。つまり、ものの見事に、時空感覚変容の発作があろうがなかろうが、僕の共感覚は一切失われない。この事実には、「共感覚」という名を知るずっと以前、5歳頃から気付いていた。いや、失われないどころか、共感覚だとか、ナントカ症候群だとか、ナントカ病だとか、ナントカ障害だとか、そういったものは、僕の体においては最初から区別がないのであって、これらあらゆる繊細さと大仰さとを持って構成された”常識的ではない僕なりの現実感”は、極めて名状しがたい恐怖感と不安感を伴うと同時に、メルヘンチックでもあり、ドラマティックでもあり、ロマンティックでさえある。

参照：
http://en.wikipedia.org/wiki/Alice_in_Wonderland_syndrome

僕の共感覚体験記（街中にて）

二〇〇七年七月十八日　起筆、擱筆、公開

●街を歩いていて、黄色と緑色の三角錐の音が聴こえてきたために、歯を食いしばって耐えなければならず、それを避けるために、歩く方向を変えなければならなかったことがあった。その三角錐の頂点から底面に下ろした垂線に平行に歩くと、向かい風に対峙しているかのように、どうにも体が耐え切れないのである。（三角錐は、この垂線が地面と平行になるように90度倒れており、大量に空中に浮いて、滑走している。）　現実に耐え切れないのだから、なんとか対処すべきで、方向転換は致し方のないことだった。鳥の鳴き声や木が風に揺れる音でそのようなことになることはなく、男が狩りをしていた時代の、異質な音に対する何らかの防衛本能が脳に残っているのかと考えたが、むしろ共感覚一つでそこまで発想すること自体が、共感覚者特有の知的活動であり、あとで苦笑して気分が楽になったのだった。

●一時停止線の手前にペイントされている「止まれ」。僕にとっては「止」「ま」「れ」は、順に「薄い灰色」「赤紫色」「山吹色」であり、何がどうなっているのかは分からないが、ちょうどこの人工的で無機質な書体が僕にとっては大変な疲労感を生むようであり、この三文字がものすごくグロテスクでまぶしい時期があった。そこで、この「止まれ」の寸法・太さなどが僕の体に影響しているのだと子どもながらに思い、「将来、免許を取ったときに、これが気にならずに運転できるだろうか」などと考えていた。そして、その怒涛の不安感は、やがて十代後半あたりに無用のものとなったが、だいたい体験を記憶していること自体が、再びその知覚を誘発しそうなものだ。今思えば、道交法というものは、最初から「どの人にとっても、世界の見え方は一緒である」という前提に成り立っているものだ。僕がどうこう言ったところで、どうなるというわけでもないが、なかなか面白いものだ。

●何年か前の桜の季節に、２本の桜の木を見て、片方はほとんどコードGM7の響きで、もう一方はコードBsus4の響きだったことがあった。もちろん、僕がコード理論を知っている人間であるからと言って、それが先にあって、桜の姿をそれに結び付けて言ったものではない。桜のありのままの姿そのものにおいて、僕個人が聞いたものを淡々と述べたら、それがGM7だとかBsus4と呼ばれる音の並びであった、というだけだ。それにしても、桜が散るということは、僕のGM7やBsus4も一緒に散るということであって、それが無性に寂しく、なぜ散らなければならないのかと思って涙が出た。

昔の日本人男性はコードなど知らないに決まっているが、こういう知覚の仕方で桜の散逸を惜しみ称えた男はいなかったものだろうかと思って、強烈な感慨に襲われた。毎年、桜は美しいに決まっているが、このときは僕の中で何かがちょうどマッチしていたのだ。

共感覚者が、「音に色が見える」「景色に触覚を覚える」「人に色が見える」といった自らの感覚を語るとき、「共感覚」というテクニカルタームを持ち出すより前に、「これらの感覚が紛れもなく現実のものであるという揺るぎない確信」から物事を語る態度は、本当に大切だと思う。僕がいつも感じているのは、「畢竟、共感覚は、言語化した時点でウソになる」という実感だ。それは、悔しさやじれったさを飛び越えて、ほとんど罪悪感に近いものがある。共感覚を語ることは、どうも感性の矮小化であり、妥協であるということは否めない。言葉にする以前のものが、最も完璧な姿である。感じているものが完璧すぎて、言葉も出ない。

それは、人に対する罪悪感でもあり、何より自分の共感覚にウソをついているという不甲斐なさと直接に結び付いている。これに耐えることには、かなりの精神の疲労が伴う。そしてそれは、「人の本質的な寂しさ」や「疎外感」、「虚無感」、「人が生きるとはどういうことかという問い」と無縁のものではないと感じる。こういったことは、物心付いたときから何ら変わらないように思うが、しかしながら、書くことによって新たに生まれる「人のつながり」は、共感覚と同様に、捨てがたいものだ。

僕の共感覚体験記（女性について１）

二〇〇七年七月二十日　起筆、擱筆、公開

以下は、何人かの女性についての僕の共感覚を書いたもの。皆、今までに出会った、同世代（二十代）の女性です。もちろん、本当は何人挙げてもよいのですが、いつまでも迷うわけにいかず、載せるものを思い切って選んだらこうなったというだけです。とは言うものの、いざ何人かを選んで載せてしまうと、他の例が惜しくてならず、それがどうにも心苦しいです。

●女性Ａさんの姿は、特に何の所作もなくじっとしているときには、僕の中では、彼女の左耳の後方から首の後ろを回って右側を通り、右肩に軽く掛かった後、右手首に向かって流れ落ちている黄朽葉色の帯を纏った状態を保っている。帯の両端は、およそ30cmをかけて次第に半透明となり、やがては消えるという様子で、彼女の周りにもたれかかっている。左手にも帯を纏ってはいるが、左右がシンメトリーであるのは、彼女の肘の高さから手首にかけての部分のみ

である。ただし、それがアンバランスな姿を醸しているというのではなく、その黄朽葉色や梔子色といった色彩が許す範囲で、効果的に少しばかりのアシンメトリーを彼女に与えているだけのことだ、という実感がある。あるとき、何かの拍子に彼女が驚いたように右を向いたが、それは、帯の右手首に近い部分だけが水に濡れ、左耳の後方にある帯の先端あたりにおいて、深緑色ないし萌葱色のコップを僕が右手で持ち上げたときのような感触を僕が覚えるところの、彼女の身のこなし方だった。右手首の帯が濡れたのが、そのコップから落ちた水によるものなのかどうか、定かではないが（おそらく違うと思う）、とにかく彼女がふと右を向くと、帯が何かの水に浸される。（左を向いたときに、もし同じように左の帯が濡れたら、実に美しいだろうなと思うのだが、それには出くわしていないので、よく知らない。とにかく、おそらくは彼女の髪の癖か体の癖か、何かの理由で、彼女自身の中に髪と顔の位置関係にこだわりがあるために、右を向くとそうなるのであって、それが僕には印象深い。）

●女性Bさんの姿は、いつも頭の先から腰の辺りの高さまでの、両腕の外側の空間に、紅茶に限りなく近い、かなり細かい砂状の肌色や淡香色の匂いと、綿の束を僕の右手の親指以外の四本の指が、少し圧力を加えるように触れたときの感触とを保っている。彼女が座っているときには特にそうである。また、彼女はよくため息をついて、腕を膝に投げるが、その様は、ほとんど角がとれた丸い形に近い直方体状の、二つ三つの文庫本大の薄い緋色の空気圧が僕に当たるところの、彼女の動き方だ。ただし、その緋色の流れというものが、僕の近くまで来て、消えているのか、跳ね返っているのか、それは分からず、僕の目が彼女を見ているときは、僕の目が僕を見ているわけがないから、知りようがないのだが、ともかく彼女はそういう女性で、淡い緋色ないし淡い牡丹色に該当する時空の拡がりを抱えているところが、彼女の根本的な魅力である。彼女の姿と、彼女が発するそのシャボン玉と風船のあいのこのような流れの中には、様々な音があるが、とりわけFやB♭に近い音があるのは確かであり、無理をして言葉にするなら、彼女はもともと、ヘ音（F音）を少しだけ高めた音を核音とする陰旋法かフリジアン・モードに当たる構成音を持っている女性で、僕はそれをすばらしいと思っている。その緋色の空気と同時に、少し紅茶の匂いがより甘くなったものが、その文庫本大の空気圧に乗って、なだらかな波線を描いてやって来るため、それがいつも印象的な女性だ、と思っている。

●女性Cさんの姿は、梅雨の時期に、青や紫の紫陽花の真下の土の道にできるような、楕円形に近い形の穏やかな水溜りの中に、その青や紫の紫陽花と葉が映っているのをなんとなく見ながら、傍らの紫陽花の花に触れているときの感触をしている。（僕が触っている花や僕の手が水溜りに映っているのを見るのではない。紫陽花が映っているのを知って、それを視界の端に見ながら、その水溜りの傍らで別の花に触れている、という状況と手の感触が、最もよくCさんの姿形を表している。）　ただ、時々、その紫陽花の触感の中に、彼

女自身を触っていると自覚されるような感覚が入り込むことがあり（それはもちろん、実際に彼女自身を触っているのではなく、彼女という女性の、まさにその人肌の感覚が、彼女の姿を”見る”ことにおいて僕の中には存する、というだけなのだが）、その感覚は、紫陽花の感覚から人肌の感覚へと連続的に変化するものであるので、なんとなく彼女に申し訳ない、と思う。彼女も、帯状のものや、ある一定の旋律や和音を纏ってはいるが、AさんやBさんよりも、少し帯が細いかもしれない。あるいは時々、ほとんど糸と言ってよい流れがCさんを包んでいるが、それはほとんど髪に平行になっており、（青い紫陽花の花弁を、そこに落ちた雨粒を通して見ている、まさにその青のような）透き通った青碧色で、（ガラスとまではいかないが）ほとんど透明であり、また髪の動きと同時にその青碧の糸も揺らめくのが、本当に魅力的で、すばらしいと思う。だいたい、Cさんに限らず、AさんやBさんも、その髪の長さ、とどまっている位置、またはある所作によって髪が動いた、その動き方によって、僕が目にする色も音も変わる。ただ、これはよく考えれば当たり前のことなので、別段不思議な気はしない。

これらは、もちろんメタファーで言っているのでもないし、文学を書いているのでもないし、「彼女はこういうイメージの女性だ（女性であってほしい）」という意味で言っているのでもなく、僕が知覚したものをただ述べているだけだが、逆に「”僕にはこのように見えている”から、その女性が気になってしまう」ということは、もちろんあり得る。女性共感覚者の中にも、「男性に色が見える」という人がいるし、（そして、共感覚を持たない女性であっても、「男性を色に喩える感覚は、なんとなく分かる」と言う女性が多くいるのであって、女性そのものが、そういった感性と本能とを持つ存在なのだろうと、僕はどこかで直観するのだが）そういう女性の方々に、この僕の感覚がどう映るのかも興味がある。僕自身も、この僕の感覚について、一生を通じて深く見つめていく必要性を感じている。

僕の共感覚体験記（女性について２）

二〇〇七年七月二十二日　起筆、擱筆、公開

●僕の「女性に色が見えたり、音が聞こえたり、触感を覚えたりする共感覚」がどういうものであるのか、分かりやすく言うために、「文字に色を見る共感覚」と「風景に触感を覚える共感覚」とともに図示してみました。（話題が話題だけに、やはり誤解を生まないためにも、うまく言葉にしておきたいという目的もありまして。）

それにしても、僕が二十年間、共感覚を告白しなかったのは、正直に言うと、ほとんどは「男がこういう感性的なことを語るのは、許されないことであり、嘲笑に値することなのではないか。」との不安

感からだったような気がします。今思えば、そういうことは周りの人の主観が言ったことであって（まさに僕の共感覚が極めて主観的なものであるように！）、そういう目線を気にして悩んで、不安感にさいなまれていた自分自身が滑稽な気もしますが、もちろんその頃は真剣でしたし、懐かしい気もします。「共感覚」なる呼称を手に入れて、語る勇気を得た今となっては、実にすがすがしい気分である一方で、色々なことを考えては、目頭が熱くなるようなこともありますが・・・。と、余談が入りましたが。

やはり、とりわけ「女性に色が見える」「女性に音が聞こえる」「女性に触感を感じる」といった感覚は、”普通の人”にとっては”尋常ではない”感覚だと思うし（いまだに共感覚を”障害”や”異常”という言葉で言う人がいる）、ただそれゆえに、何とかして分かりやすい言葉で説明できないものかと考えるのもまた一興であり、深い醍醐味のあることだと思えるようにはなりました。それに、この共感覚は、前回の例のように、僕のあらゆる共感覚の結晶体と言ってもよい様相を呈していると僕自身も感じています。

この共感覚を海外の共感覚研究に倣って名付けるなら、例えば”Figure of A Female-Complex Senses Synesthesia”などと大げさなことになりそうですが、とりあえず、この共感覚を便宜的に「F 共感覚」と呼ぶことにして、話を進めます。

本来なら「女性に色が見える共感覚」、「女性に音が聞こえる共感覚」、「女性に触感を感じる共感覚」などと細分化して語るべきかもしれないけれども、僕にとっては、それではあまりに意味がなさすぎる。なぜなら、実際に感じている感覚をそのまま書くと、前回のようにしか書きようがないからです。どう見たって、その女性は特定の色と音と触感との一体不可分を保っていて、どれかが欠けると、すでにその女性はその女性ではなくなる。

さて、F 共感覚を考える上で、いつも僕が意識していることは（たくさんありますが）、あえて挙げるなら、次の二つだと思っています。（僕の持論などではなく、僕の生身の体験・実感として、そう語らざるを得ない。これだけはぜひ強調しておきたいと思います。）

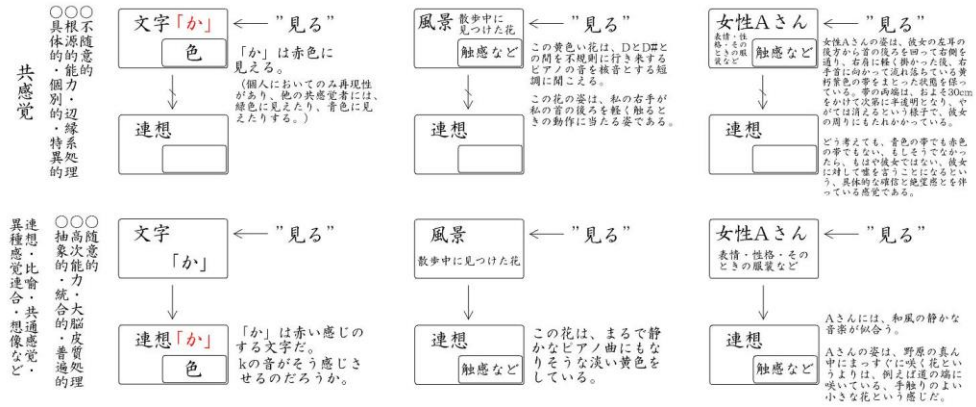
①F 共感覚は、女性の本質・属性を問うものではない。女性の個別的存在・現実存在・個人のあり方そのものを、一人の他人（＝共感覚主体者＝僕）が主観的に受け止める感覚にすぎない。

②F 共感覚は、女性のエロス的なるものと関連付けて語らざるを得ない。しかし、F 共感覚がエロス的な目的を持つのではない。F 共感覚が、エロス的なものに影響されることがあるのみである。

①

まず、「共感覚」と「連想・比喩・共通感覚・異種感覚連合・想像」

との違いを書いておきます。（図の中にも書いています。）



◆共感覚
○不随意的
○根源的能力・辺縁系処理
○具体的・個別的・特異的
（例えば、図の中の「か」の赤色は、共感覚者本人に実際に知覚されている。）

◆連想・比喩・共通感覚・異種感覚連合・想像（いわゆる、人間が日常的に用いている感覚ですね）
○随意的
○高次能力・大脳皮質処理
○抽象的・統合的・普遍的
（例えば、図の中の「か」の赤色は、知覚されない。）

なぜ、F 共感覚を語る上で、改めて共感覚と他の感覚との違いを確認したかというと、次のようなことです。

前回、「A さんが右を向く姿は、彼女がまとっている帯の右手首に近い部分だけが水に濡れ、左耳の後方にある帯の先端あたりにおいて、深緑色ないし萌葱色のコップを僕が右手で持ち上げたときのような感触を僕が覚えるところの姿なのだ。」と書きましたが、「”まるで”

この女性の姿は、深緑色のコップを右手で持ち上げたときのような感触だ。」という意味で言っているのではありません。「普通なら女性の姿形は、視覚でとらえられるのみであるが、それに余計に感覚モダリティが加算されて、触覚というものが僕に感じられる」という知覚のことを言っているのでもありません。（つまり、視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚・内臓感覚・平衡覚などの感覚モダリティがあって、それが改めて統合されたものだと説明され得るような現実感は、共感覚にはありません。つまり、聴覚→視覚、視覚→触覚、といった感覚が、あえてそれらを分け隔てるまでもなく認識されているわけです。）

その女性そのものの姿において、「ただ僕がこの目で見ている」という行為そのものにおいて、「女性が、すなわち視覚と触覚、その他の全ての感覚によって、一切の感覚モダリティの垣根を一挙にかつ瞬時に乗り越えて、僕に知覚される」ものである、という意味です。「女性の姿を見て、それからこういう触感を覚える」というのではなく、「女性の姿を見ること自体が、視覚や聴覚や触覚を知覚させる」のです。

そして、その女性の姿は、どう見ても、「青色のコップ」や「赤色の帯」などでは形容できない。それは、赤い服を着ている女性に向かって、「あなたは青い服を着ている。」と言ったり、髪の長い女性に向かって、「髪が短いですね。」などと言うのと同じことだからです。どうBさんの姿を見ても、彼女はあくまでFフリジアン・モードや陰旋法の姿なのであって、他の音階で彼女の美しさをスケッチすることは僕にはできない。

例えば、髪の長い、赤い服を着た女性に、数メートル離れたところからある一定の触感を僕は得たところ、たまたまある理由で、今、彼女が即座に髪を束ねて、ベージュの服を着なければならないようなことがありました。そういうとき、その姿に得る触感が、直前に得た触感と全く違うというようなことがあるのですが、そういったことは、しばしばなのです。例えば、先ほどまでは、とある女性の左手のあたりが、ちょうど僕が持っている国語辞典の柔らかいカバーの背表紙の部分を右手で触れたときの感触であり、その女性の背中から左足方向に向かう細い滅紫色の曲線が彼女を包んでいたのが、まさに今は同じ左手のあたりが、僕のほうが首を左に傾けながらその国語辞典を同様に触れたときの感触であり、彼女を包んでいたものが、彼女の背中から右腰を回り、右足に至る薄紅色の螺旋状の二本の糸になる、などということは、よくあることです。（実に書き方が難しくて、恐縮です。）

それから興味深いことに、日本人女性が、和服を着ているときと普段着（つまりは洋服ですね）を着ているときとでは、確実にそこから僕が得ている触感は違います。これだけは、何をさて置いても優先的に意識されてしまうことであり、むしろしばしば、「赤い洋服と

青い洋服」といった差よりもドラマティックな触感の変容を生むこととさえあります。

②

さて次に、F共感覚を語るときに、必ず付いて回ること。きっとこれこそが、最も大切なことだとも思いますが。

F共感覚を語ることと、「文字に色が見える」「風景に触感がする」共感覚を語ることとでは、事情が違っているのは明らかです。それは、共感覚が、エロスに関わるものであるかそうでないか、ということに他ならないわけです。しかし、ともかくこの共感覚は、これまでの他の共感覚と同様、感じている本人にとっては、エロス以前に強い現実感としてとらえられているにすぎないものだということを、僕は明記しておきたいと思います。

もちろん、共感覚とエロスとの間に一切の関係がないとは、僕も思っていません。花や木が共感覚を引き起こすのと違って、女性の姿が共感覚を引き起こすとは、すなわち女性の身体美が共感覚におのずと影響を及ぼしているということに他ならないからです。しかしながら、僕が重要だと思っているのは、その関係の仕方に目を向けることです。

このF共感覚は僕にとって、エロスに対して、形相因ではあり得ても、質料因ではありません。つまり、「この女性の醸すエロス的雰囲気・肉体美の形相かくあるべし」などという理想の設計図があって、わざわざそれに向かって目的論的に、僕の共感覚が練り上げられて発動するのではありません。個々の女性の身体のエロス的なるものが、「Aさんが右を向くと、黄朽葉色の帯が濡れる感覚を覚える」、「Bさんがため息をつく姿を見ていると、淡い緋色の空気が僕にぶつかる」といったF共感覚として立ち現われることがあり得る、というベクトルがあるのみです。

僕にとっての、その女性に特有のF共感覚、その女性をその女性たらしめるF共感覚という形相は、偶然にも、その女性のエロス的身体美を質料因に持ち、僕が「女性を〝見る〟」ことを作用因として、ただ僕の主観的体験の中に完成される、というだけなのです。つまり、僕に見えている「黄朽葉色の帯」なるF共感覚が、その女性のエロス的な美によって、不随意的に形作られる、あるいは助けを借りて発動されることはあるけれども、その帯は、わざわざエロスのため、共感覚の主体者である僕のエロスを生成するために、僕自身によって意図的に付与されたものではありません。僕のF共感覚は、女性の本質を問わない。全ての女性に共通する属性を取り出して、女性の本質存在を語るのは、僕の共感覚に反する語り方だと思います。むしろ、僕が感覚しているものは、女性の個別的・現実存在を問うところの、僕の中で完結している主観的体験に他なりません。

僕は僕の共感覚と向き合うとき、いつもアンリ・ベルクソンの、「私には、バラの匂いを嗅ぐと、昔の思い出が蘇ってくるが、それはバラの匂いによって引き起こされる、というのではない。匂いそのもののうちに思い出を嗅ぐのであって、その匂いが私にとって全てである。」という言葉を思い出します。まさにその通りだ、と思います。

「私には、文字を見ると、色が付いて見えるが、それは文字によって引き起こされるのではない。文字そのもののうちに色を見るのであって、その色付きの文字が私にとって全てである。」

「私には、女性や風景を見ると、色や音や触感が知覚されるが、それは女性や風景によって引き起こされるのではない。女性や風景そのもののうちに、色と、音と、触感とを知覚するのであって、女性や風景が私にとって全てである。」

F 共感覚も、その他の共感覚も、常に人間の知覚能力の範囲内のものとして、人間らしい感性として、語られるべきものだと、僕は思います。

さて、以上の点を前提として、僕は共感覚を語っているのだと理解していただければ、本望です。

僕の共感覚体験記（女性について3）

二〇〇七年七月二十五日　起筆、擱筆、公開

少し前、「純一さんにとって、赤く見えている女性は、暗がりで見てもやはり赤いのでしょうか。青い女性は、暗がりでもやはり青いのでしょうか。例えばハ短調の女性は、暗いところで見てもハ短調の姿なのでしょうか。」という、女性からの質問があった。とりあえず、「おっしゃるとおりです。」と答えたけれども、とにかく僕は、この質問の文面そのものに言葉にならない美しさを感じてしまい、「ああ、美しい質問だな。」と思って、それ以降の詳細な答えを書く前に、思わず手が止まってしまった。そこで今日は、書きたかったことの中から、いくつか書いてみようと思う。

それにしても、日本は本当に「明るすぎる」社会になったと思う。どこを見ても電気の使いすぎ状態、電気の付けっぱなし状態で、まぶしすぎるくらいだ。先日の中越沖地震の停電は、早く復興してほしいと願ったけれども、一方で、我々は「明かり」がなければ何もできない社会に生きているのだと、停電を見るたびに思う。僕は、「日本がまぶしすぎる社会、やかましい社会、よくしゃべる社会になった」ことも、共感覚を日本人男性の中から奪い去った一因なのでは

ないか、とずっと思っている。

質問して下さった方には期待外れかもしれないけれど、本当は日本人女性の美しさを語るとき、「僕のような男性共感覚者の目に、女性が特別にどう見えているか」ということを、いかにも専売特許のように強調するという以前に、まずは、おしなべて日本人男性にとって、その美しさがかつてどういうものであったか、ということを思い起こすべきだと僕は思っています。

「僕に女性の姿がどう知覚されているかということと、”暗がり”との密接な関係」については、とても重要なことで、ずっと考えているし、僕がなぜ日本人女性の美しさに「暗がり」「夜」「陰影」というものが必要であると思っているか、その理由を書き始めたら、確かに頭の中に何十もあって書ききれないものではあります。しかし、僕の共感覚体験を書くときに、僕の主観以前に、日本人女性の美しさについて何らかの客観性なり普遍性があるかどうかを考えることに意味がないことはないと思うし、まずはこれらの点に目を向けておいた上で、再び僕の主観的美感に立ち戻りつつ僕の共感覚を書かせてもらえるなら、きっと説得力のあるものになると思うので、そういった書き方で書いていこうと思います。今回は、その前置きの部分です。

①日本人女性の美しさは、「暖色から寒色に移行する」変容と「彩度が落ちて無彩色に移行する」変容の中に、すなわち「暗」「夜」「影」の中にある。

日本人女性の和服姿には、ただそれだけで固有の美観があるけれども、それは暗がり・夜・陰影の中においていっそう美しさを増すと思う。日本人女性の美しさは、そもそも暖色よりも寒色の中に、まぶしい有彩色よりも繊細な程合いの有彩色と無彩色の中にあるものだと感じる。

それは、しばしばそれを目にする男性の主観によるものであるけれども、古来より日本人女性の美しさは、人間の目（網膜）の特徴から生み出される「プルキンエ現象」にそぐう美しさである。ここでメカニズムなどを説明してしまうと、僕が本当に書きたいことにそぐわないので、詳細は省くけれども、とにかく日常でも、明け方や夕方など暗いときには、赤いもの（波長が長い）は暗く黒く見えるのに、青色のもの（波長が短い）は比較的きちんと色が見える、あの現象のことを言う。（だから、道路標識などは青くしてある。昼間は逆に、赤や黄のものが目立って見える。）　この現象は、もちろん日本人に限らず、ヒトの網膜に見られる特徴だ。しかしながら、横文字で「〜現象」などと僕が書くまでもなく、そしてプルキンエがこれを”発見した”などと言うまでもなく、「かつての日本人女性は、皆これを自分たちの体と頭で知っていた」ということが、僕には実

に重要に思えるし、感慨深くさえある。

日本人女性の唇というものは、赤い色をしている。しかも、日本人女性に特有の赤色をしている。いや、ここですでに「赤い」と言うよりは、薄紅色だ、朱華色だ、紅梅色だ、などと言いたいところだけれども、とにかくそれは、まさに赤に近い色をしているのであって、青や緑ではない。

さて、そこにいっそう濃い赤色を上乗せするのが、口紅というものである。つまり、口紅を引くというのは、人間の色覚上から見ても、また現代の社会生活のあり方から考えても、「女性を昼に見る」「女性を太陽光のもとに眺める」ためになされるもので、「女性を昼に見」なければ、口紅は意味のないものになってしまう。塗れば塗るほど、そうである。日が落ちたときに真っ先に明度と彩度とが減び行くのは、長波長域を占める、まさに女性の唇、肌のうちのより赤みを帯びた部分に他ならない。そして、日本人女性には日本人女性の、生まれ持った肌の色がある。従って、日本人女性の頬や鼻の肌の色と、その唇の色の対比を見るにつけ、その同じ姿のまま夜になったらどうなるか、ということを考えればよく分かる。要するに、口紅というのは、「生まれつきの唇の色＝昼夜を問わない美・明暗を問わない美」を、「より濃い赤色・紅色＝”昼”、”明”、”光”の美」に集約するもの、生まれつきの唇の色に不足を感じる中で、夜の美を不在にしてまで、あえてそれを昼の世界に引き連れてくるものです。

普段の日常の中で、常にこういった点に目が向くのも、男性共感覚者に特有の知覚の仕方かもしれないけれども、しかし「共感覚者としての僕」ということを抜きにして考えても、どうしても僕は、いつもそういったポイントに目が行くから、今はそういった意味で書いている。しかし一方で、女性は女性で、それを日常生活で無意識のうちにやっている（昼に自分自身がどう映えるかを、思考に上せないところですでに実行している）わけで、女性のそういった点には、いつも驚かされるものだ。

かつての日本人女性は、青い口紅を塗っていた。（この「青い口紅」という言葉がすでに矛盾かつ不適切であり、本当は「口青」と言うべきだが。）　かつての祇園の女性がどうだ、などという意味ではない。「京紅」の口紅の濃い紅色が悪いという意味でもない。（京紅は、それはそれで昼間の女性の美にこだわったものである。）　しかし、とにかく「青や紺や藍や紫や碧や緑の色が、いかに自分たちの身体を、背後の日本の夜の空気というキャンバスにそぐうものにするか」ということを、日本人女性は生活の中でおしなべて知っていた。

ここで「青い口紅を引く女性なんて、よほどセンスがないのではないか。」と思うのは、それは日本人女性の美のうちの「昼の、明の、光の側面」だけを見ているからに他ならない。日本人女性が青口紅をつけた、という時点で、その女性は「私は夜に見られる」ことを

意識している。こういったセンスが、実践とまでは行かなくとも、今の日本人女性に少しでも残っていることを願うばかりである。そして、日本人女性の美しさが、暗がり・夜・陰影の中においてこそ増すものだという伝統的美感には、実は僕ら男性共感覚者と男性色盲者の色覚が深く関わっているというのが、僕の考えているところなのだ。

右上：大多数の人、右下：第一色盲、左上：第二色盲、左下：第三色盲の人の色覚

②日本人女性の美しさは、日本独特の主観的な色彩感覚を問いながら、一方で日本人男性の視覚・色覚の主観をぎりぎりのところで曖昧にすることにおいて完成を見る。

日本人女性の美しさが、何も僕のような男性共感覚者だけに映るものではなく、かつての日本人の美感そのものの中に脈々と流れるものであった、その一例を、色盲の視点で見てみるとする。

現在も、日本人男性の二十～三十人に一人は、いわゆる色盲である。（僕はあえて色覚〝異常〟や色覚〝障害〟という言い方を避けて、「色盲」と呼ぶことにしています。呼称が変わっても、結局は人の意識の問題だと思いますし、「色盲」のほうが淡々と色覚の特性を述べている適切な言葉だと、個人的に判断しています。）

両者合わせて色盲者のほとんどを占める第一色盲（赤錐体細胞の欠如）と第二色盲（緑錐体細胞の欠如）の場合、昼においては緑色と赤色が、我々で言うところの黄色や黄土色や枯色といった黄色系統の色に見えているが（洒落て言うなら、青色以外のものは、セピア

色に近い色世界である）、日本人女性の肌の色も、また美しい色に見えているのである。

と言うのも、（僕は色盲ではないし、むしろ女性を見ただけで色や音や触覚までを感じるという点では、女性に対する知覚の仕方は、色盲者のそれとは一見すると正反対なのだが、）　女性の見え方が他の”健常な”男性と僕とで異なっていることに気付き、「共感覚」なる言葉を知るまで長年悩んできたこと、そして、結局は「女性についての見え方は主観である」「女性に客観的・絶対的な美などない」ということ、それらの観点から、僕は色盲者の知覚に親しみを感じて、共感覚探究の一環に色盲探究を据えている。

今では、僕は女性の姿や風景などを見て、それを第一色盲～第三色盲までの人にどう見えているかを即座にシミュレーションして、目の中に浮かばせることができるようになったが、とにかく、色盲者の見ている日本人女性の姿も、昼間であっても、また一つの美を保っているものだ。極めて稀である第三色盲（青錐体細胞の欠如）にしても、女性の肌は、少し桃色がかって見えるが、ヒトの青錐体細胞はそもそも数が少なく、第三色盲者は我々とほとんど事情が変わらないし、障害などという目で見る必要もない。

そして、夕方、日が落ちて、わずかに光が差しているという頃（つまり我々の色覚が暖色から寒色に移行する頃＝長波長から短波長に引きずられる頃）になると、当然ながら、色盲者とそうでない者との色覚の峻別は、なおさら意味を成さなくなる。女性の肌の色も、明度と彩度が落ちて、かつ色相が寒色に移行してゆく。先ほどの唇の色も然りだ。やがて、昼間には最も目立っていた赤色がまず最初に散り行き、かすかに青や紫や紺や緑の色が目のうちに残っている状態、すなわち、ちょうど色盲者の昼間の見え方がそのまま明度と彩度とを落としたような状態になる。そうして、日本人女性の肌は、まぶしい赤色を忘れる代わりに、悍体細胞の助けを借りて、微弱な月明かりや屋内の灯火のもとに暗色に移行した肌色ないし鶯茶色や媚茶色を見せ、そこに寒色の濃紺や緑青の服装なりアクセントなり口紅が映える美観を生み出す。たとえ現代であっても、日本人女性の美しさは、本来は赤い口紅を引くことにはなく、昼間は薄く引いておいて、夜に何らかの暗色や寒色の服やアクセサリを身に付けることにある、と言っても過言ではないと思う。

日本人女性の美しさというのは、本当はどこかで男性の主観を問いながら、最後にはそれを裏切るところで、完成を見る。このことを、僕の個人的な共感覚体験を述べる前に、書いておきたい。冒頭の意味は、そういうことです。言い方を変えれば、日本人女性の美しさや日本人女性の持つ色彩センスというのは、むしろ男性共感覚者や男性色盲者の美感と主観に十分に答えうるものだったし、それは昼よりも夜、明よりも暗、光よりも影においてこそ、いっそう美しいものになるということを、女性のほうも身に染みて知っていた。逆

を言えば、共感覚が後天的な天才的能力のように言われ、色盲が障害のように言われるようになったのは、日本があまりに明るすぎる社会になったことが一因としてあるかもしれない。今の夜のあり方は、まさに昼のようだ。

僕が思うに、色盲は、共感覚同様、決して障害などではなく、昔から脈々と人間の中に流れている「文化」のようなものである。性染色体が関わる以上、男性のほうに色盲者が多いとは言っても、そのメカニズムを解明することは科学者に任せて、僕ら男性共感覚者は、まず共感覚や色盲そのものが、むしろ日本人女性を美しく見せることに一役買っていることを、脈々とした文化伝統の中で見つめ直してもよいのではないか。

エジプトのピラミッドを、当時は珍しくなかったサヴァン症候群やアスペルガー症候群の人びとが作ったと考えれば、何の不自然もなく、事実、海外ではそのような観点がようやく見直されるようになったように、同様に日本の男性共感覚者の色彩感覚や音の感覚や触覚、男性色盲者の色彩感覚は、同系色を美の基調に据える日本独特の色彩感覚を生むことに、かつては一役買ったかもしれない。

もちろん、色盲は、感覚器官そのもの、網膜の問題であって、男性共感覚者のように脳自体の構造を根本的に問うものではないから、色盲であっても共感覚者かどうかは言えないことは確かだ。しかし、両者が共通して持てる心が、「日本人女性の美しさは、昼の色覚の中にのみあるのではない。わずかな光の中に、どんな寒色と形と音と触感とが残るかにこだわることにある。」ということであるなら、実にすばらしいと僕は思う。

共感覚者は圧倒的に女性に多く、逆に色盲者は男性に多いというのは皮肉だが、日本の男性共感覚者と男性色盲者が手を取り合えば、何か面白みのある、味わい深いことができるのではないか、といつも思っている。人数が多いほうに色覚障害・色覚異常などと、「障害」「異常」なるネーミングが与えられているのは、何とも寂しい限りだ。ならば、男性共感覚者は極めて重度の障害者・異常者ということになってしまう。そんな見方は寂しいし、情けない。もったいない限りだ。

僕がまだ自分自身の共感覚を説明し切れていないので、何ともじれったい限りである。そして、もし色盲・色弱でかつ共感覚をお持ちの女性がいたら、ぜひ出会ってみたい。そう思っています。

さて、日本人女性の美しさというものを、僕個人に対して尋ねられたのに、あえて僕の主観的美感だけでなく、人間の色覚のあり方と日本の伝統に広げて語ってしまったことを、質問者に対して少し申し訳ないと思うけれども、しかし、だからこそ僕のような男性共感

覚者の感じ方が、いかにかつての日本の伝統美と関連の深いものであるか、ということが見えてくると思う。

それを語っていきたいのですが、長くなったので、今回は①②のみで、続きは次回に。

参考記事・・・http://ij-art-music.sblo.jp/article/4613266.html

僕の共感覚体験記（色彩を表す漢字）

二〇〇七年八月七日　起筆、擱筆、公開

「漢字に色が見える共感覚」の続きです。（前回の「女性に対する共感覚」の続きも、書いていきます。長くなりそうですが。）

今日は、「色の名前を表す漢字は、共感覚者には、その色のとおりに見えているのか」という、しばしば見受けられる問いに関して、僕の体験を図示しておこうという趣旨とでも言いましょうか。

ご覧の通り、僕には、色の名前が自らの共感覚に一致しないことが多いため、少なくとも、物心ついて、「文字」というものを学習するようになってから、十五年ほどは違和感を覚えていました。（今となっては、この頃も懐かしく思えるものですが。）

それにしても、例えば「紫」という漢字を見ると、”普通なら”「ムラサキ」という”感じ”がするそうですが、僕はいまだに、その感覚を”感覚”するのに苦労します。（それがどういう感覚かは、分かるようにはなりました。ただ、それを意識的に毎度毎度やるという苦労を、他の人がやっていないと知ったときは、子どもながらに驚いたと同時に、言語習得に引っかかっていた理由が鮮明になって嬉しかった覚えがあります。）　「橙」を見ると、あのオレンジ色が頭に浮かぶ・・・「紺」を見ると、ああ、濃い青だなあという感じがする・・・そんなことが、なぜ大多数の人の”普通”の感覚であるのか。それが不思議でならず、そういったことを、言葉にしないまで

も、ずっと考えてきました。でも、昔よりは慣れたし、本もずいぶんとスムーズに読めるようになったものです。

十代の頃は特に、「他の人と僕とで、文字や言葉の記憶の仕方が違うはずはない」と自分に言い聞かせていましたが、いつも周囲との齟齬を見せ付けられるたびに、悩んでいました。しかし、小学校の漢字のテストなどで、ほとんど満点だったのはなぜか、それが僕の「”モノの形状”を記憶する能力の特殊性」で説明できるのか、それはフォトグラフィックメモリーと同じなのか、そのあたりを今探究中です。（日本車のヘッドライトを見ただけで車名が言えるという、四・五歳の頃からの僕の能力は、これと関係があると思っています。）

僕は、失読症の人や言語を新作する統合失調症の人、自閉症の人の言語と文字への「感じ方」は、病気だ、病気ではないと言う以前に、むしろごく自然なことであると言えるものだと思っています。共感覚とそう遠くない話、いや、まさにそれこそ共感覚なんだという感慨を覚えるし、そういった”特殊な”人の素晴らしい個性を考慮に入れつつ、僕自身の感覚と向き合っていきたいと思っています。（ところどころ、漢字のとおりの色がまばらに付いているのは、おそらく何年もかけて、「この文字はこの色を表すのだ。」と無理やり自分に言い聞かせてきた、僕なりの努力の痕跡かもしれません。）

もしほとんどの場合で、漢字の意味と形状とが一致する方がいらっしゃれば、共感覚と言うよりは、何か後天的な学習によって得た感覚であるかもしれません。（もちろん、ひらがなや数字など、特定の文字体系にのみ共感覚をお持ちの方が圧倒的に多いので、一概には共感覚者と非共感覚者とを峻別できないということは、これまでも書いてきたとおりです。）

ご覧の通り、僕であれば、例えば「ムラサキ」という、まさに僕の目に見えているムラサキ色をカタチにするなら、「紫」などというカタチの文字にはしないわけです。これは言い換えると、「僕という個人」が「母国語である日本語に使われる文字体系」にさえ、違和感を感じて生きてきた体験ということであり、何か民族性や国籍や一切の所属や、僕自身の個人的な文化観さえも僕自身によって超越したような、「日本語の手前にある僕という人間、あるいは個人そのもの」を、あるところでは、僕自身に対して示すものであるかもしれません。

一方で、僕の日本語に対する並々ならぬこだわり、日本語を美しいと思う心、「ちょー」や「マジ」というような同世代の人が使う言葉がどうしても嫌で、会話でも文章でも一度も使ったことがないその美意識とこだわりは、いったい僕のどこから来るのか、どうしてそれらが僕の同じ心から出発している言語観であるのか、それを考えるのが、今は面白い限りです。政治的なイデオロギーでは全くないけれども、少なくともパトリオティックな文化観と、郷里と日本各

地の方言を大切にしたい考えにまで、僕の心が及んでいるのは、自分でも本当に見ごたえがあって、胸がせわしなく、熱くなる思いです。

さて、話すのにさえ、並々ならぬ精神力を要する共感覚ですが、こういった、図示可能な共感覚については特に、（言語障害のゆえに自分の感性を語れない、自閉症などの方々のためにも、）僕のような共感覚者が語る責任というものを感じます。プレッシャーという意味でもなく、自閉症者・障害者の代弁者という意味でもなくて、僕が、そもそも日本語を大切にしながらも、一方では日本語の手前・言語の手前にある人間の「世界の見え方」を、実在の現象として、身をもって知っている人間である以上、こうして自らの感覚を、少しずつでも人に分かる形で、図示なり文章化していきたいものです。

「自分だけが違う。言語能力が劣っている。」と悩んでいる子どもがもしいたら、その子はむしろ、絵画の能力に長けている、素晴らしく個性的な子どもだろう、と僕は思っています。そういう子どもを、大人はもっと愛するべきだと思います。

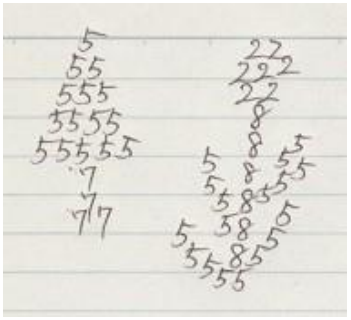
関連記事

http://ij-art-music.sblo.jp/article/44608 60.html

http://ij-art-music.sblo.jp/article/4654851.html

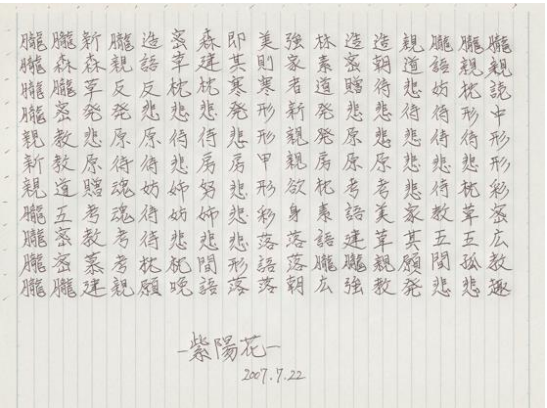
僕の共感覚体験記（共感覚を嗜む）

二〇〇七年八月九日　起筆、擱筆、公開



1234567890

●「木と花」（僕には、数字の形状が右のような色に見えているので、それを用いて。）



●右の紫陽花の写真の色彩を、僕の共感覚で描いたもの。僕には、漢字の羅列が、右の紫陽花や葉の影の色彩に見えています。

解説

●前回の記事とも関連しますが、「漢字の形に色が見える」ということは、漢字をパレットとして、様々な絵が描ける、ということになります。もちろん、数字でも仮名でも何でもよいのですが、数字だと十通りの色しか使えないことになり（字体による濃淡などの違いはあるけれど）、図のような木や花といった簡単なものしか描けません。（こういう遊びは、子どもが喜ぶかもしれないですね。）

さらに繊細な「共感覚絵画」として、紫陽花の写真と女性画を例にとってみます。（タテ・ヨコ適当にセルに区切って、そこに見える色に当てはまる漢字を描いていくという、共感覚者なりの楽しみです。）もちろん、マス目をどんどん細かく区切っていくと、限りなく写真のとおりの写実性に近づきますが、それだと漢字の形が逆に見えなくなるので、この例程度の区切り方のときが、ちょうどよい具合に、僕には美しい花模様に（色が付いて）見えています。

ただし、同じ漢字に対して見える色は共感覚者によってばらばらですので、この漢字の羅列が写真のような紫陽花に見えるのは、僕だけ、というのが、なんだか切ない気がするものです。いつも（昨日も）書いているように、失読症や言語障害を持った人が、いかに言語を「意味」以前に「絵画的に」とらえているか、共感覚の視点からそれを考えることも、僕は必要だと思っています。

逆に、こういった漢字やその他の文字の羅列を眺めたり、本を読んだり、新聞を読んだりしているときに、その文字列がちょうど僕にとって美しい色彩を帯びていると、風景や人の姿や音楽が浮かんでくることがあります。また、僕は作曲をしていますが、音楽を聴いて、そこから極めて鮮明な風景や事物や人の姿が見えることがあります。（当然ながら、そのときには、自分の共感覚が強すぎるために、

本に書いてある内容や文章の意味が分からなくなって、それはそれで慌てる。）

例えば、身の回りのどの人の姿を曲にしようかと考えたとき、さしあたり思い浮かばないときには、自らの共感覚を用いて女性画を描いておいて、それを曲にする、という二重の芸術表現をすることがあります。本を読んでいて、女性画が見えることもあって、思わず見とれることがあるので、正直に言うと、社会生活ではこの感性を抑圧しないとどうしようもありません。二重と言っても、僕の中では一つの「出来事」ですけれど。共感覚に限らず、女性画を描くのは好きなのですが、こうして共感覚を用いて描くこともあります。

●時々見かける問いとして、「何の文字かが分からないくらい遠くから見たら、黒一色に見えるし、文字の一部しか目に入らないくらいに近づいて見たら、線しか見えないはずですが、それでも共感覚者にとっては色が付いて見えるんですか？　急に色が変わるんですか？」という鋭いものがあるけれど、この答えは実に簡単なことだと僕は思うのです。

例えば、登山をしているとき、我々には木々の緑だけでなく、幹の茶色や、歩いている道の砂の茶褐色や、露出している岩の灰色や、人の着ている服の色が目に入りますが、だからと言って、遠くから山を見て「ああ、あの山は美しい深緑だなあ。」と感傷に浸っている人に向かって、わざわざ「山が緑色だけのはずがない。茶褐色や灰色や青色や赤色もある。よく見なさい。」などとは言いませんよね。それと同じことだと思います。

もみじの葉が百枚あるとします。そのうちの1枚を残して、残りは全て緋色に紅葉したとします。それを遠くから見たら、緋色一色に見えるに決まっていますね。それと同じで、何の文字かが分からないような状況で、文字に色が付いて見えることはありません。そういう人間の身体の構造と機能（分解能が二百マイクロメートルであるとか、紫外線や赤外線は見えないだとか・・・）をはみ出るようであったら、それこそ「超能力」で「非人間的な能力」になってしまいます。むしろ、僕が共感覚を語る上で最も避けたいのは、そういうことなんです。

僕だって、いくら共感覚者であるからと言って、地球の裏側にいる女性に向かって「美人ですね。あなたの左耳あたりの空間に、素敵な桃色のラインがありますよ。感動します。絵に描いてあげましょうか。」なんて言えないし、見えない微生物に向かって「君は青色でホ長調だね。」なんて言えるわけがありません。共感覚者の知覚の仕方は、〝普通〟だとか〝常識〟だとか言われているものからすれば、特異な能力だとは思いますが、僕は共感覚者というのは、そもそも人間の身体にとても忠実な生き方をする存在だと思っているんです。

漢字（やその他の文字）に色を見る場合、その文字の意味に関係なく色が見えるけれども、それは例えば、ある花があって、それが何の花であるのか、名前が分からなかったとしても、もしかしたらその花を毎朝、一輪だけ人に手渡すことが、ある文化圏においては「おはよう」という意味内容の「言語」になり得たかもしれないのと同じことだと思います。そういうことを、我々は音声と文字でやっているということなのであり、そしてその文字の意味（漢字の意味）を僕も理解はしているけれども、一方で、それ以前に僕にとっては、文字や文章というものは、「色彩のパレット」であり、（絵画そのものではないけれども）絵画に匹敵する芸術であり、（人そのものではないけれども）人の美しい姿を思わせるものである、ということなのです。

共感覚と真摯に向き合う

二〇〇七年八月十五日　起筆、擱筆、公開

●先日、「共感覚者は障害者だと思う」との意見を他の人からもらったという、共感覚に理解のある非共感覚者から、「そうではないと思う、と返事をしておいた」との話を聞いた。その理解の深さと対応とに、僕は感謝と感動を覚えたのだが、（以前より、その理解の程度には感心させられていたし、そういう人は、すでにどこか共感覚的な感性の持ち主である、と僕は思うのだが）　同時にその事実を聞いて、寂しさも覚えた。そして、過去の色々なことがフラッシュバックしてきた。（そのときの気分をあまり表面に出さなくなった自分を、それはそれで、面白くない人間になったなあ、と思うが・・・。）

いつも僕は周りの人に、「僕のブログの書き方は、敵も味方もたくさん作るような書き方だと思う」と自分で言っている。なぜかと言うと、わざと共感覚というものを、ハードルを上げて書いているような自覚が、ないわけではないから。しかし、先のような例を聞くと、もし多くの人からの理解を期待するあまりに、今の書き方を緩めて敷居を低くすると、僕が思う以上に多くの人からの偏見の目が降りかかる恐れがあるのではないかと、不安になる。その不安感こそが、僕の文体に影響していることは間違いない。言い方を変えれば、臆病であるかもしれない。それはどこかで、常に自覚している。

今、もしこの敷居を下げたら、きっと多くの感性豊かな子どもたちが読んでくれるだろうという期待がある。今のままだと、子どもが読むには、難しすぎるからだ。むしろ、子ども相手に共感覚を語るというのは、実はすごく楽なことだと思う。一方で、いざそれをやると（「共感覚」という言葉を用いずに、「僕は音に色が見える」「僕は文字に絵が見える」という、僕が最も美しいと思う書き方を貫こうものなら）、先のような状況に陥るかもしれない。僕は「共感覚者

が障害者である」と言われるのが、本当は怖い人間かもしれない。このことは、実は僕の中にずっと巣食い続けているジレンマなのだろう。

しかし、今はどちらかと言うと、僕自身が「障害者」と言われようとも、あまり傷つかない気がする。なぜかは分からないけれど、「自分が人と違う人間である」ことに、もはや慣れたからだろうか。むしろ、他の共感覚者が障害者扱いされるのを見ると、無性に憤りを覚えるということのほうが、多くなった気がする。

「障害者」という言葉自体が、あまりにも信用ならない、曖昧なものだと僕は思っている。むしろ、そういう曖昧さの中に、あたかも明確な定義があるように考えるという、そういう「人間の過ち」からできるだけ離れて共感覚を見つめることが、僕の「共感覚探究」の目標だと思う。

例えば今、「いくら共感覚を説明しても分からない人の脳は、どこか障害があるんじゃないか。」などと僕たち共感覚者が言ったら、大多数の人が憤慨することになる。どこかの星で、「地球人は、あんなに二酸化炭素を出したり、戦争をしたり・・・、よほど脳に重い障害があるのではないか。」などと議論が交わされているかもしれない。そういうことは、あるかないかが分からないうちは、ないとは言えないし、曖昧なものにすぎない。「障害者と健常者」という区別は、本来はそういうものの考え方のうちにあるべきだという気が、僕はする。それこそ相対的なものの考え方だ、と思う。共感覚者は、自分の感性が絶対的で揺るぎないものであるからこそ、人に思いやりを持って、相対的で客観的な考え方をすでに持てるのではないか。

しかし、「何かが障害者の定義になっている気がする」「健常者と障害者は区別できる」という暗黙の前提のもとで、我々は障害者を見ている。これは本当に怖いことだ、と僕は思う。

それでも、僕がこうして堂々と共感覚について書いていられるのは、百人のうち一人でも理解してくれるなら、それで本望だ、という微かな期待からだと思う。しかし、ここ最近は、その期待の可能性は「微か」と悲観するほどでもない、類は友を呼ぶのだから、理解者は周りにもっと多くいてくれるだろう、という気持ちが出てきた。もし周りに理解者が増えたら、僕がわざわざこんな拙文を書くまでもなくなり、なぜ今さらこんなことを書いているのだとさえ、自分で思うようになるだろう。それはそれで実に爽快だ、と僕は思う。

●いつも見ている虹色協奏曲BBSに、十一日に研究者からの書き込みがあった。勉強にはなるので、いつもそれなりの答えを頭で考えるようにしているが、今回は返信しようにも、ほとんど返信の仕方が分からない。

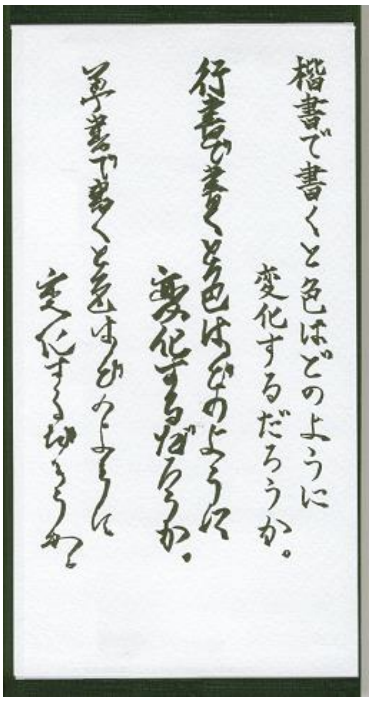
http://www.hidebbs.net/bbs/mamesynes

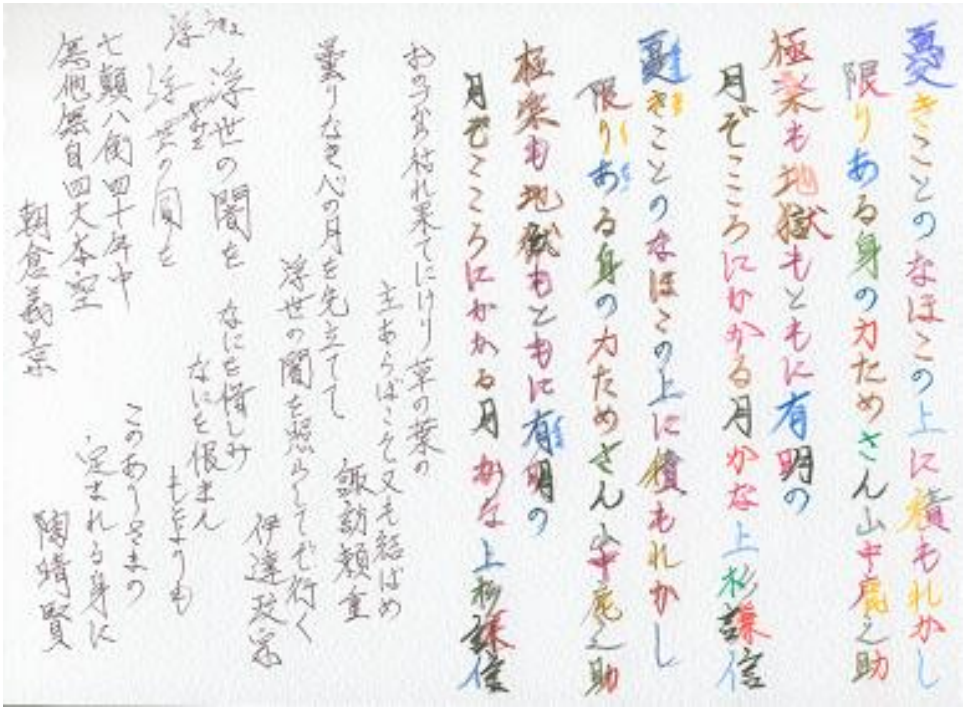
「最も典型的な日本人共感覚者の経験を研究し、それによって最も効果的な研究を進めたいと思っています。」とのことだが、まず何よりも「僕が典型的な日本人共感覚者であるのかどうなのか」が分からないと、わざわざ冒頭に掲げられている相手の意に沿えないのだから、ここでまず立ち止まってしまった。しかし、そもそも僕は、自分が「最も典型的な日本人共感覚者ではない」と思っているばかりか、「共感覚に典型などない」というのが、共感覚研究の採用すべき最低限の態度であると思っているから、この問いに答えることがそもそも不可能である気がする。しかも、「最も効果的な研究とは、最も典型的な”人間”を離れて、ある共感覚者個人の生い立ちや感性を追い続けることではないだろうか」という僕の考えの一方で、何かしらの「典型」を見い出して一般化するのが科学の役割だから、このジレンマにどう立ち向かうかを、まずは考えないといけない。だから、全く答えが思い浮かばない。答えたくないのではなく、何か協力したいと思うがゆえに、答えようとすればするほど、答えに窮して、苦しくなる感覚だ。要するに、僕がこれに答えてよい人間であるのかどうか、答えるとどうなるのか、その判断が、まずとんでもなく難しすぎる気がする。

本当に個性的な共感覚者は、この問いに答えられないのではないか。それに、選択肢についても、僕の場合は全てにチェックが付く。そんなことをしたら、嘘だと思われないだろうか。もう少しじっくりと考えることにする。

共感覚ギャラリー1

二〇〇七年八月二十二日　起筆、擱筆、公開





●僕は、全ての漢字に色が付いて見えますが、楷書だけでなく、行書・草書も時々書いて、調べてみています。もちろん、一本の線に

なるほどの崩し方をすれば、形が全く違うので、元の楷書に見える色からはずいぶんと遠ざかります。

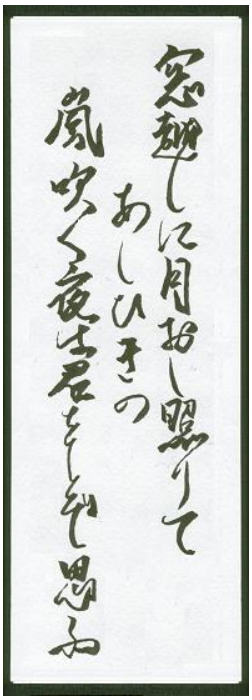
●戦国武将などの辞世の句は、ほとんどは文字だけでなく、色で記憶しています。適当にスキャンしたので、分かりにくくて申し訳ないです。同じ歌のところは、右（＝最初から色で書いたもの）と左（＝黒で書いた文字を見える色でなぞったもの）とで色が一致するか、自分で実験したものです。）

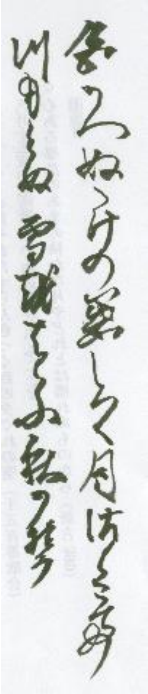
百人一首も全首記憶しているけれど、これも一首ずつ、それぞれ色が違うので、「覚えることに苦労はしないけれども、歌の内容や色彩が美しすぎるという意味で、その自分の感性に苦労する」。しかし、色を間違えたら、歌も間違えるわけで、いわゆる短歌通の人と知識的にそんなに差はないと思うが、どうなのかは分からない。

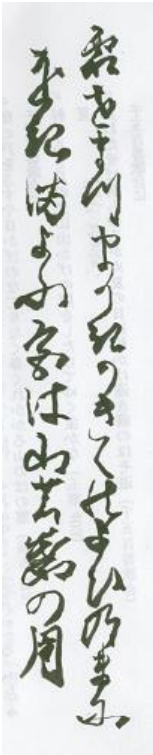
面白いことに、三島由紀夫の「益荒男がたばさむ太刀の鞘鳴りに幾とせ耐へて今日の初霜」は、短歌としては強がりすぎで、勇ましすぎるが、色彩は穏やかにすぎ、森田必勝の「今日にかけてかねて誓ひし我か胸の思ひを知るは野分のみかは」は、色彩はダイナミックで原色的で勇ましいが、短歌としては特にひねりがないんだな・・・。

共感覚ギャラリー2

二〇〇七年八月二十九日　起筆、擱筆、公開







●最初の六枚。仮名・漢字に色が見える共感覚について、楷書・行書・草書と、色々な書体で書いて、実験をしてみています。今日は、万葉集の好きな歌を思いつくがままに書いたものを載せました。

書体を変えるたび、文字を書くたびに、様々な色彩を見せるので、その感動のほうが大きくて、僕自身も新たな発見ばかりですが。

●七枚目。二十四節気を、文字でも覚えてはいますが、文字の色も用いて覚えているので、それを描いてみました。人にはびっくりされますが、いざ自分の記憶法を自分に対して視覚的に描いてみると、どうも照れくさかったり、あるいは、これは本当に効率の良い覚え方なのだろうかと、少し不安感を覚えたりします。

●八枚目。今日も地下鉄に乗ったのですが、東京メトロが決めている地下鉄の路線名と、その路線のシンボルカラーとが、僕の共感覚に一致しないために、いまだに大混乱に陥ることがあります。きっと周りの人は、僕がそんなことで困っているとは思っていないはず・・・ですが、当の僕は、今や苦労を通り越して、一人で興趣に浸っています。「あれ、なぜ千代田線が二本もあるんだ・・・。あ、これは有楽町線だった。」という具合に。（その下の言葉は、ちょっとしたジョークです。思わず書いてしまった・・・。）

●前回・前々回のスラフォーリアの話は、一度書き出したら、文法的なことを色々と書いてしまいたいですが、本日は少し休憩です。

漢字の共感覚色一覧

二〇〇八年一月一日　画像制作、起筆
二〇〇九年一月二十日　公開
二〇一六年九月十一日　最終更新
特設サイト「知覚・共感覚」

一覧表は別添資料を見よ。

漢字の共感覚色一覧

2009 年 1 月 20 日

岩崎純一

掲載サイト：http://iwasakijunichi.net/

目次

0. 目的
1. 筆者の漢字認識
2. 記録方法

0. 目的

共感覚者である筆者が漢字について日常的かつ不可避的に知覚している共感覚色を、自ら忠実に記録することを目的とする。(2008 年 1 月 1 日から 12 月 31 日まで、筆者 25 歳から 26 歳の時期)

1. 筆者の漢字認識

共感覚者が漢字に見ている多様な色を寸分の誤差もなく忠実に再現することは、不可能であるとしか言えない。しかし、ある部首はある特定の色相の範囲内の色彩にしか見えないなど、一定の傾向はあるのであって、これらをなるべく正確に記録してゆく作業は、共感覚者当人にとっても自らの感覚を知るよい契機となると考える。

小学生の頃の私は、「文字記号である漢字の構成部分としての黒線の羅列（亜など)」と「記号性を持たない無意味な黒線の羅列（二｜｜□×＿〒）など)」との区別がなかなか付かず、「共感覚で見える色」で漢字を記憶しており、そのためにかえって漢字テストの成績は大変に良かった。

当時、前者のような線の羅列が文字であることを筆者に保証するのは、「文字としての学習」というよりは「共感覚で見た覚えのある色」であった。この点が、見覚えのある抽象的な黒線が眼前にあるというのみでそれが文字であることを認識できる、あるいは黒線の配置が違えば直ちに違う漢字であると認識できると主張した当時の友人たちの知覚世界とは、大きく異なる点であったと思う。

筆者が、共感覚がないと主張する周囲の友人たちと同程度の速さで日本語の文章を読解することができるようになったのは、ちょうど中学校に入る頃に、一文字につきわずか零点数秒で線の羅列に見える色を漢字の読みに変換・同定し、それを文章全体に渡って高速に繰り返すことができるようになったからで、その読解法のなごりは、成人した現在も頭と体に存在している。

私の経験上、男性においては、筆者のように全ての漢字を色で処理していながら言語コミュニケーションに支障がない場合は稀有であって、そのおよそ九割近くの男性が言語障害者として生活しているものと考えている。全ての漢字に色が見えていながら、六割以上が言語障害を持たないことが観察される女性の場合とは、対照的であると感じる。実際のところ、発達障害や知的障害は多く男性に現れるものである。

しかし、わずか 30 字弱のラテン文字しか用いない欧米圏の人々が日本語の仮名・漢字の

多さを知ったときの驚きをよそに、日本人が日本語を難なく操っているのと同様に、筆者にとっては、この試みで記録した全漢字の色彩は、現在もいつでも取り出し、難なく操ることのできるものとなっている。

2. 記録方法

2.1. 対象とする漢字

以下に該当する漢字について、筆者が見ている共感覚色を記録した。

●工業標準化法に基づき財団法人日本規格協会によって選定・公布された日本工業規格（JIS 規格）において定められる「7 ビット及び 8 ビットの 2 バイト情報交換用符号化漢字集合」（通称 JIS X 0208）のうち、16 区から 47 区までに割り当てられた第一水準漢字 2965 字。

第一水準漢字には文部科学省が定める常用漢字 1945 字（1981 年公布）が含まれ、その中に通称としての教育漢字が含まれる。なお、第二水準から第四水準までの漢字についても共感覚色が見えるが、現代日本人の一般的な生活においてはほとんど使用されない漢字であるため、省略した。

2.2. 記録時期及び条件

(1) 次の時期及び条件のもとに記録を行った。各漢字について二通りの天候のもとでの共感覚を調べることで、記録の正確さを図った。（ア）と（イ）で色の彩度・明度などが異なる場合は平均をとり、一致する場合はそのまま記録した。

（ア）2008 年 1 月 1 日～12 月 31 日の快晴の日における上記漢字に対する筆者の共感覚色
（イ）2008 年 1 月 1 日～12 月 31 日の雨の日における上記漢字に対する筆者の共感覚色

(2) 字体により共感覚色が異なる場合があるが、WindowsOS において標準搭載されている MS 明朝体で表示可能な字体を目視した際の色を記録した。

「飽」を例に示す。
左から順に、

MS 明朝（採用）、MS ゴシック、HG 正楷書体-PRO、HGP 教科書体、MingLiU、Batang

飽飽飽飽飽飽

43 16 4B30 964F CBB0 E9A3BD 98FD 飽	人		人の下		勹		己	

「飽」の字では、「丶」が「日」から離れると、「丶」のみ紅色に輝き、これが正字体において「一」のように水平になると、再び肌色に戻る。その他の部分も、形状によって変化する。このような場合、MS 明朝の色を採用して、以下のように記すものとする。単独で漢字として成立し得ない要素については、「人の下」などとしてその位置を明示する。

（漢字に付された番号は、左から順に、JIS 規格における区点番号、JIS コード、シフト JIS コード、EUC コード、Unicode(UTF-8, UTF-16)を表す。）

(3) 六色以上に見える漢字の場合、最も近似の二色または三色を統合して一色とし、五色以内に収まるようにした。

(4) 健康状態に留意し、平常時と比べて著しく体調が異なる時期や日時には記録を避けた。

将棋についての共感覚

二〇〇八年五月四日　画像制作
二〇一四年十二月十三日　起筆
二〇一五年一月十九日　公開
二〇一六年九月十一日　最終更新
特設サイト「知覚・共感覚」

別添資料を見よ。

日本地図についての共感覚

二〇〇八年五月四日　画像制作
二〇一四年二月十五日　起筆
二〇一五年一月十九日　公開
二〇一六年九月十一日　最終更新
特設サイト「知覚・共感覚」

別添資料を見よ。

世界地図についての共感覚

二〇〇八年五月四日　画像制作
二〇一四年二月二十五日　起筆
二〇一五年一月十九日　公開
二〇一六年九月十一日　最終更新
特設サイト「知覚・共感覚」

別添資料を見よ。

自動車についての共感覚

二〇〇八年五月四日　画像制作
二〇一四年十月六日　起筆
二〇一五年一月十九日　公開
二〇一六年九月十一日　最終更新
特設サイト「知覚・共感覚」

別添資料を見よ。

鉄道についての共感覚

二〇〇八年五月四日　画像制作
二〇一三年八月二十日　起筆
二〇一五年一月十九日　公開

二〇一六年九月十一日　最終更新
特設サイト「知覚・共感覚」

別添資料を見よ。

元素周期表についての共感覚

二〇〇八年五月四日　画像制作
二〇一四年十一月五日　起筆
二〇一五年一月十九日　公開
二〇一七年九月二十四日　最終更新
特設サイト「知覚・共感覚」

別添資料を見よ。

対女性共感覚に基づく着物の色目の考案

二〇〇八年五月四日　画像制作、起筆
二〇〇八年五月二十五日　女性施設の閲覧室にて提供
二〇〇八年十月十五日　公開
二〇一六年九月十一日　最終更新
特設サイト「知覚・共感覚」

別添資料を見よ。

五月

二〇〇八年五月十一日　起筆、擱筆、公開

ここを忘れたわけではないのだが、先月は更新しないままで終わってしまった。色々と個人的に共感覚やその他のことに没頭していたら・・・。今後もペースは変わらないと思うが、水面下ではいつでも研究没頭中。時々は呼吸をしに水面に上がってきます。最近は潜りすぎかも。

サイト大幅更新＆ミラータッチ共感覚の図解を載せました。

二〇〇九年四月十五日　起筆、擱筆、公開

先日、サイトを大幅に更新しました。最近、かなり多くの共感覚者や共感覚に関心のある方と交流していて、自分でもきちんと共感覚サイトとして整理したいと思いました。

今日は早速、サイトにミラータッチ共感覚の図解を載せました。

http://www.ij-art-music.com/mirror.pdf

ミラータッチ共感覚というのは、共感覚のうち、第三者が対象者を触っているのを見て自分が対象者を触っているのと同じ触覚が生じたり、第三者が対象者に触られているのを見て自分が対象者に触られているのと同じ触覚が生じたりする共感覚です。海外では、すでに実験が行われて、これらの共感覚が本物であることが認められていて、嬉しい限りです。以下が代表的な論文で、ここでは「頬」への刺激を用いた実験になっています。

http://home.comcast.net/~sean.day/banissy%20&%20ward%20published.pdf

第三者を介さずに、対象者の身体部位を目視するだけで触ることができる共感覚も、同じようなものと言えますが、こちらは「ミラー」という名称では呼べないので、今後新しい名称が出てくるかもしれません。

対女性共感覚との関連ということになると、当然、女性の身体に対してもこのミラータッチ共感覚は起こるわけです。ただし、倫理的なことを考えると、実験できる身体部位も限られてくるでしょう。しかし、こうして間接的にも色々なことが分かってくると、研究者も、女性の様々な身体部位（時には外性器や胸部なども）を「目視だけで触っている」男性が本当にいるということは、もう分かっているかもしれません。

欧米の共感覚研究のことですから、今後もどんな実験が行われるかは分かりませんが、これらの共感覚の体験者の私としても、さすがにそこまでは行かないでほしいと思ってしまいます。先に不安がるのも、どうかとは思いますけれど。やはり、「ミラータッチ共感覚は、人が人に共感すること、人が人の痛みを分かることに、役立っていた時代があった」という方向で研究が進んでいってほしいです。

ここ一週間の訪問者急増の理由は・・・！？

二〇〇九年五月二十二日　起筆、擱筆、公開

以下のブログを書いた後、番組を見たという何人かの共感覚者から、番組の様子やその俳優さんについての情報など頂きました。この日曜日もあるそうなので、番組を見てみたいと思います。共感覚の話があるのかどうか・・・。（まあ確かに、何人かの方もおっしゃるように、共感覚の扱われ方に、少しばかり先行きが不安な感があるこ

とはありますが、とにかく見てみたいです。ありがとうございます。）

●と思ったら、次回は出演しないようです（たぶん）。（五月二十二日　追記）

●次回の出演は5/31（日）だそうです。（五月二十三日　追記）

……

いつもは一日当たり百五十人ほどの方がアクセスして下さっている僕のサイト。（ブログも同じくらい。サイトの性質上、多くが常連客様だと思うけれど。）

ところが、十七日（日曜日）、突如として七百人が訪問。「なんじゃこれは！！」とびっくり仰天していたが、びっくりしている暇もなく、「はじめまして。今日初めて共感覚を知りました。純一さんの共感覚をもっと教えて下さい！！」というメールが押し寄せ、対応に追われる。楽しいのだが、楽しいときほど、「とにかく、僕のサイトを色々と見て下さい。そうすれば、だいたいのことは分かりますよ。」としか言えない忙しさになる（苦笑）。

そして、昨日やっと、数人の共感覚者が教えて下さったところによると、「十七日の熱血！平成教育学院（フジテレビ）で、中野裕太さんという俳優が、自分は共感覚者だと言っていて、色々と面白かった」とのこと。ああ、なるほど、それが原因だったか・・・。その俳優は、申し訳ないながら、存じ上げないのだけれど。しかし、芸能人の一声が、名もなき一般人に波及するというのは、面白いのだけれども、大変である。

そんな僕は、十七日の夕方は、必死で前回のブログの下書きをパソコンに打ち込み、あの通り投稿し、そのあとは食事をして、また何かをやっていたので、平成教育委員会は、今回は飛ばしたのである。色々とメールを返して、本日、やっと精神的に落ち着いた（苦笑）。

僕よりも以前から活発に活動していた共感覚サイトは、今はほぼ全滅と言ってよい状態で、「共感覚サイト」と呼べるサイト自体が、たぶん僕のこのサイトしか残っていないのだが、皆さん、色々と事情はあるのだろうけれど、復活してくれたらいいと思うサイトはいくつかある。どんな事情で放置したり閉鎖したのかは分からないけれど。

そんな中、共感覚者にとって一番つらいのは、他人に自分の共感覚体験を盗用されることだと思う。以前、サイトを開設されていたある共感覚者が体験を書いた文章が、ある程度名のある小説家に盗作された状況を見たことがある。ちなみに、僕のサイトの画像は、すでに日本や海外のサイト・ブログなどで多く盗用されており、なす

術もないし、特に害も出ていないので、放っておくしかない。

それから、これは盗作とは違うのだが、「ギミー・ヘヴン」という共感覚の映画。共感覚者のあいだでは有名な映画で、女優の宮崎あおいさんらが主演したものなのだが、これも制作側が、僕よりも前からサイトを開いていた N2 さんという方とコンタクトをとったのが一つのきっかけで生まれた映画のようだ。そんな雰囲気はあるにはあったが、N2 さん自身がかつて「自分のサイトを関係者が見たことがきっかけ」というようなことを公表されていて、ああ、やはりそうなんだなあと思った覚えがある。

さて、僕のところにも色々な依頼などが来る。例えば、男性専門誌から「純一さんの対女性共感覚を紹介させて下さい」と来たり、「いつかドキュメンタリーを作らせて下さい」と来たり・・・。興味を持ってもらえること自体は大変に嬉しいものであるけれども、どうも僕という人間の本質的な特徴と言うか、人生観なり世界観にそぐわないような気がして、「いえ、まだ時期尚早なので、申し訳ないですが、お断りさせていただきます」・・・。そういう姿勢を続けていると、華やかなことはできないけれども、僕が出会いたいと思ってきた性質や人格を持った色々な共感覚者に出会えるので、やはり今はまだ、そちらに没頭している自分が好きだ。

今はとりあえず、自分がやりたいと思う優先順位を決めて、活動する、ということにしている。

私の著書が出版されました

二〇〇九年九月十四日　起筆、擱筆、公開

このたび、私の著書が PHP 新書より出版されました。ぜひ多くの方に読んでいただければ嬉しく思います。

『音に色が見える世界　「共感覚」とは何か』
岩崎純一
PHP 新書　発売日　二〇〇九年九月十五日　７５６円（本体価格７２０円）
※店頭に並ぶのは、およそ2日後です。
ISBN 978-4-569-77109-0

決して入門書という分類には入らない本になっておりますが、内容そのものに共感して下さる方が増えれば嬉しく思います。文学でも科学書でもない、教養書とでも言うべきものになっています。

（PHP の紹介より）

本書では、当事者の視点から、共感覚とはどういうものなのかを解説する。さらに、古語や和歌の考察などを通して、日本文化の原風景が共感覚的であったことを明らかにする。本来、人間の基本的な感覚であったはずの共感覚とともに、現代人は何を失ってしまったのか。

週刊朝日に書評

二〇〇九年十月二十八日　起筆、擱筆、公開

週刊朝日（十月二十七日発売、十一月六日増大号）の「新書の小径」（８６頁）に、『音に色が見える世界　～共感覚とは何か～』書評（谷本束氏）が掲載されました。よろしければ、どうぞご覧下さい。

http://publications.asahi.com/ecs/detail/?item_id=10883

週刊朝日の書評全文掲載

二〇〇九年十一月四日　起筆、擱筆、公開

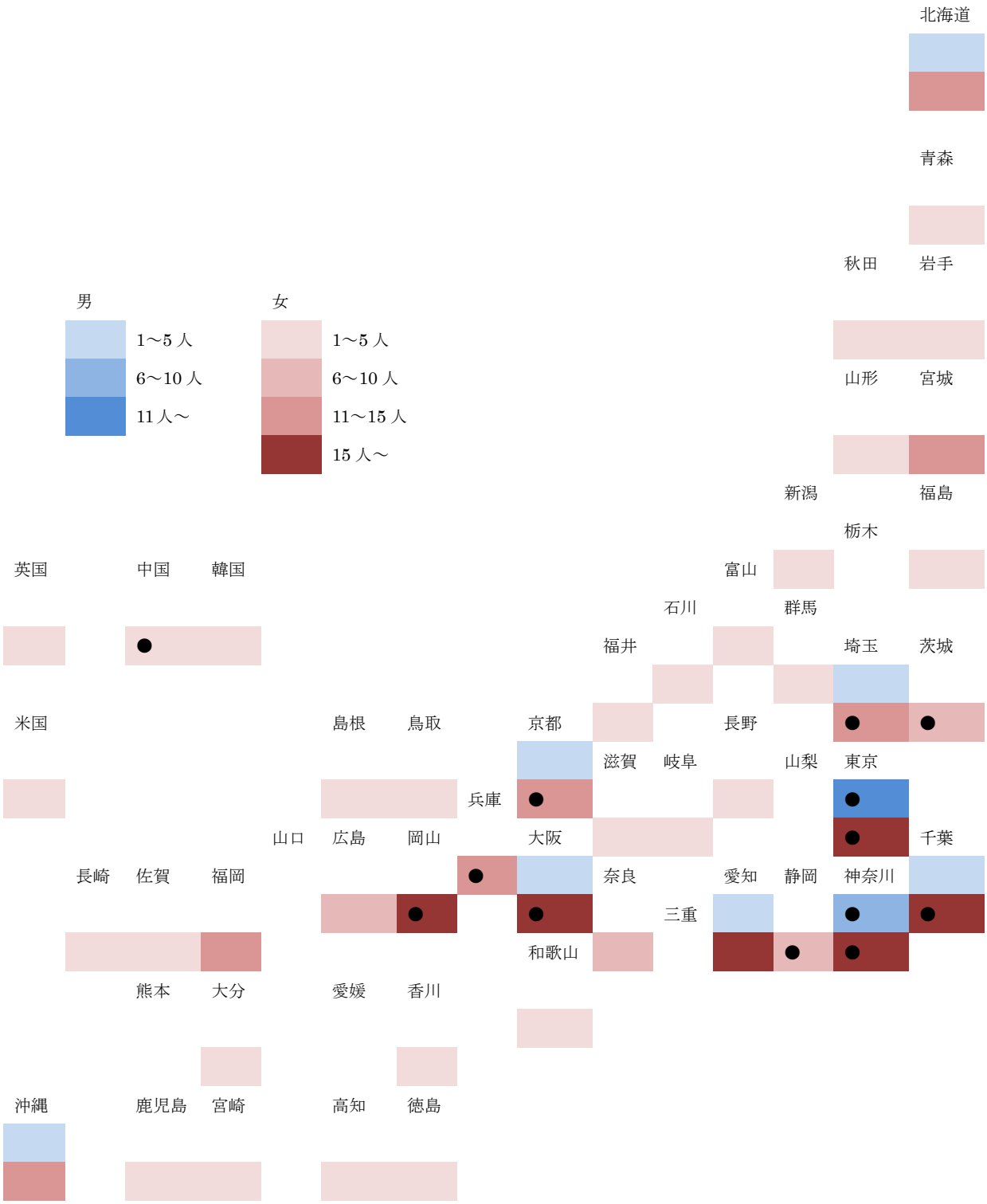
週刊朝日での拙著の書評ですが、以下のページに全文が載っています。

http://book.asahi.com/shinsho/TKY200911020179.html

共感覚日本地図

二〇〇九年十一月二十一日　起筆
二〇〇九年十一月二十三日　擱筆、公開

これまでに出会った（やり取りした）共感覚者の分布
都道府県名の直下が男■、その下が女■
（●は、実際にお会いした共感覚者が一人以上いる都道府県・国）


男
1～5 人
6～10 人
11 人～
女
1～5 人
6～10 人
11～15 人
15 人～
北海道
青森
秋田
岩手
山形
宮城
新潟
福島
栃木
富山
石川
群馬
福井
埼玉
茨城
長野
京都
滋賀
岐阜
山梨
東京
兵庫
大阪
千葉
奈良
愛知
静岡
神奈川
三重
和歌山
島根
鳥取
広島
岡山
愛媛
香川
高知
徳島
山口
長崎
佐賀
福岡
熊本
大分
鹿児島
宮崎
沖縄
英国
中国
韓国
米国

アナログに生きる

二〇一〇年三月八日　起筆、擱筆、公開

二〇〇四年のスマトラ島沖地震で地球の自転が速くなり、一日が１００万分の６・８秒短縮したらしいが、このたびのチリ大地震でも１００万分の１・２６秒短縮したらしい。私も小学生の頃、帰り道を全速力で走ったり、跳びはねたりして、「今、地球の自転が僕のせいで変わった」などと主張していたのを思い出した。極端な話ではあるけれども、つまりこれは、大人になりきれない子どもの頃の動物的直観が極めて正しいことがあるという一例なのだった。「この世で最も詳細なこと、最も正しいことは、数値で観測・検出できない。」

私は F1 が好きなのだが、今年から参戦する新チームに「ヴァージン・レーシング」があり、このチームのマシン「VR-01」は、風洞実験無しで、全て最新の「数値流体力学（計算流体力学、Computational Fluid Dynamics）」によるシミュレーションのみで設計されている。

ところがこのマシン、F1 マニアには極めて滑稽で懐疑的な目で見られている。私もマシンの外観を見たとたん、最新の物理学で作られたマシンの外観がこれなのかと驚いた。そして、ファンの目が正しいことを証明するかのように、蓋を開けて見ると、今行われているテスト走行でも最後尾争い。遅いだけでなく、突然フロントウイングが脱落するという危険極まりない珍事を演出している。

コスト削減のための「デジタル設計」のはずが、逆の結果を生むというよい例だろうか。何でもデジタル仕掛けにすれば事足りる、という現代 F1 の愚かさの一例と非難するのはまだ先送りにして、とりあえず興味深いので、この新チームに注目したい。この「数値流体力学」、ルマンなどでも用いられたことがある。

私の好きなフェラーリも、ピットアウトの信号を手作業からデジタル信号に変えたとたん、事故発生。そのため手作業に戻したということがあった。最近の F1 のそういうところは、昔ながらのファンにしてみれば、好きになれないところなのだった。

「デジタル設計上で一番速いマシン」と「本当に速いマシン」とは違う。「速いマシン」のところを「賢い人間」に変えても、成り立つような気がしてならない。

私はここ十年ほど、旅・旅行というものをほとんど一人でしかしたことがないのだが、人間の心のデジタル化だなあと思った印象的な出来事は、京都にて、私の好きな龍安寺の石庭に行ったときのことだった。老若男女が端から端まで身を乗り出して、イヤホンをしつ

つガヤガヤとしゃべりながら我先にと石庭を見ている光景を、日本人の精神性のデジタル化の象徴だと言うのは、決して暴論ではないと思う。

非常に興ざめな気がして、落ち着いて和歌を詠むことができなかったので、早々と別のところに移動してしまった。それにしても、こういう人たちは、石庭の何を見ているのだろう。あるいは、何のために旅行をしているのだろう。それなりに理由はあるのかもしれない。

そのあとは、苔で有名な西芳寺に行った。近隣住民の訴えや観光の諸事情で予約制になったのだが、よくよく聞いてみると、観光客が増えたとか、不況だとかいう表向きの問題とは異なる理由が根底にある気がした。つまりは、あの龍安寺で見た、イヤホンを付けてドタバタと歩き、陣取りながら石庭を見ている日本人たち、ああいう人々がこの苔寺を壊したのだろうなという思いがした。このあたりに、私が一人旅を好む理由がある気がした。

サイトに新しいコーナーを設けました。

二〇一〇年十月十五日　起筆、擱筆、公開

（二〇一八年七月十四日追記：現在、岩崎の旧サイトの内容は『全集』に収録。）

サイトに新しいコーナーを設けました。これまでに交流を持ってきた共感覚や精神疾患の方々について書いています。

http://iwasakijunichi.net/seishin/

ずっとノートに付けてはいますが、いざこうしてみると、色んなことが判明します。例えば、共感覚者が精神科・心療内科・神経内科などに行って、「文字や音に色が見える」と訴えた際に、医師やカウンセラーも共感覚を知らなかった場合、どういう対応をしているか、その傾向がわかります。それもあって、載せてみたのです。

「どの文字や音が何色だ」という訴えが、幻視・幻聴と受け取られた場合は「統合失調症」、「玄関のカギは何度も確認しないと気が済まない」などと同じく「この文字はこの色でなければ気が済まない」という強迫観念と受け取られた場合は「強迫性障害」と診断されていることがわかります。

拙著『音に色が見える世界　「共感覚」とは何か』について

二〇一一年四月三十日　起筆、擱筆、公開

私のこの初著は、（読者の方々からの報告も合わせて）確認できる限り、日本で初めて共感覚者本人が自らの共感覚を告白した本のようである。それと同時に、私は共感覚を日本文化論と結びつけて書いてみたのだった。今後、日本で自分の共感覚を自分で論じる人が出てくるかもしれない。だから、私の経験を書いておきたい。

この拙著は、和歌研究者・日本文学者・日本史学者・言語学者・小中高等学校教諭などからは比較的好意的に受け止められ、授業のテキストとしても用いられている一方、現在の自然科学系方面の共感覚研究者においては、懇意な知人関係にある大学などの先生方に取り上げられることはあるが、それを除けば、あまり取り上げられておらず、「非科学的である」という評価を頂くことも多い。

前者の分野を専門とされている方々の中には、すでに「古典分析の結果、日本人は古来共感覚者であったと言える」という私と同等の主張をしている方々もいらっしゃる。実際に、日本で初めて「共感覚」という語を用いたのは、心理学・神経科学分野ではなく、日本文学、とりわけ和歌の分野なのであった。（特に二冊目の拙著内でその事実を紹介している。）

前者の方々にとっては、このたび、共感覚者である私が本を書き、同じ主張を展開したことによって、かえってそのような先人の説が強化される結果となったと受け止められたのかもしれない。大学での私の講義も、ほとんどが文系学生に対するものである。

一方で、私の共感覚の実在を科学的に証明するには、すでに欧米の共感覚研究で用いられているような高価な実験機器や施設を用意する必要があるし、これについてはさすがに私個人の力では用意できないものであるので、どこかの大きな研究機関で実験が行われるようなことがあれば、参加したいと思っている。

現在、東京大学などの先生方や医師・研究者などに、自分自身の共感覚を科学的に証明するために、実験・検査を受け、血液・遺伝子データ・脳データ等を提供する心の準備は少なからずある旨をお伝えして回っているところである。

さて、私が挑戦したかったことは、一部の学識者向けの論文を書くことでもなく、大衆全体に受けの良い「共感覚獲得のための自己啓発ノウハウ本」を書くことでもなく、学識的な共感覚論をごく一般の読者に投げかけることだった。「共感覚とは、音に色が見えることです」という解説書は、私が書いても悪くはないけれども、それよりは、共感覚専門家のうちテレビへの露出なども多い学者が書いたほうがよいと感じていた。

ただし、それに該当する入門解説書は日本にはなかったから、私は「共感覚」の生理学的入門的解説のために多くのページを当てることにした。しかし、自らの共感覚論もなるべく多く残したつもりであるし、むしろ、それを主にした本だと言える。

それから、このことがどの程度重要なことかは分からないのだが、興味深いことがあった。何度か書き直して、様々な出版社の方々に読んでいただいているうちに、ようやく五社目のＰＨＰ新書にて出版が叶ったわけであるが、ＰＨＰだけが違った点は、私の原稿をお読み下さったのが女性であったという点である。ちなみに、二冊目

『私には女性の排卵が見える』の編集者も女性であった。

共感覚者が女性に偏って多いことを考えれば、こと共感覚については女性のほうが理解が早いとは言えるのかもしれない。あるいは、理解が深いという言い方でも、とりあえず差し支えはないかと思う。

これについては、結局は確率論であるとは言っても、ある程度は深刻に考えたほうがよい点だと私は思っている。私に限らず、多くの共感覚者が同じことを訴えていて、男性の精神科医や大学教員、知人、何よりパートナー、夫から共感覚を精神疾患と誤解されて暴言・暴力に遭ったり、よりいっそう苦悩が高まって本当に精神疾患にかかってしまった女性が、私のサイトを多く訪れている。

自分の共感覚を誰かに伝えようと試みる時、まず入口のところで男性に当たると、どうしても「共感覚が本当にあるのか」という議論で止まってしまうケースは、そこかしこで耳にしてきたが、ただし、拙著の男性編集者の方々は、共感覚にかなり理解が深く、非常にありがたい思いがしたということも、ここで付記しておきたい。

さて、この書籍にはいくつか私自身のミスがあることをお詫び申し上げたい。例えば、86頁「自我は言語よりも早くからあった」という表現があるが、この「自我」の意味は極めて俗的な意味を帯びていて、哲学的用語としてはミスである。最初の原稿では何の問題もなく響いていた気がするが、この本だけを読むと、「自我」は「記憶」とでも直されるべき部分である。これは、編集作業のミスではなく、私のミスである。

また、私はこの本を出すよりもずっと以前から、サイトで共感覚を告白してきたが、その中での経験が頭にあり、私はこの本を出したあとの新聞やテレビ局の反応を恐れていたことは否めない。すなわち、いわゆる教育ママやスパルタ方式の学習塾からの共感覚教育の依頼や、超常現象・スピリチュアル・新宗教ビジネスの方面からの協力依頼などが来ないように、入口のところからしてガードを固めた文体にしなければ、のちのち痛い目に遭うかもしれない、世の共感覚を持った子供たちにも迷惑がかかるかもしれない、といった過剰な不安があった。そのため、文体がかなり厳しくなりすぎたきらいがあると思う。

日本の自然科学系の共感覚研究者の視点については、私は少なからぬ不満を感じるものの、そこまで悪いとは思わない。けれども、全体として、研究者に対して私が感じる心配事が一つあるとするならば、「日本の共感覚研究者は世の親たちを甘く見過ぎている」ということだと思う。

私には、絶対音感教室や書道教室をやっている知人が何人かいらっしゃるが、これらの方々は、元気にはしゃぎ回る子供たちへの対応ではなく、その子供たちを連れて来る親たちへの対応のほうに大変疲れているようだ。

子供たちに習い事や学習塾通いを強制している親は多い。時には、どうすれば子供に共感覚を植え付けさせることができるかという相談が、私の元にも来る。本著が出版された後でも、その状況は特に変わっていない。

このような親たちに対する先の知人たちと私の意見は同じである。

共感覚の生理学的側面が明らかになったとして、どういう未来が予想されるだろうか。

多くの親が言うかもしれない。「ウチの息子、まだ受精卵なんですが、今からこの子に共感覚を身につけさせる方法を教えて下さい、先生」と。つまり、かつて日本で尋常ならぬ絶対音感ブームが起こったときと同じことが起こる可能性は捨てきれない。

遺伝子を操作して共感覚やサヴァン的能力を有する天才児をデザインする「人間製造キット」のような、アメリカではすでに登場している発想が日本で登場するのは、まだ先だろうが、しかし、いわゆる「試験管ベビー」の増加の動向を見る限り、確実にそのような時代が来ることは間違いないと思う。

共感覚、特に自分自身の共感覚について自著を持つ（持とうとする）人間は、このような話題に対して態度が曖昧であってはならないと思うし、何かしら自著に書いていなければならないとさえ思える。

「子供の感性や能力は、親の所有物ではない」

この考え方が、私自身の人生の重要な基盤の一つであるがために、単に「共感覚」と言っても、どうしてもそれを紹介するだけでは済まないという思いが出てしまう。

さて、この本の帯には、脳科学者でテレビでもおなじみの茂木健一郎氏が紹介文を書いて下さった。「共感覚は、岩崎純一さんの独創の始まりに過ぎなかった」という氏のコメントは、この本の出版後に受けることになったテレビ局からの超常現象・スピリチュアルブーム関連番組への出演・協力依頼や、霊能業界関係からの拙著の利用に対して毅然とした姿勢を貫く上で、一つの支えになった。

それを踏まえた上で、あえて一つだけ書いておこうと思う。

今や、どう客観的に見ても、その茂木氏がせっかくご活動の最たる場としていらっしゃるテレビ業界自体が、先ほどのような世の多くの親たちと共に、脳ブーム・スピリチュアルブームを率先して形成している主体の一つであることは否めない。

テレビ番組が実質的に大衆扇動効果を生み、脳ブーム・スピリチュアルブーム関連本の売り上げを伸ばし、出版社に利益をもらたしている現状は否めないと言える。

拙著とて、そのような世相に組み込まれかねないとも言えるし、実際に組み込まれつつある現状は見えるわけで、それを私は非常に心配している。つい最近も、再び右脳ブーム、血液型占いブーム、パワースポットブームなどが巻き起こっており、その中で、私が意図しない形で拙著が使われるようなことがないか、本当に不安である。しかし、本を出した以上は、じっくりと動向を見守っていきたいとも思う。

これから先、自身の日常的なメディア露出を避けて学術行為に専念するタイプの他の脳科学者らによる、茂木氏やテレビ業界関係者への様々な評価をも全く同時に勉強していくことが、共感覚当事者のあるべき姿であると、改めて深い思いを致すところである。

共感覚などをめぐる私の動向（模式図）

二〇一一年五月二十八日　起筆、擱筆、公開

共感覚などについての私の現状の動向を発表いたしますので、関係する皆様はご参照下さい。ほぼ関東圏、全て国内の活動なのですが、分かりやすく描こうとしたところ、いかにも人脈が広いかのような自分中心の僭越な図になってしまいました。実際は、もう少し小ぢんまりしています。頭の中を整理するために描きました。

この図を見ながら今回の新著を読んでいただけると、より分かりやすいかもしれません。余計に分かりにくくなったら申し訳ないです。

トークライブに出演します。

二〇一一年六月三十日　起筆、擱筆、公開

トークライブと言っても、お笑いライブではなく、これまで大学の先生、学者などが参加なさったこともある、対談ライブのようなもので、聴衆の皆様に共感覚を説明させていただこうかなと思っています。

「ザ・ギース尾関のいろいろ教えてもらえませんか４」
今回共感覚者でもあり共感覚の研究第一人者岩崎純一さんが！
数字が色で見える世界とは。我々の知らない世界を教えて頂きます！

【日時】2011/7/16（土）open12:30/start13:00
【出演】尾関高文(THE GEESE)
http://www.loft-prj.co.jp/naked/

ミラータッチ共感覚図解

二〇一一年十月二十三日　画像制作、起筆
二〇一二年一月二十二日　公開
二〇一六年九月十二日　最終更新
特設サイト「知覚・共感覚」

別添資料を見よ。

私の共感覚などの変遷

二〇一一年四月三日　起筆

二〇一一年四月二十五日　公開
二〇一七年八月十四日　最終更新

二〇一二年（三十歳）
◆引き続き皆様と交流。個人勉強会・交流会もひらく。

二〇一三年（三十一歳）
◆日本の共感覚研究者・共感覚者界隈で覚せい剤・麻薬・危険ドラッグ使用者の存在を個人的に初めて確認。「日本共感覚関連動向調査会」を発足させる。
◆共感覚、閃輝暗点、発達障害、鬱、不安障害、強迫性障害、PTSD、解離性障害、統合失調症、ひきこもり、ニートなど、およそ現代日本人に起こり得る知覚様態・精神様態への興味は尽きず、様々な方々との温かい交流が続いている。
　その一方で、一部の大学教員・学生や一般参加者の質の低さに悩まされる日々も続く。

二〇一五年（三十三歳）
◆「日本共感覚研究会」を発足させる。共感覚研究そのものではなく、共感覚研究者・共感覚者の倫理や覚せい剤・麻薬・危険ドラッグ使用の実態の追究団体に明確に移行。

サイト更新情報【仮想御殿の名前、岩崎式日本語研究会、超音波知覚者コミュニティ】

二〇一二年六月十五日　起筆、擱筆、公開
（二〇一八年七月十四日追記：現在、岩崎の旧サイトの内容は『全集』に収録。）

■いくつかご報告です。

◆仮想御殿の名前が決定

以下の仮想御殿の名前が「武蔵幻想邸」に決まりました。その自閉症の子によると、この御殿は「東京のどこかにある幻想上の御殿」で、そこから私が、東京スカイツリーの高さ 634m の由来でもある旧国名「武蔵国」を連想して名付けました。

「仮想」御殿の名前と入居者募集中、自閉症観
http://iwasakijunichi.net/iwasaki-j-blog/55955587.html

サイトの御殿のページ
http://iwasakijunichi.net/goten/
寝殿造や長屋建築の特徴を持つ仮想御殿。共同体社会（ゲマインシ

ャフト）の構築の参考とする。自閉症児らの図案に基づく。

◆岩崎式日本語研究会の臨時休止・改編

※　2012/7/26

岩崎式日本語研究会は再開しました。

↓

※　2012/6/15

数年うちに精神疾患分類の世界的な改訂（世界保健機関のICD-11とアメリカ精神医学会のDSM-5の発表）があるため、それぞれICD-10とDSM-IV-TRに基盤を置く岩崎式日本語研究会は一度休止します。

ただ、現在の使用者の方々には再登録などのご面倒はおかけしないように致します。

今度の改訂では、近い将来におけるICDとDSMの統合の方向性が明らかになったと言えますし、「神経症」概念の完全放棄、自閉症スペクトラム概念の積極採用、東洋医学分類の創設など、色々と一長一短ありそうです。

私個人としては、見ていて「色々と裏がありそうだな」という印象を受けますし、かなり悔しい改訂になりそうな部分も多々あります。

この岩崎式日本語は、本当に満足のいく完成度になる時期がいつなのか、自分でもさっぱり分かりませんし、いつになってもかまわないと思っておりますが、言語学的な説明よりも、もっと数学的な説明の仕方をしていく必要があるように感じています。もちろん、この言語の使用者に対してではなくて、精神医学界などに対して、という意味です。

「なぜ言語理解や数学理解に遅れのある発達障害者たちにもその人たちなりの“言葉”がある、と私が考えているか」を数学的に証明するのは難しいわけです。しかし、それができたら、本当にすばらしいと思っています。

◆超音波知覚者コミュニティの拡充

以下の都内超音波スポット報告マップも順調に充実してきています。マップの共同編集者は、私の裁断であと少し増やす予定ですが、スポットの報告だけなら私のメールでどなたからも受け付けております。

念のため書いておきますが、かなり大音圧の超音波を発生する装置（ネズミ駆除器など）を設置している店舗やビルの場合、その前が車の行き交う幅の広い大通りであったとしても、私のように感覚

が敏感な人には、その大通りの対岸まで聴こえている（共感覚で見えている）ことがあり、頭痛や吐き気などにより本当にその付近及び道路を通行・横断することができません。

私も、わざわざその通りを避けて行動するなど、色々と工夫して生活しています。何のことかよく分からない人にとっては、本当によく分からない感覚だとは思いますが、少なくとも共同編集者にはそのような敏感な方を選ばせていただいております、ということでして、ご了承下さい。

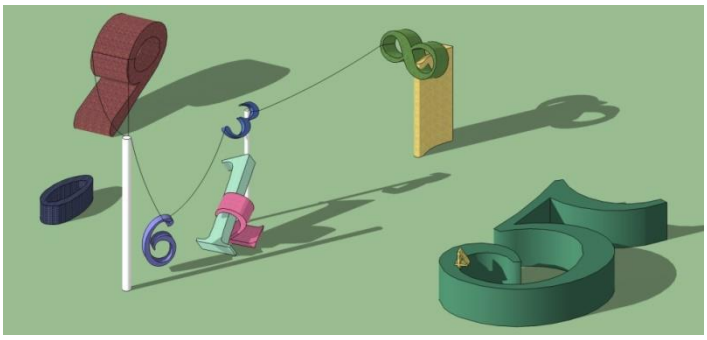
超音波スポット報告マップ
http://iwasakijunichi.net/choonpa/spot.html

共感覚立体画像（1）「数字についての共感覚」

二〇一二年九月二日　画像制作
二〇一二年九月十四日　起筆、擱筆、公開
二〇一三年二月五日　最終更新

数字についての最近の自分の共感覚。相変わらず色彩については、濃淡や模様のみの変化で、色相はほとんど変化しないのだが、数字の配置はなぜか変化する。

「3」のように、ある日突然、棒をつたって上空に上がる数字もある。「降りてきなさい、3！」と頭の中で叱るなどして遊ぶのが自分なりの遊び方。

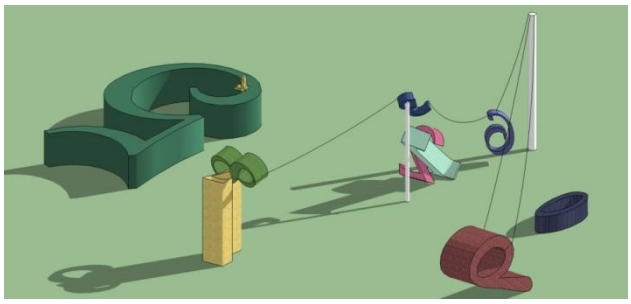


今は、「4」が「5」をベンチ代わりにして座っている。「6」は浮いているし、「9」もいまいち安定が悪いので、ワイヤーで引っ張っている。

「3」が「6」を時々揺らして遊ぶ。

「8」は、数か月間上空で遊んだあと、降ってきたときに「7」におかしなはまり方をしたので、他の数字から笑われた。特に、すばらしいフォーメーションでダンスしている「1」と「2」に笑われた。

「0」はどう見ても露天風呂に見える。



伝統和歌＋ＣＧ画像（1）

二〇一二年九月四日　画像制作

二〇一二年九月十七日　起筆、擱筆、公開

新しい芸術の形を模索中。

1、歌題を決める。
2、歌題に合ったＣＧを描く。
3、ＣＧに合った和歌を詠む。

晩夏

ゆく夏よ光さかりは昔にて水面寂しく照る夕日かな（純星）
（ゆくなつよ　ひかりさかりは　むかしにて　みなもさびしく　てるゆふひかな）

※　現代語訳については、サイトの和歌の「夏の部」のページをご覧下さい。

伝統和歌＋ＣＧ画像（２）

二〇一二年九月七日　画像制作
二〇一二年九月十八日　起筆、擱筆、公開

今度は前回と違い、和歌を詠んでからＣＧ画像を描いてみたが、結局私は、和歌と絵画が同時に「ファ～ン」と頭に浮かぶ感覚があるので、五感どうしの前後関係・手続きを考えるのはあまり意味がないようである。

１、歌題を決める。
２、歌題に合った和歌を詠む。
３、和歌に合ったＣＧを描く。

枯野

かへり見る夢も紛へぬ草の原弥生の色は空のみにして（純星）
（かへりみる　ゆめもまがへぬ　くさのはら　やよひのいろは　そらのみにして）

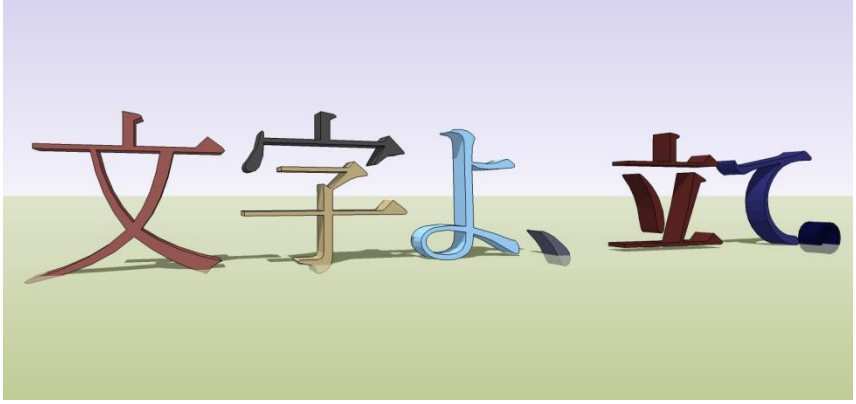
※　現代語訳については、サイトの和歌の「冬の部」のページをご覧下さい。

共感覚立体画像（2）「文字よ、立て。」

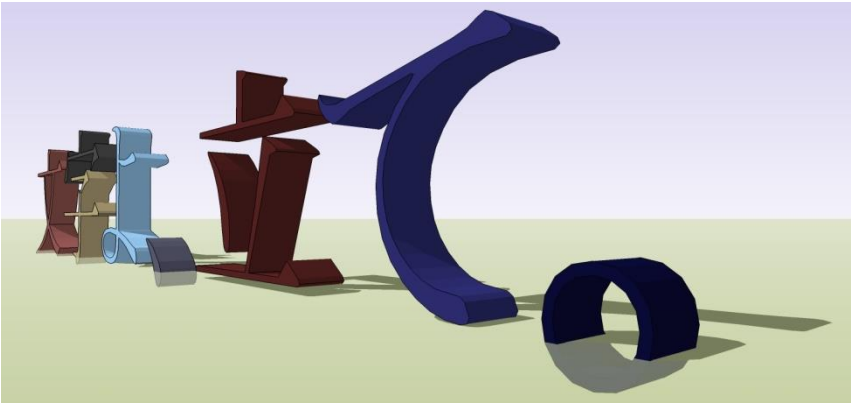
二〇一二年九月十二日　画像制作
二〇一二年九月二十二日　起筆、擱筆、公開
二〇一三年二月五日　最終更新

「文字よ、立て。」という文は、私には立って見えるので、描いてみた。全長三十メートル、高さ三〜五メートルくらい。
（文字の色については、サイトの共感覚のページをご参照下さい。）

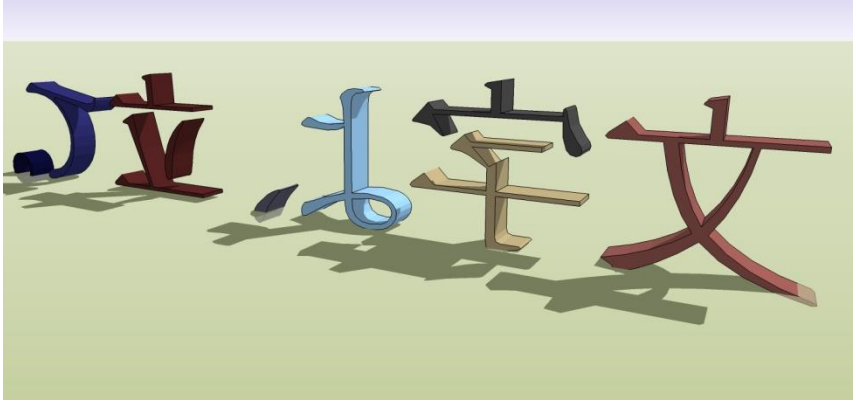
「文字よ、座れ。」という文も立って見えるので、「文字よ、」の部分があると、そのそばの言葉も立って見えるのかもしれない。



それに、今日の東京は小雨が降ったという点が鍵である。どうも最近、雨が降ると文字が立つのである。（共感覚者にしか通じない日本語で申し訳ありません。）



実際に五メートルもの木材や粘土を使って作るわけにはいかないということで、先日の数字の例以降、画像ソフトで色々と表現している。



伝統和歌＋ＣＧ画像（３）

二〇一二年九月二十三日　画像制作

二〇一二年九月二十七日　起筆、擱筆、公開

下のＣＧ画像は、その上の私の和歌について私自身が共感覚で見ている風景です。今回は、風景が幻想的になっている和歌を載せました。三作目です。今回は、(1)と(2)で試したような制作過程の前後関係は考えないことにしました。

「花思ふ涙うつろふ大虚に忘れ形見の彦星の影」
（はなおもふ　なみだうつろふ　おほぞらに　わすれがたみの　ひこぼしのかげ）

※　現代語訳については、サイトの和歌の「雑の部」のページをご覧下さい。

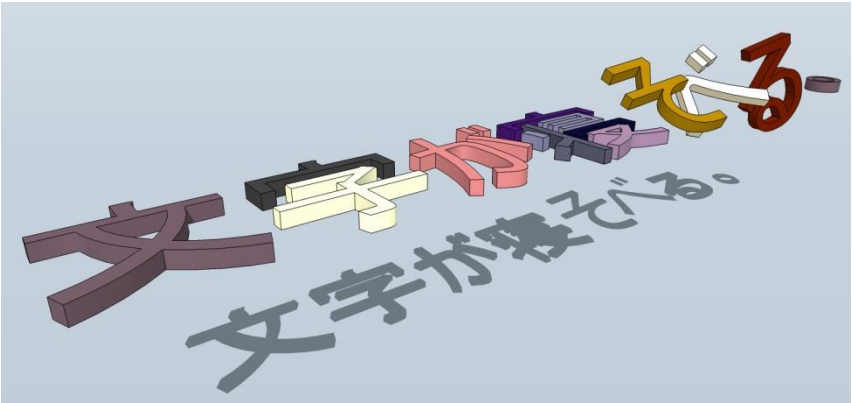
共感覚立体画像（3）「文字が寝そべる。」

二〇一二年九月二十三日　画像制作
二〇一二年十月五日　起筆、擱筆、公開
二〇一三年二月五日　最終更新

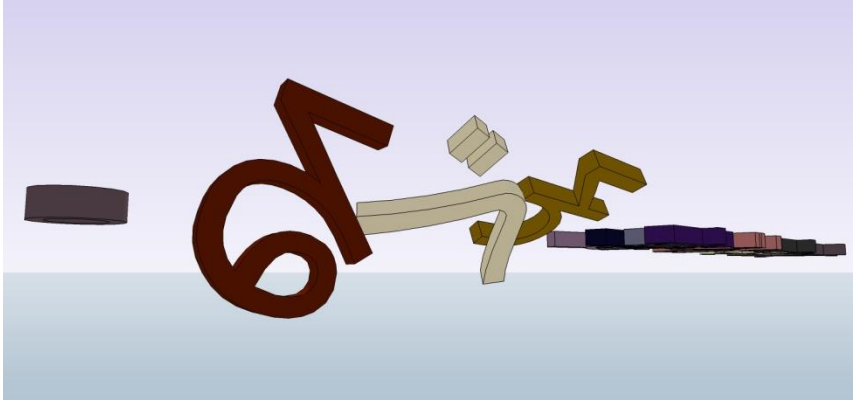
「文字が寝そべる。」という文を私が共感覚で見ている様子が、以下の画像です。

この文は全く寝そべっておらず、全体が浮かび、かつ「そべる」の部分があちこちに向いているのを発見して、面白かったので、描きました。

私には、全ての日本語の文章がこのように様々な色彩・形状・時空間配置を伴って見えているので、文章を突然に提示されてもすぐに描くことができますが、しかし、その中でも面白いものを優先的に取り上げようと思います。



やはりこのように、語意・文意と共感覚立体像の実際の姿が逆になっているものは面白いと思います。



「武蔵幻想邸」のページを更新

二〇一二年十一月十五日　起筆、擱筆、公開

（二〇一八年七月十四日追記：現在、岩崎の旧サイトの内容は『全集』に収録。）

「武蔵幻想邸」のページ（以下のリンク）を更新しました。
詳細図・区画図・原図・建築データ・設置機関・居住者一覧などを掲載しました。また、部屋や門に名称が付けられました。
邸そのものは架空の存在で、住所も「東京都花武蔵区」という架空の設定になっていますが、中で行われている芸術は本物で、私のネット和歌集編纂、言語考案、作曲なども、この邸で行われていることになっています。
いわば、フェルディナン・シュヴァルの石造の理想宮やヘンリー・ダーガーの物語のような総合芸術の「ネット版」、といったものを意図しています。
このゲマインシャフト的でアウトサイダー・アート的な考え方が、私が夢見ている将来の芸術家共同体の基盤にでもなれば、面白いと思っています。

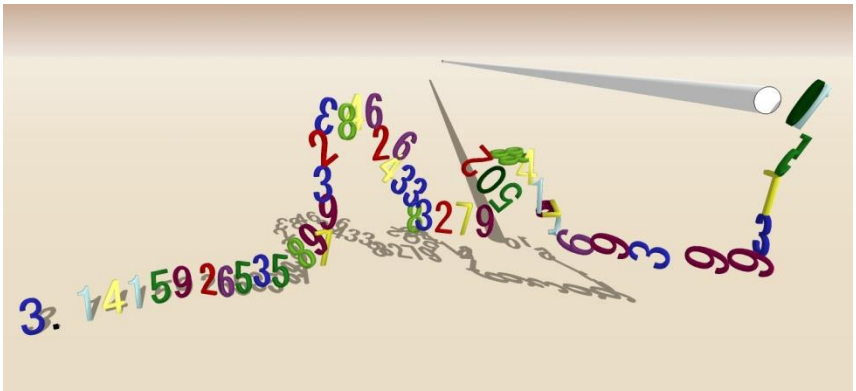
http://iwasakijunichi.net/goten/

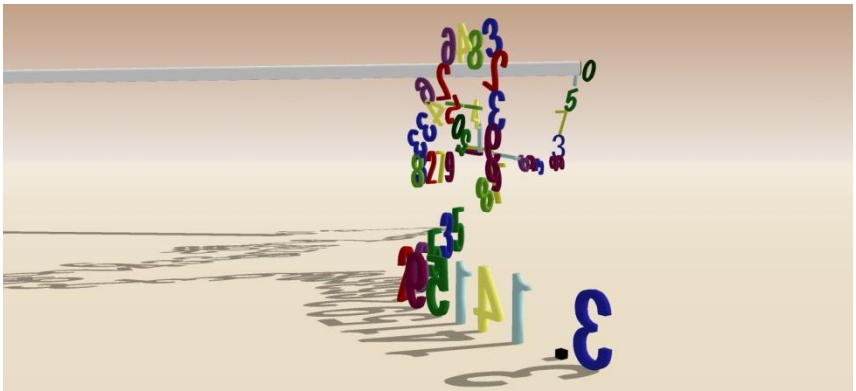
共感覚立体画像（4）「円周率についての共感覚」

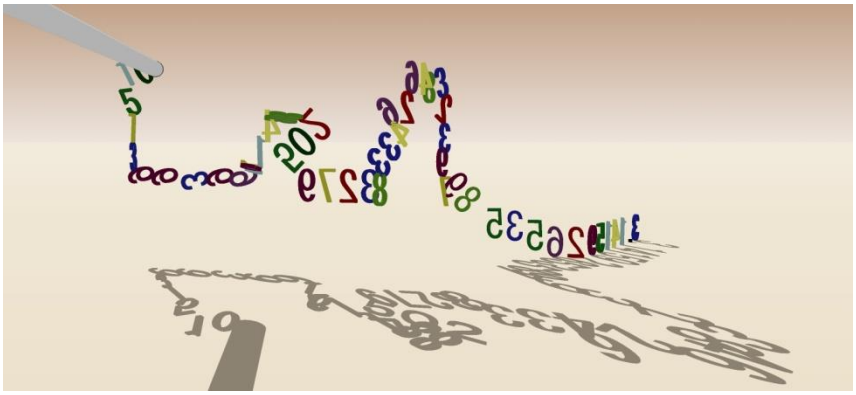
二〇一二年十一月四日　画像制作

二〇一二年十一月二十九日　起筆、擱筆、公開
二〇一三年二月五日　最終更新

私が共感覚で見ている円周率の姿。
私は、サヴァンの人のように円周率を何万桁も記憶しているわけではないが、数字の羅列について、初見のものか既知のものかにかかわらず一定の色彩と配置が見えている場合が多く、円周率の場合はこのようになっている。ただし、その日の天候などによって数字の配置が変化する。
最後の数字の「0」以降は、自分でもよく分からないが、おおまかに見て白い棒の方向に数字が続いているようである。







共感覚立体画像（5）「音階についての共感覚」

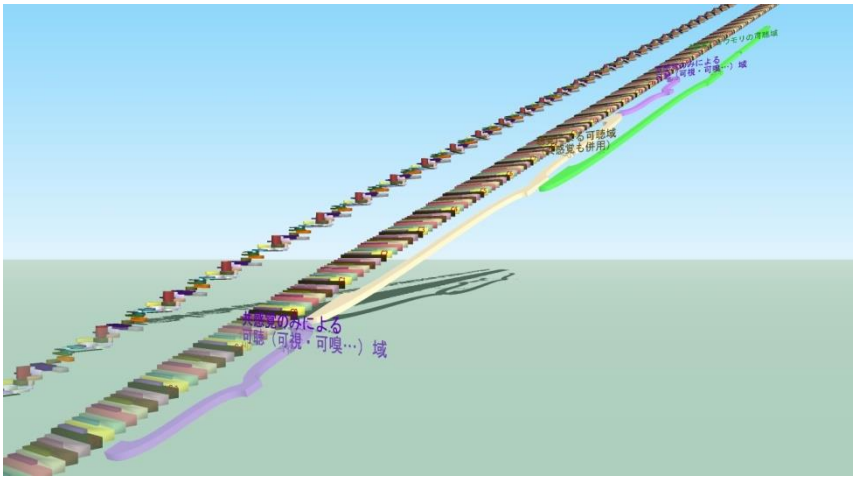
二〇一二年十二月十七日　画像制作

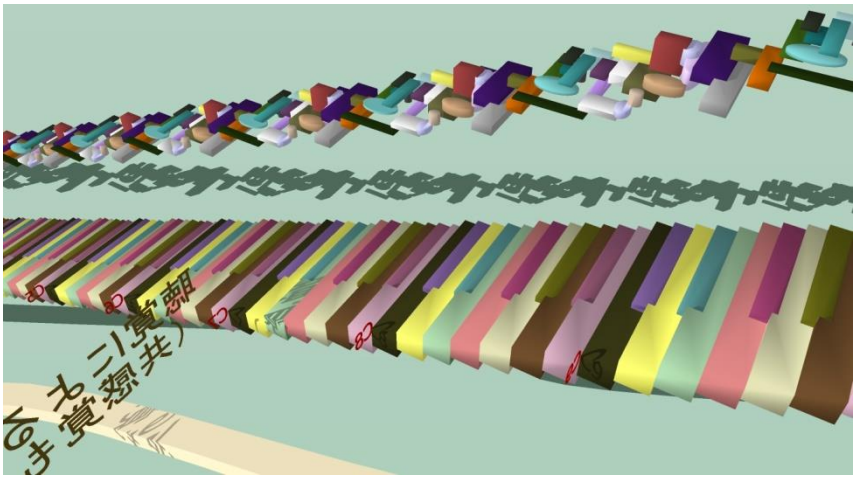
二〇一三年一月二十五日　起筆、擱筆、最終更新
二〇一三年二月五日　最終更新
（二〇一八年七月十四日追記：現在、岩崎の旧サイトの内容は『全集』に収録。）

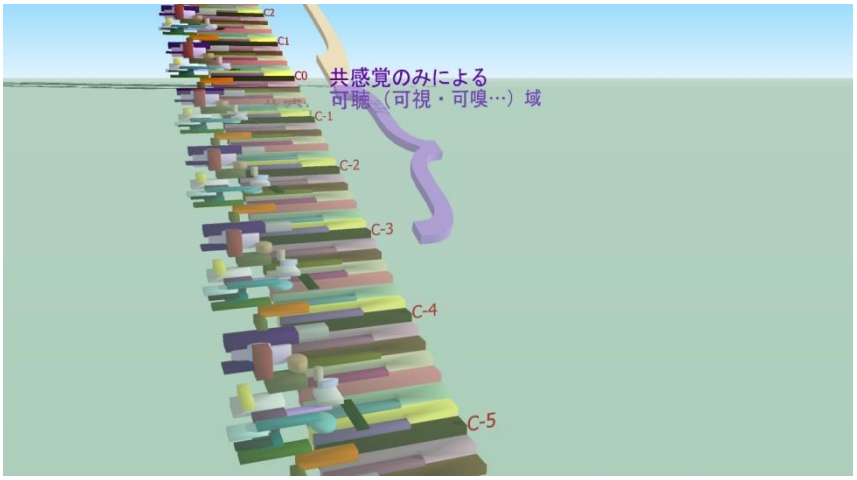
二〇一三年最新版の私の「音階共感覚」です。以下の「知覚・共感覚」の各ページにも掲載しています。

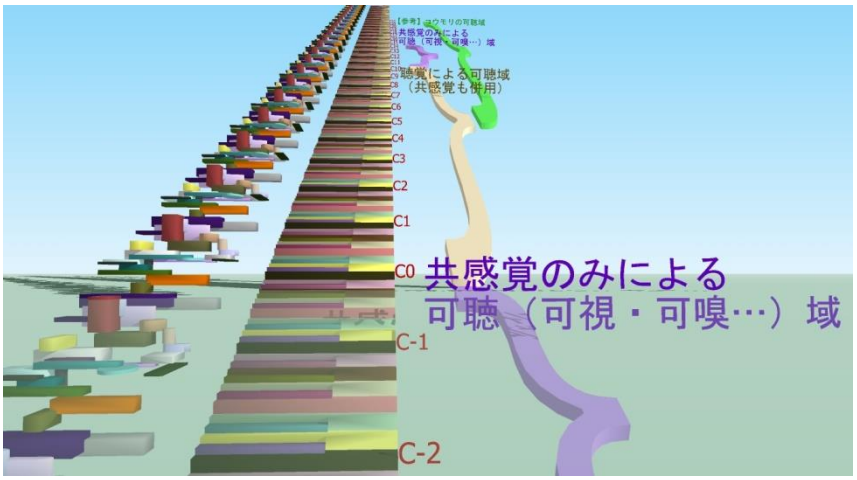
●「知覚・共感覚」
http://iwasakijunichi.net/synaesthesia/

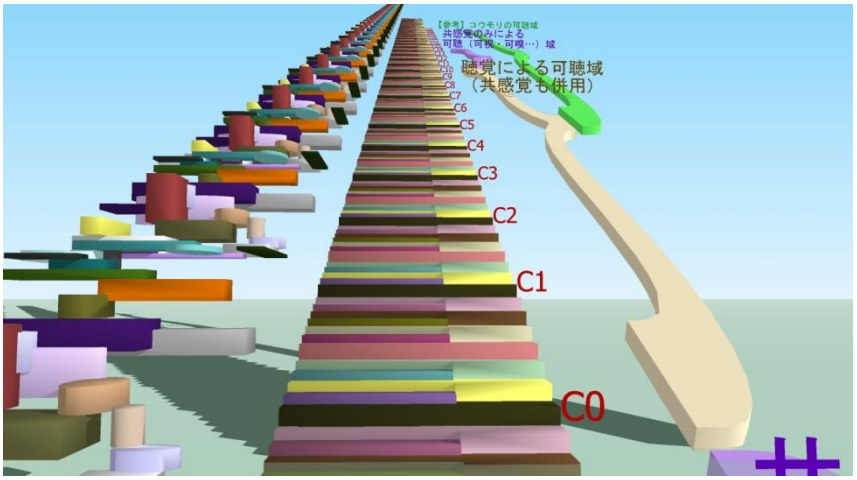
「基本的な共感覚」の二〇〇五年・二〇〇八年時点の画像と比較してみていただけると、面白いかと思います。また、この立体画像は、「応用的な共感覚」の「音域表と聴覚・共感覚（PDF）」にも対応しています。

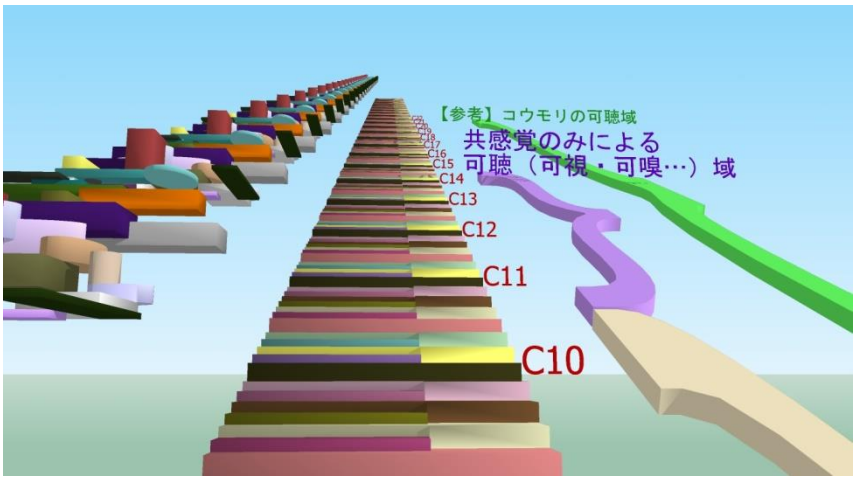

共感覚のみによる
可聴（可視・可嗅…）域

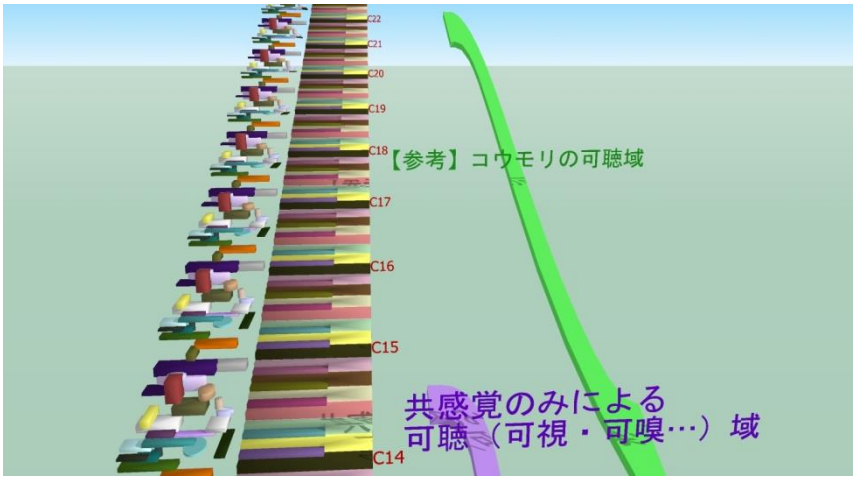


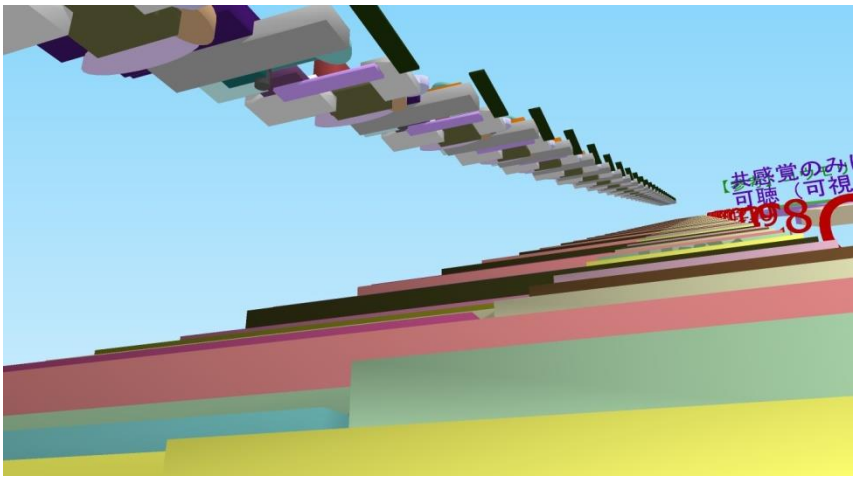

C2
C1
C0
共感覚のみによる
可聴（可視・可嗅…）域
C-1
C-2
C-3
C-4
C-5

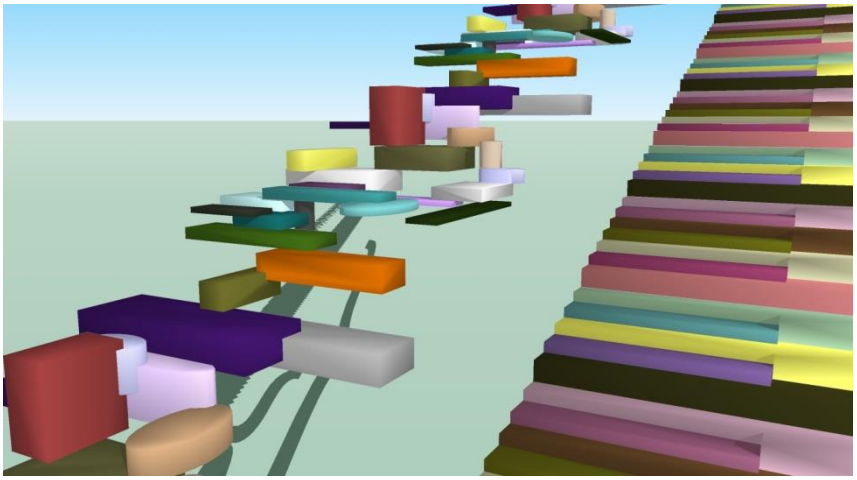

【参考】コウモリの可聴域
共感覚のみによる
可聴（可視・可嗅…）域
聴覚による可聴域
（共感覚も併用）
C7
C6
C5
C4
C3
C2
C1
C0
共感覚のみによる
可聴（可視・可嗅…）域
C-1
C-2

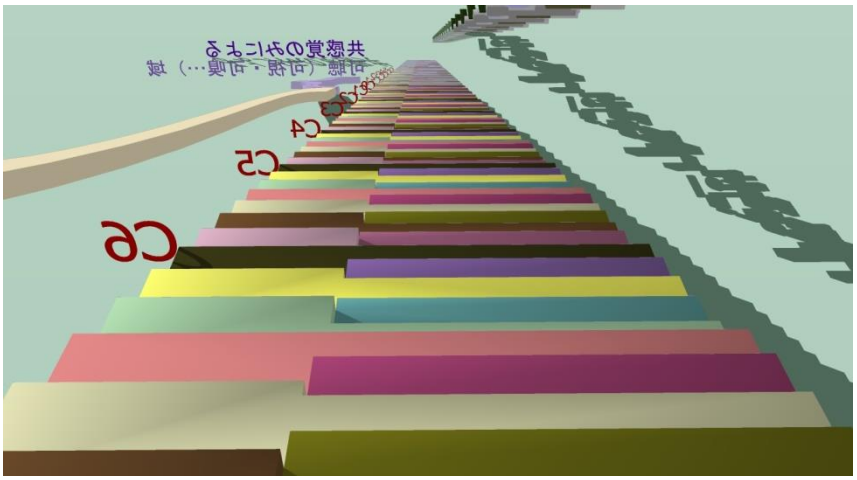

聴覚による可聴域
（共感覚も併用）
C7
C6
C5
C4
C3
C2
C1
C0

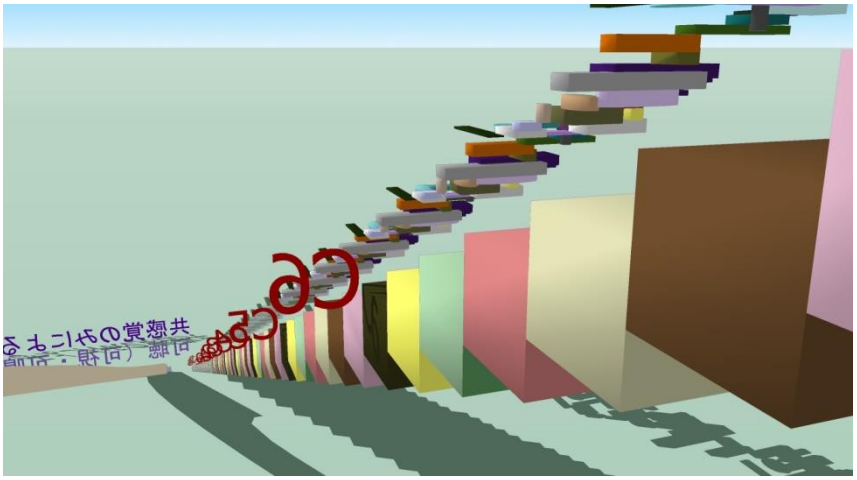

【参考】コウモリの可聴域
共感覚のみによる
可聴（可視・可嗅…）域
C14
C13
C12
C11
C10

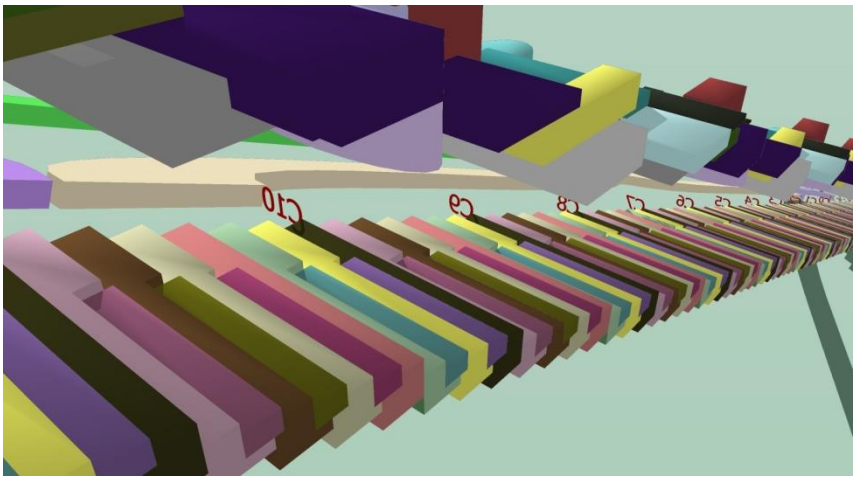

C22
C21
C20
C19
C18
【参考】コウモリの可聴域
C17
C16
C15
共感覚のみによる
可聴（可視・可嗅…）域
C14

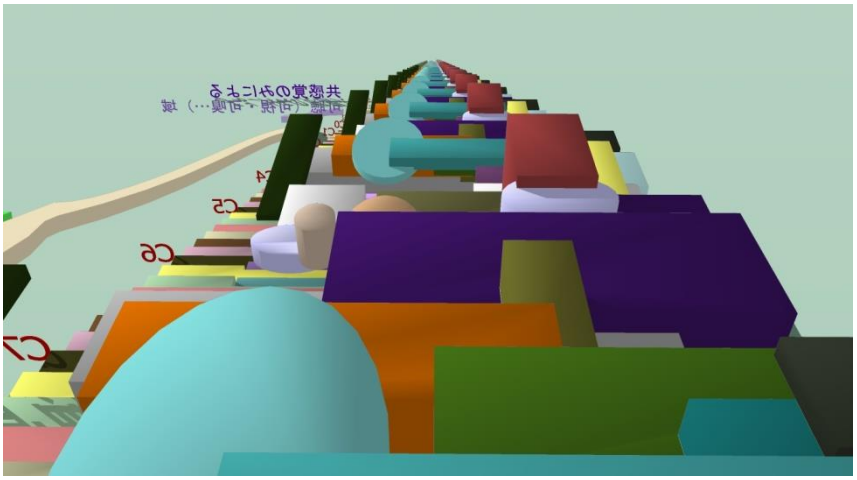





共感覚のみにとる
可聴（可視・可嗅…）域
C6
C5
C4
C3
C2







岩崎純一の共感覚記憶データベース

二〇一四年十月十一日　起筆
二〇一五年一月十九日　公開
二〇一六年九月十一日　最終更新

別添資料を見よ。

岩崎純一の共感覚記憶データベース（デパートのフロアガイド版＆３Ｄ映像操作版）

二〇一四年十月十一日　起筆
二〇一五年一月十九日　公開
二〇一七年四月三十日　最終更新

岩崎純一の共感覚記憶データベースの概要と目的、ご覧いただく際のご体調などの注意点
岩崎純一の共感覚記憶データベース（具体例一覧）
岩崎純一の共感覚記憶データベース（脳内共感覚デパートのフロアガイド版）

岩崎純一の共感覚記憶データベース（3D 映像操作版）

岩崎純一の共感覚記憶データベース

岩崎純一の共感覚記憶データベースの概要と目的、ご覧いただく際のご体調などの注意点

私は、共感覚と呼ばれる感覚を持っています。また、昔ほどではないですが、直観像記憶などの知覚様態や閃輝暗点などの症状も持っています。

まず、共感覚というものが何であるのかよく分からず、かつ知ってみたい方は、メニュー欄や以下の基本的なページや私のサイト全般からご覧いただければ幸いです。

（共感覚に触れてみて、嫌悪感・抵抗感を覚えた方は、当コンテンツをご覧にならないことをお勧めします。）

三十歳を過ぎ、これからは共感覚（自分にとって生涯を通じて大切な実感）と実生活（社会において自分に求められている能力）との距離がよりいっそう広がっていくと思われる予感が少しでも出てきた今のうちに、共感覚から学んだ楽しい気分を忘却の彼方に追いやらないためにも、私が共感覚で記憶・知覚・認知・認識・思考してきた物事を私の脳内に架空のデータセンターを建設する形で整理していく予定です。いわば脳内のデフラグといったところです。

「データセンター」や「デフラグ」と言っても、あくまでもコンピューター用語による喩えで、私自身がコンピューターになるわけがなく、現実には一人の生身の人間としての個人的でアナログ的な脳内作業の公表になると思います。

そのため、共感覚者の方々にも、共感覚をお持ちでない方々にも、気軽に楽しんだり笑ったりしながらご覧いただけるのではないかと思います。

ただし、ゲーデルの不完全性定理の例のように、私が数理論理学や超数学の証明・意味内容を共感覚で理解している点など、難解な学問についての項目は、閲覧者の皆様の共感覚の有無にかかわらず、気軽にお読みいただけるとは到底考えられませんし、もしかしたら、特にご体調が悪い状態でご覧になるなどした場合、わけが分からず

気分が悪くなったり頭痛や吐き気がしたりする方もいらっしゃるかもしれません。十分にご注意いただき、ご遠慮なく飛ばし読みしていただいて結構です。

また、共感覚者の皆様にとっては、例に挙げた同じ知覚・認知の対象が私とは全く異なる色彩に見えたり音声に聞こえたりしているかと思いますので、ご無理のない程度に（ご気分・ご体調を崩さない程度に）ご覧いただければ幸いです。

必要に応じ、ユーザー名・パスワード共に「iwasakij」でご覧下さい。

★「脳内デパート版」のほうは、サブタイトルに「私が共感覚を使って記憶・知覚・認知・認識・思考している物事の一覧」と題して、まだサイト内に具体例（ページ・ファイル）を掲載していないものも挙げています。

岩崎純一の共感覚記憶データベース（具体例一覧）

私の共感覚は主に、基本から応用まで、以下の順に積み上げられてきたものと言え、サイトでもこの分類で紹介しています。

基本的な共感覚（二〇〇五年の初執筆・初公表時の内容）

基本的な共感覚の続編（詳細な解説・画像・動画）

漢字の共感覚色一覧

数字についての共感覚

「文字よ、立て。」についての共感覚

「文字が寝そべる。」についての共感覚

円周率についての共感覚

音階についての共感覚

応用的な共感覚（詳細な解説・画像・動画）

将棋についての共感覚

日本地図についての共感覚

世界地図についての共感覚

自動車についての共感覚（日産自動車、スカイラインを例に）

鉄道についての共感覚（東京メトロ、都営地下鉄、丸ノ内線を例に）

ゲーデルの不完全性定理の証明についての共感覚

元素周期表についての共感覚

音域表と聴覚・共感覚

和歌を詠む際に脳内に出現する風景のＣＧ画像化

ミラータッチ共感覚図解

対女性共感覚に関する種々の試み

音楽『花　・共感覚者五十人による・』

このほか、私の知覚世界についての各種解説も掲載しています。

私の知覚世界（1）
私の知覚世界（2）
直観像記憶と共感覚
超音波知覚者コミュニティ東京

岩崎純一の共感覚記憶データベース（脳内共感覚デパートのフロアガイド版）

岩崎純一の共感覚記憶データベース
脳内共感覚デパートのフロアガイド版

共感覚データベース（脳内共感覚デパートのフロアガイド版　「～私が共感覚を使って記憶・知覚・認知・認識・思考している物事の一覧　～」）（PDF）

岩崎純一の共感覚記憶データベース（3D映像操作版）
（二〇一八年七月十四日追記：現在は廃止。当時の画面のスクリーンショットを掲載する。）

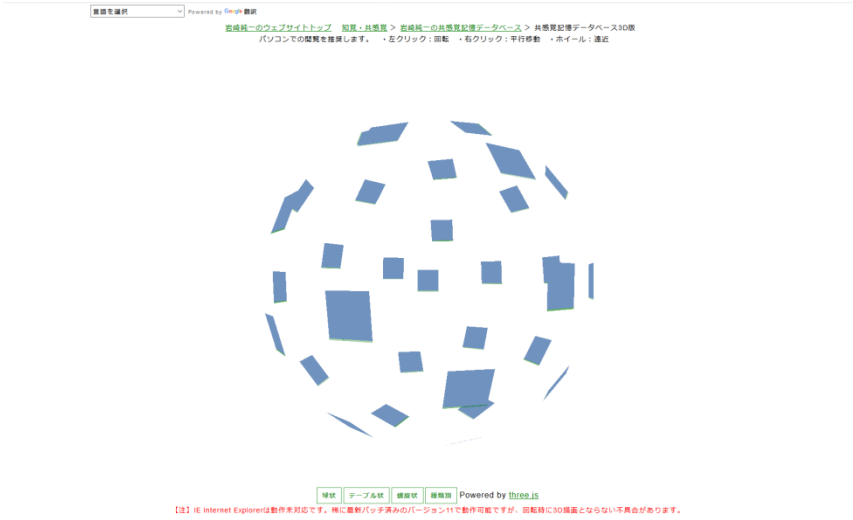
岩崎純一の共感覚記憶データベース
3D映像操作版

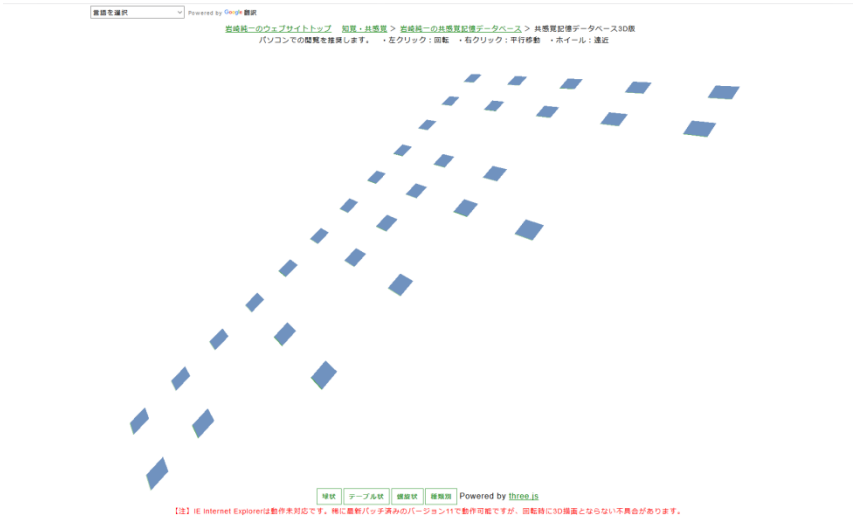
●閲覧推奨環境
OpenGL 2.0 以上をサポートするビデオカード
WebGL 1.0 以上をサポートするブラウザ
Microsoft Edge Google Chrome Mozilla Firefox Opera Safari
Microsoft Edge、Google Chrome、Mozilla Firefox、Opera、Safari

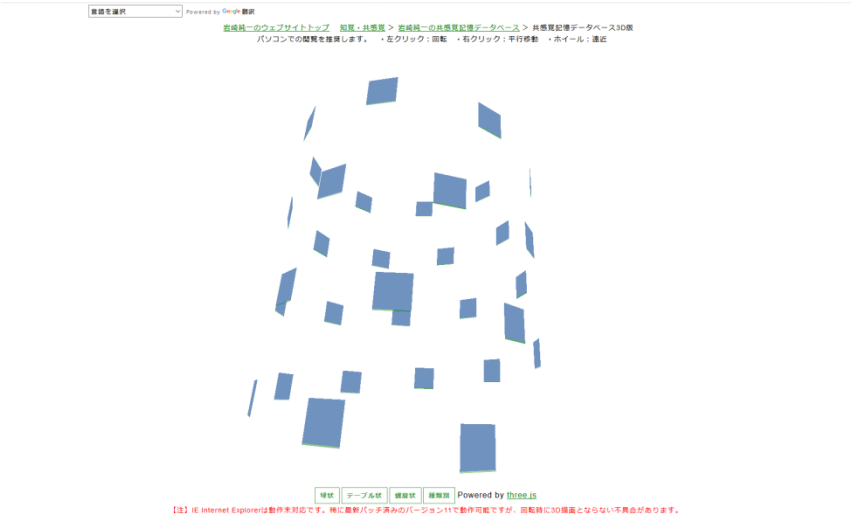
【注】IE Internet Explorer は動作未対応です。稀に最新パッチ済みのバージョン11で動作可能ですが、回転時に3D描画とならない

共感覚データベース（３Ｄ映像操作版）

不具合があります。

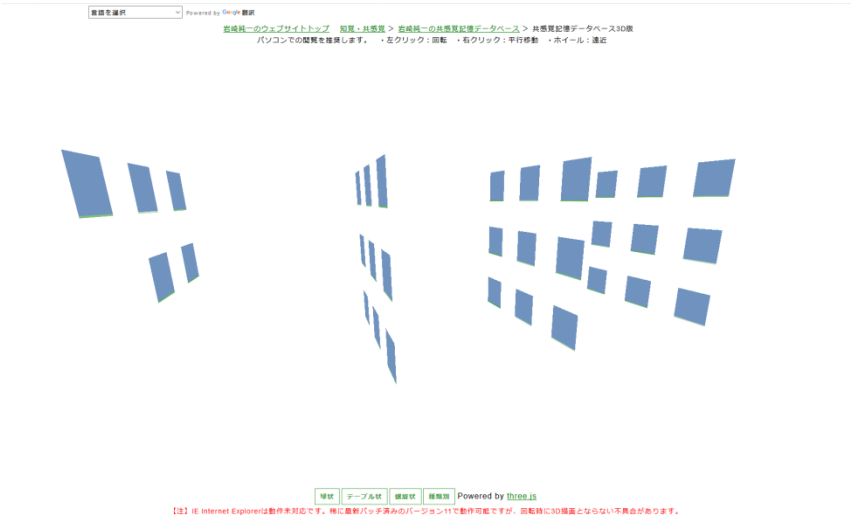






共感覚公表十年目の記念コンテンツの公表と多少の不安

二〇一五年一月十九日　起筆、擱筆、公開



（二〇一八年七月十四日追記：現在、岩崎の旧サイトの内容は『全集』に収録。）

サイトで初めて共感覚を公表してから十年目に入りました。（正しくは、十年目に入ったことに今年に入って気づきました。）

そこで、作りためている共感覚記録（データベース）の一部（将棋・地図・自動車・鉄道・数学など）をサイトで公表することにしました。まだ追加する予定です。

http://iwasakijunichi.net/synaesthesia-database/

遊び心として、脳内デパートのフロアガイド版と、回転して遊べる３Ｄ映像操作版も作成してみました。

詳しい更新内容は、更新情報ブログをご覧下さい。

それから、私の杞憂かもしれませんが、共感覚の例の中には、共感覚に慣れていない閲覧者が安易にご覧になると、わけが分からず気分・体調が悪くなるようなものもあるかもしれず（過去に私の共感覚の具体例に仰天して体調を崩し、逆に謝られたこともあります）、データベースのトップページには、閲覧時のご体調などに関する一応の注意書きを添えておきました。

また、共感覚者が閲覧された場合も、共感覚色が当然私とは異なるかと思いますので、ご無理のないようにご覧いただければと思います。

いずれの場合も、ほとんどは笑い話で終わりますし、それで全くかまわないのですが、とりわけ初めて共感覚に触れる方々については、稀に先述のようなケースがあります。私も閲覧者の体調を悪くするために公表するわけではないので、気になるところではあります。

おそらく、共感覚に慣れていない方々にとっては、悪気はなく、単に一種のタブーか都市伝説、神秘主義宗教にでも出会ったような衝撃を受けているのだろうと、個人的には思います。私は、サイトで精神疾患全般も扱っているので、その話題さえも抵抗がなく、嫌な気も全くしないのですが、ともかく、こういった方々の心因反応としては「急性ストレス反応」に近いものがあるかもしれません。

もちろん、共感覚の場合は、もはや同じ共感覚というカテゴリの中でも学者・研究者が新説を生み出し続けなければならないほど、（特に海外では）すでにありふれた学術テーマであることを告げれば、特に問題なく話が収まるのですが。

一方で、知人の子供たちに私の共感覚の例を見せると、親が「岩崎さん、ヘンなものをウチの子に教え込まないで下さい」というような空気を出してくるのに、子供のほうが最初からキャーキャーと喜んでいます。やはり、共感覚は子供たちの世界認識のほうに親和性が高いのだと改めて感じます。

というわけで、このままヘンな大人（自称「子供たちの気持ちを本当に考えている大人」）でいようかなと考えています。

大幅に話がずれました。

また、サイト自体の運営開始からは十一年目ですが、記念にサイトのサブタイトルとして、ミシェル＝フーコーの用語を用いた"Niches of Episteme"（知のすきま）を追加しました。解説もプロフィールのページに書いてみました。

閲覧者の皆様へのお願い

二〇一五年一月二六日　起筆、擱筆、公開

以前から気になっていて、特に大きな問題は起きていないのでここに書いたことはなかったのですが、万が一の時のために（私自身のことというよりは、共感覚者や共感覚にご関心のある皆様が混乱しないために）、一応書いておきます。

いくつかのネット掲示板で、私本人を装い、私のサイトにリンクして私の共感覚を紹介し、質問を受け付けて答えているなどの例が見られます。回答には、私のサイトの文章を引用していることもあるようで、一見するときちんとした文章になっているようですが、それでも内容的に誤っている場合が見受けられます。（それよりもまず、その労力が大変そうだなと思ってしまいますが。）

私は、自分のサイト、ブログ、登録しているSNS以外では、そのような共感覚に関するネット活動を一切おこなっておりませんので、念頭に置いていただけると幸いです。「2ちゃんねる」などの外部掲示板において私が自分の共感覚を紹介したり共感覚の質問に回答しているようなことは一切ございませんので、くれぐれもご注意下さい。

基本的に、大事なご質問については、私宛てに直接メールやメールフォーム、SNSのメッセージにてお送りいただき、私からの直接の返信をお待ちいただくことを強くお勧めします。

（ご本名の記載がなく、ニックネームだけですと、こちらからの返信が遅れる場合もございますが、それでも必ずご質問には答えて返信させていただいております。）

もちろん、単に外部掲示板で、私の共感覚に言及したり、法律やこのサイトの断り書きの範囲内で引用・転載して下さることは、大変ありがたく、禁止事項では毛頭ありません。

何卒よろしくお願い致します。

東京工芸大学芸術学部デザイン学科からのインタビュー

二〇一七年十一月四日　インタビュー開始
二〇一七年十二月七日　インタビュー終了

一般利用者には非公開。閲覧希望者は個別に岩崎まで問い合わせよ。